



坊っちゃん

夏目漱石



青空文庫



青空
文庫

親おやゆず譲りの無鉄砲むてつぱうで小供の時から損ばかりしている。

小学校に居る時分学校の二階から飛び降りて一週間ほど腰こしを抜ぬかした事がある。なぜそんな無闇むやみをしたと聞

く人があるかも知れぬ。別段深い理由でもない。新築

の二階から首を出していたら、同級生の一人が冗談じょうだんに、

いくら威張いばつても、そこから飛び降りる事は出来まい。

弱虫じやくちゆうやーい。と囃はやしたからである。小使こづかいに負ぶさつて

帰つて来た時、おやじが大きな眼めをして二階にぐらいから飛び降りて腰を抜かす奴やつがあるかと云いつたから、この次は抜かさずに飛んで見せますと答こたえた。

親類きんれいのものから西洋製のナイフを貰もらつて奇麗きれいな刃はを日に翳かざして、友達ともだちに見せていたら、一人が光る事は光るが切れそうもないと云いつた。切れぬ事があるか、何でも切つてみせると受け合あつた。そんなら君の指を切つてみると注文したから、何だ指ぐらいこの通りだと右の手の親指の甲こうをはすに切り込こんだ。幸さいわいナイフが小さいのと、親指の骨が堅かたかつたので、今だに親指

は手に付いている。しかし創痕きずあとは死ぬまで消えぬ。

庭を東へ二十歩に行き尽すと、南上がりつくにいささかばかりの菜園があつて、真中まんなかに栗くりの木が一本立っている。これは命より大事な栗だ。実の熟する時分は起き抜けに背戸せどを出て落ちた奴を拾つてきて、学校で食う。菜園の西側が山城屋やましろやという質屋の庭続きで、この質屋に勘太郎かんたろうという十三四の倅せがれが居た。勘太郎は無論弱虫である。弱虫の癖くせに四つ目垣おとりどを乗りこえて、栗を盗みぬすにくる。ある日の夕方折戸おとりどの蔭かげに隠れて、とうとう勘太郎を捕まえてやつた。その時勘太郎は逃げ路にを失つみち

て、いっしょうけんめい一生懸命に飛びかかってきた。向うは二つばかり年上である。弱虫だが力は強い。鉢はちの開いた頭を、こつちの胸へ宛あてててぐいぐい押おした拍子ひょうしに、勘太郎の頭がすべって、おれの袷あわせの袖そでの中にはいった。邪魔じやまになつて手が使えぬから、無暗むあんに手を振ふつたら、袖の中にある勘太郎の頭が、右左へぐらぐら靡なびいた。しまいに苦しがつて袖の中から、おれの二の腕うでへ食い付いた。痛かつたから勘太郎を垣根へ押しつけておいて、足搦あしがらをかけて向うへ倒たおしてやった。山城屋の地面は菜園より六尺がた低い。勘太郎は四つ目垣を半分崩くずして、自

分の領分へ真逆様に落ちて、ぐうと云った。勘太郎が落ちるときに、おれの袷の片袖がもげて、急に手が自由になった。その晩母が山城屋に詫びに行つたついでに袷の片袖も取り返して来た。

この外いたずらは大分やつた。大工の兼公と肴屋の角をつれて、茂作の人参畠をあらした事がある。人参の芽が出揃わぬ処へ藁が一面に敷いてあつたから、その上で三人が半日相撲をとりつづけに取つたら、人参がみんな踏みつぶされてしまった。古川の持っている田圃の井戸を埋めて尻を持ち込まれた事もある。太い

孟宗の節を抜いて、深く埋めた中から水が湧き出て、そこいらの稲にみずがかかる仕掛であつた。その時分はどんな仕掛か知らぬから、石や棒ちぎれをぎゅうぎゅう井戸の中へ挿し込んで、水が出なくなつたのを見届けて、うちへ帰つて飯を食つていたら、古川が真赤になつて怒鳴り込んで来た。たしか罰金を出して済んだようである。

おやじはちつともおれを可愛がつてくれなかつた。母は兄ばかり鼻屑ひいきにしていた。この兄はやに色が白くつて、芝居の真似まねをして女形おんながたになるのが好きだつた。

おれを見る度にこいつはどうせ碌ろくなものにはならないと、おやじが云った。乱暴で乱暴で行く先が案じられると母が云った。なるほど碌なものにはならない。ご覧の通りの始末である。行く先が案じられたのも無理はない。ただ懲役ちやうえきに行かないで生きているばかりである。

母が病気で死ぬ二三日にさんち前まへ台所だいしよで宙返りちゆうかえりをしてへつっいの角かどで肋骨あばらほねを撲うつて大いに痛かった。母が大層おこ怒つて、お前まへのようなものの顔は見たくないと云うから、親類しんるいへ泊とまりに行っていた。するととうとう死んだと云

う報知しらせが来た。そう早く死ぬとは思わなかった。そんな大病なら、もう少し大人おとなしくすればよかつたと思つて帰つて来た。そうしたら例の兄がおれを親不孝だ、おれのために、おつかさんが早く死んだんだと云つた。口惜くやしかつたから、兄の横つ面を張つて大變叱しかられた。母が死んでからは、おやじと兄と三人で暮くらしていた。おやじは何にもせぬ男で、人の顔さえ見れば貴様は駄目だめだ駄目だと口癖くせのように云っていた。何が駄目なんだか今に分らない。妙みょうなおやじがあつたもんだ。兄は実業家になるとか云つてしきりに英語を勉強して

た。元来女のような性分で、ずるいから、仲がよくなかった。十日に一遍ぐらいの割で喧嘩をしていた。あの時将棋をさしたら卑怯な待駒をして、人が困ると嬉しそうに冷やかした。あんまり腹が立ったから、手に在った飛車を眉間へ擲きつけてやった。眉間が割れて少々血が出た。兄がおやじに言付けた。おやじがおれを勘当すると言い出した。

その時はもう仕方がないと観念して先方の云う通り勘当されるつもりでいたら、十年来召し使っている清という下女が、泣きながらおやじに詫まっつて、ようや

くおやじの怒りが解けた。それにもかかわらずあまり
おやじを怖いとは思わなかった。かえつてこの清と云
う下女に気の毒であつた。この下女はもと由緒のある
ものだつたそうだが、瓦解のときに零落して、つい
奉公までするようになったのだと聞いている。だから
婆さんである。この婆さんがどういふ因縁か、おれを
非常に可愛がつてくれた。不思議なものである。母も
死ぬ三日前に愛想をつかした——おやじも年中持て余
している——町内では乱暴者の悪太郎と爪弾きをする
——このおれを無暗に珍重してくれた。おれは到底人

に好かれる性たちでないとおきらめていたから、他人から木の端はしのように取り扱あつかわれるのは何とも思わない、かえつてこの清のようにちやほやしてくれるのを不審ふしんに考えた。清は時々台所で人の居ない時に「あなたは真まつ直すぐでよいご気性だ」と賞ほめる事が時々あった。しかしおれには清の云う意味が分からなかつた。好いい気性なら清以外のものも、もう少し善くしてくれるだろうと思つた。清がこんな事を云う度におれはお世辞せじは嫌きらいだと答えるのが常であつた。すると婆さんはそれだから好いご気性ですと云つては、嬉しそうにおれの

顔を眺ながめている。自分の力でおれを製造して誇ほこってるように見える。少々気味がわるかった。

母が死んでから清はいよいよおれを可愛がった。

時々時々は小供心になぜあんなに可愛がるのかと不審に思った。つまらない、廃よせばいいのにと思った。気の

毒だと思った。それでも清は可愛がる。折々は自分の

小遣こづかいで金鍰きんつばや紅梅焼こうばいやきを買ってくれる。寒い夜などは

ひそかに蕎麦粉そばこを仕入れておいて、いつの間にか寝ねて

いる枕元まくらもとへ蕎麦湯を持って来てくれる。時には

鍋焼なべやき餛飩うどんさえ買ってくれた。ただ食い物ばかりではな

い。靴足袋くつたびももらつた。鉛筆えんぴつも貰つた、帳面も貰つた。これはずっと後の事であるが金を三円ばかり貸してくれた事さえある。何も貸せと云つた訳ではない。向うで部屋へ持つて来てお小遣いがなくてお困りでしょう、お使いなさいと云つてくれたんだ。おれは無論入らな
いと云つたが、是非使えと云うから、借りておいた。
実は大変嬉しかった。その三円を蝦蟇がまぐち口へ入れて、懐ふところ
へ入れたなり便所へ行つたら、すぼりと後架こうかの中へ落おと
してしまつた。仕方がないから、のそのそ出てきて実
はこれこれだと清に話したところが、清は早速竹の棒

を捜さがして来て、取つて上げますと云つた。しばらくすると井戸端いどばたでざあざあ音がするから、出てみたら竹の先へ蝦蟇ひも口の紐ひもを引き懸かけたのを水で洗つていた。それから口をあけて壺いちえんさつ円札を改めたら茶色になつて模様が消えかかつていた。清は火鉢で乾かわかして、これでいいでしょうと出した。ちよつとかいでみて臭くさいやと云つたら、それじゃお出しなさい、取り換かえて来て上げますからと、どこでどう胡魔化ごまかしたか札の代りに銀貨を三円持つて来た。この三円は何に使つたか忘れてしまった。今に返すよと云つたぎり、返さない。今と

なつては十倍にして返してやりたくても返せない。

清が物をくれる時には必ずおやじも兄も居ない時に限る。おれは何が嫌いだと云つて人に隠れて自分だけ得をするほど嫌いな事はない。兄とは無論仲がよくな
いけれども、兄に隠して清から菓子かしや色鉛筆を貰いたくはない。なぜ、おれ一人にくれて、兄さんには遣やら

ないのかと清に聞く事がある。すると清は澄すましたもので

お兄様あにいさまはお父様とうさまが買つてお上げなさるから構いませ

んと云う。これは不公平である。おやじは頑固がんこだけ

ども、そんな依怙えこひ蟲負いぎはせぬ男だ。しかし清の眼から

見るとそう見えるのだらう。全く愛に溺おぼれていたに違ちがいない。元は身分のあるものでも教育のない婆さんだから仕方がない。単にこればかりではない。鼻負目は恐ろしいものだ。清はおれをもつて将来立身出世して立派なものになると思い込んでいた。その癖勉強をすゝめる兄は色ばかり白くつて、とても役には立たないと一人できめてしまった。こんな婆さんに逢あつては叶かなわない。自分の好きなものは必ずえらい人物になつて、嫌いなひとはきつと落ち振れるものと信じている。おれはその時から別段何になると云りようけんう了見もなかつた。し

かし清がなるなると云うものだから、やつぱり何かに成れるんだろうと思つていた。今から考えると馬鹿馬鹿しい。ある時などは清にどんなものになるだろうと聞いてみた事がある。ところが清にも別段の考えもなかつたようだ。ただ手車てぐるまへ乗つて、立派な玄関げんかんのある家をこしらえるに相違そういないと云つた。

それから清はおれがうちでも持つて独立したら、一所いっしょになる気でいた。どうか置いて下さいと何遍も繰くり返して頼んだ。おれも何だかうちが持てるような気がして、うん置いてやると返事だけはしておいた。と

ころがこの女はなかなか想像の強い女で、あなたはど
こがお好き、こうじまち麴町ですかあざぶ麻布ですか、お庭へぶらんこ
をおこしえ遊ばせ、西洋間は一つでたくさんですな
どと勝手な計画を独りで並ならべていた。その時は家なん
か欲しくも何ともなかった。西洋館も日本建にほんだても全く不
用であつたから、そんなものは欲しくないと、いつで
も清に答えた。すると、あなたは欲がすくなくつて、
心が奇麗だと云つてまた賞めた。清は何と云つても賞
めてくれる。

母が死んでから五六年の間はこの状態で暮していた。

おやじには叱られる。兄とは喧嘩をする。清には菓子
を貰う、時々賞められる。別に望みもない。これでた
くさんだと思っていた。ほかの小供も一概いちがいにこんなも
のだろうと思っていた。ただ清が何かにつけて、あな
たはお可哀想かわいそうだ、不仕合ふしあわせだと無暗に云うものだから、
それじゃ可哀想で不仕合せなんだろうと思つた。その
外に苦になる事は少しもなかつた。ただおやじが小遣
いをくれないには閉口した。

母が死んでから六年目の正月におやじも卒中で亡く
なつた。その年の四月におれはある私立の中学校を卒

業する。六月に兄は商業学校を卒業した。兄は何とか会社の九州の支店に口があつて行かなければならん。おれは東京でまだ学問をしなければならぬ。兄は家を買つて財産を片付けて任地へ出立すると云い出した。おれはどうでもするがよかろうと返事をした。どうせ兄の厄介やっかいになる気はない。世話をしてくれるにしたところで、喧嘩をするから、向うでも何とか云い出すに極きまっている。なまじい保護を受ければこそ、こんな兄に頭を下げなければならぬ。牛乳配達をしても食つてられると覚悟かくごをした。兄はそれから道具屋を呼んで

来て、先祖代々の瓦落多がらくたを二束三文にそくさんもんに売った。家屋敷いえやしきはある人の周旋しゅうせんである金満家に譲った。この方は大分金になったようだが、詳しい事は一向知らぬ。おれは一ヶ月以前から、しばらく前途の方向のつくまで神田おがわまちの小川町へ下宿していた。清は十何年居たうちが人手わたに渡るのを大いに残念がったが、自分のものでないから、仕様がなかった。あなたがもう少し年をとっていらつしやれば、ここがご相続が出来ますものとしきりに口説いていた。もう少し年をとって相続が出来るものなら、今でも相続が出来るはずだ。婆さんなんには何も

知らないから年さえ取れば兄の家がもらえると信じている。

兄とおれはかように分れたが、困つたのは清の行く先である。兄は無論連れて行ける身分でなし、清も兄の尻にくっついて九州下りくんだまで出掛ける気は毛頭なし、と云つてこの時のおれは四畳半よじようはんの安下宿こもに籠つて、それすらもいざとなれば直ちに引き払はらわねばならぬ始末だ。どうする事も出来ん。清に聞いてみた。どこかへ奉公でもする気かねと云つたらあなたがおうちを持つて、奥おくさまをお貰いになるまでは、仕方がないか

ら、甥おいの厄介になりましたよとようやく決心した返事をした。この甥は裁判所の書記でまず今日には差支さしつかえなく暮くしていたから、今までも清に来るなら来いと二三度勧めたのだが、清はたとい下女奉公はしても年来住み馴なれた家うちの方がいいと云つて応じなかつた。しかし今の場合知らぬ屋敷へ奉公ほうこう易がえをして入らぬ気きが兼ねを仕直すより、甥の厄介になる方がましだと思つたのだらう。それにしても早くうちを持つての、妻さいを貰もらえの、来て世話をすると云う。親身しんみの甥よりも他人のおれの方が好きなのだらう。

九州へ立つ二日前兄が下宿へ来て金を六百円出してこれを資本にして商買しょうばいをするなり、学資にして勉強をするなり、どうしても随意ずいに使うがいい、その代りあとは構わないと云った。兄にしては感心なやり方だ、何の六百円ぐらい貰わんでも困りはせんと思つたが、例に似ぬ淡泊たんぱくな処置が気に入ったから、礼を云つて貰つておいた。兄はそれから五十円出してこれをついでに清に渡してくれと云つたから、異議なく引き受けた。二日立つて新橋の停車場ていしやばで分れたぎり兄にはその後一遍も逢わない。

おれは六百円の使用法について寝ながら考えた。商買をしたって面倒めんどくさくつて旨うまく出来るものじゃなし、ことに六百円の金で商買らしい商買がやれる訳でもなからう。よしやれるとしても、今のようじゃ人の前へ出て教育を受けたと威張れないからつまり損になるばかりだ。資本などはどうでもいいから、これを学資にして勉強してやろう。六百円を三に割って一年に二百円ずつ使えば三年間は勉強が出来る。三年間一生懸命にやれば何か出来る。それからどこの学校へはいろいろと考えたが、学問は生来しょうらいどれもこれも好きでない。こ

とに語学とか文学とか云うものは真平まっぴらご免めんだ。新体詩などと来ては二十行あるうちで一行も分らない。どうせ嫌いなものなら何をやっても同じ事だと思つたが、幸い物理学校の前を通り掛かつたら生徒募集の広告が出ていたから、何も縁だと思つて規則書をもらつてすぐ入学の手続きをしてみました。今考えるとこれも親譲りの無鉄砲から起おこつた失策だ。

三年間まあ人並ひとなみに勉強はしたが別段たちのいい方でもないから、席順はいつでも下から勘定かんじょうする方が便利であつた。しかし不思議なもので、三年立つたらとう

とう卒業してしまった。自分でも可笑おかしいと思つたが苦情を云う訳もないから大人しく卒業しておいた。

卒業してから八日目に校長が呼びに来たから、何か用だろうと思つて、出掛けて行つたら、四国辺のある中学校で数学の教師が入る。月給は四十円だが、行つてはどうだという相談である。おれは三年間学問はしたが実を云うと教師になる気も、田舎いなかへ行く考えも何もなかつた。もつとも教師以外に何をしようと思つてもなかつたから、この相談を受けた時、行きましようと思つた。これそくせきも親譲りの無鉄砲たが祟たつ

たのである。

引き受けた以上は赴任ふにんせねばならぬ。この三年間は四畳半に蟄居ちつきよして小言はただの一度も聞いた事がない。喧嘩もせず済んだ。おれの生涯のうちでは比較的呑気ひかくてきのんきな時節であつた。しかしこうなると四畳半も引き払わなければならぬ。生れてから東京以外に踏み出したのは、同級生と一所かまくらに鎌倉へ遠足した時ばかりである。今度は鎌倉どころではない。大変な遠くへ行かねばならぬ。地図で見ると海浜で針の先ほど小さく見える。どうせ碌な所ではあるまい。どんな町で、

どんな人が住んでるか分らん。分らんでも困らない。心配にはならぬ。ただ行くばかりである。もつとも少々面倒臭い。

家を畳たたんでからも清の所へは折々行つた。清の甥と
いうのは存外結構な人である。おれが行くたびに、居お
りさえすれば、何くれと款待もてなしてくれた。清はおれ
を前へ置いて、いろいろおれの自慢じまんを甥に聞かせた。

今に学校を卒業すると麴町辺へ屋敷を買つて役所へ通
うのだなどと吹聴ふいちやうした事もある。独りで極きめて一人ひとりで
喋舌しゃべるから、こつちは困こまつて顔を赤くした。それも

一度や二度ではない。折々おれが小さい時寝小便をした事まで持ち出すには閉口した。甥は何と思つて清の自慢を聞いていたか分らぬ。ただ清は昔風むかしふうの女だから、自分とおれの関係を封建時代ほうけんの主従しゅじゆうのように考えていた。自分の主人なら甥のためにも主人に相違ないと合点がてんしたものらしい。甥こそいい面の皮だ。

いよいよ約束が極まつて、もう立つと云う三日前に清を尋ねたら、北向きの三畳に風邪かぜを引いて寝ていた。おれの来たのを見て起き直るが早いか、坊ぼつちちゃんいっつ家うちをお持ちなさいますと聞いた。卒業さえすれば金

が自然とポケットの中に湧いて来ると思っている。そんなにえらい人をつらまえて、まだ坊っちゃんと呼ぶのはいよいよ馬鹿氣ている。おれは単簡に当分うちには持たない。田舎へ行くんだと云ったら、非常に失望した容子ようすで、胡麻塩ごましおの鬢びんの乱れをしきりに撫なでた。あまり気の毒だから「行く事ゆは行くがじき帰る。来年の夏休みにはきつと帰る」と慰なぐさめてやった。それでも妙な顔をしているから「何を見やげに買って来てやろう、何が欲しい」と聞いてみたら「越後えちごの笹飴ささあめが食べたい」と云った。越後の笹飴なんて聞いた事もない。第一方

角が違う。「おれの行く田舎には笹飴はなさそうだ」と云つて聞かしたら「そんなら、どつちの見当です」と聞き返した。「西の方だよ」と云うと「箱根のさきですか手前ですか」と問う。随分持てあました。

出立の日には朝から来て、いろいろ世話をやいた。来る途中とちゆう小間物屋で買って来たはみがき歯磨とようじ楊子とてぬぐい手拭をズツクの革鞄かばんに入れてくれた。そんな物は入らないと云つてもなかなか承知しない。車を並べて停車場へ着いて、プラットフォームの上へ出た時、車へ乗り込んだおれの顔をじつと見て「もうお別れになるかも知れ

「ません。随分ご機嫌きげんよう」と小さな声で云った。目に
涙なみだが一杯いっぱいたまっている。おれは泣かなかつた。しかし
もう少して泣くところであつた。汽車がよつぽど動き
出してから、もう大丈夫だいしやうぶだろうと思つて、窓から首を
出して、振り向いたら、やつぱり立っていた。何だか
大変小さく見えた。

二

ふうと云つて汽船がとまると、艇が岸を離れて、漕ぎ寄せて来た。船頭は真つ裸に赤ふんどしをしめている。野蛮な所だ。もつともこの熱さでは着物はきられまい。日が強いので水がやに光る。見つめていても眼がくらむ。事務員に聞いてみるとおれはここへ降りるのだそうだ。見るところでは大森ぐらいな漁村だ。人を馬鹿にしていらあ、こんな所に我慢が出来るもの

かと思つたが仕方がない。威勢いせいよく一番に飛び込んだ。続つづいて五六人は乗つたらう。外ほかに大きな箱を四つばかり積み込んで赤ふんは岸へ漕ぎ戻もどして来た。陸おかへ着いた時も、いの一い番に飛び上がつて、いきなり、磯いそに立つていた鼻たれ小僧こぞうをつらまえて中学校はどこだと聞いた。小僧はぼんやりして、知らんがの、と云つた。気の利かぬ田舎いなかものだ。猫ねこの額ぬかほどな町内の癖くせに、中学校のありかも知らぬ奴やつがあるものか。ところへ妙みょうな筒つつつぼうを着た男がきて、こつちへ来いと云うから、尾ついて行つたら、港屋とか云う宿屋へ連れて来た。や

な女が声を揃そろえてお上がりなさいと云うので、上がるのがいやになつた。門口へ立つたなり中学校を教えろと云つたら、中学校はこれから汽車で二里ばかり行かなくつちやいけないと聞いて、なお上がるのがいやになつた。おれは、筒っぽうを着た男から、おれの革鞄かばんを二つ引きたくつて、のそのそあるき出した。宿屋のものは変な顔をしていた。

停車場はすぐ知れた。切符きっぷも訳なく買った。乗り込んでみるとマッチ箱のような汽車だ。ごろごろと五分鐘ばかり動いたと思つたら、もう降りなければならぬ。

道理で切符が安いと思つた。たつた三錢である。それから車を傭やとつて、中学校へ来たたら、もう放課後で誰も居ない。宿直はちよつと用達ようたしに出たと小使こつかいが教えた。随分気楽ずいぶんな宿直がいるものだ。校長でも尋ねたずようかと思つたが、草臥くたびれたから、車に乗つて宿屋へ連れて行けと車夫に云い付けた。車夫は威勢よく山城屋やましろうやと云ううちへ横付けにした。山城屋とは質屋かんたろうの勘太郎の屋号と同じだからちよつと面白く思つた。

何だか二階の櫓子段はしごだんの下の暗い部屋へ案内した。熱くつて居られやしない。こんな部屋はいやだと云つた

らあいにくみんな塞ふさがつておりますからと云いながら革靴を抛ほうり出したまま出て行つた。仕方がないから部屋の中へはいつて汗あせをかいて我慢がまんしていた。やがて湯に入れと云うから、ざぶりと飛び込んで、すぐ上がつた。帰りがけに覗のぞいてみると涼すずしそうな部屋がたくさん空いている。失敬な奴だ。嘘うそをつきやあがつた。それから下女が膳ぜんを持って来た。部屋は熱あつかったが、飯は下宿のよりも大分旨うまかった。給仕をしながら下女がどちらからおいでになりましたと聞くから、東京から来たと答えた。すると東京はよい所でございましたよ

うと云つたから当り前あただと答えてやつた。膳を下げた
下女が台所へいつた時分、大きな笑い声が聞きこえた。く
だらないから、すぐ寝ねたが、なかなか寝られない。熱
いばかりではない。騒そうぞう々しい。下宿の五倍ぐらいやか
ましい。うとうとしたら清きよの夢ゆめを見た。清が越後えちごの
笹飴さひあめを笹ぐるみ、むしやむしや食っている。笹は毒だ
からよしたらよかろうと云うと、いえこの笹がお薬で
ございますと云いつて旨いそうに食っている。おれがあき
れ返つて大きな口を開いてハハハと笑つたら眼が覚
めた。下女が雨戸を明けている。相変らず空の底が突つ

き抜ぬけたような天気だ。

どうちゆう

道中どうちゆうをしたら茶代をやるものだと聞いていた。茶代をやらないと粗末そまつに取り扱あつかわれると聞いていた。こんな、狭せまくて暗い部屋へ押し込おめるのも茶代をやらないせいだろう。見すばらしい服装なをして、ズツクの革鞄かばんと毛繻子けじゆすの蝙蝠傘こうもりを提あげてるからだろう。田舎者の癖くせに人を見括みくつたな。一番茶代をやつて驚おどろかしてやろう。おれはこれでも学資のあまりを三十円ほど懐ふところに入れて東京を出て来たのだ。汽車と汽船の切符代と雑費を差し引いて、まだ十四円ほどある。みんなやつたつてこ

れからは月給を貰もらうんだから構まわらない。田舎者はしみつたれだから五円もやれば驚おどろいて眼まを廻まわすに極きまつている。どうするか見ろと済すまして顔を洗すすつて、部屋へ帰かえつて待つてると、夕べの下女が膳ぜんを持って来た。盆ぼんを持って給仕きよをしながら、やににやにや笑わらつてる。失敬しやくな奴だ。顔かほのなかをお祭りでも通りやしまし。これでもこの下女つらの面つらよりよっぽど上等だ。飯いを済すましてからにしようと思おもっていたが、癩しやくに障さわつたから、中途ちゆうとで五円札さつを一枚まい出して、あとでこれを帳場ちやうばへ持つて行いけと云いつたら、下女つらは変へんな顔かほをしていた。それか

ら飯を済ましてすぐ学校へ出懸けた。靴は磨いてなかつた。

学校は昨日車で乗りつけたから、大概の見当は分つている。四つ角を二三度曲がったらすぐ門の前へ出た。門から玄関までは御影石で敷きつめてある。きのうこの敷石の上を車でがらと通つた時は、無暗に仰山な音がするので少し弱つた。途中から小倉の制服を着た生徒にたくさん逢つたが、みんなこの門をはいって行く。中にはおれより背が高くつて強そうなのが居る。あんな奴を教えるのかと思つたら何だか気味が悪く

なつた。名刺めいしを出したら校長室へ通した。校長は薄髯うすひげのある、色の黒い、目の大きな狸たぬきのような男である。やにもつたいぶつていた。まあ精出して勉強してくれと云つて、恭うやうやしく大きな印の捺おさつた、辞令を渡わたした。この辞令は東京へ帰るとき丸めて海の中へ抛り込こんでしまった。校長は今に職員に紹介しょうかいしてやるから、一々その人にこの辞令を見せるんだと云つて聞かした。余計な手数だ。そんな面倒めんどうな事をするよりこの辞令を三日間職員室へ張り付けの方がましだ。

教員が控所ひかえじよへ揃そろうには一時間目の喇叭らっぱが鳴らなくて

はならぬ。大分時間がある。校長は時計を出して見て、
追々おいおいゆるりと話すつもりだが、まず大体の事を呑み込
んでおいてもらおうと云つて、それから教育の精神に
ついて長いお談義を聞かした。おれは無論いい加減に
聞いていたが、途中からこれは飛んだ所へ来たと思つ
た。校長の云うようにはとても出来ない。おれみたよ
うな無鉄砲むてつぽうなものをつらまえて、生徒の模範もはんになれの、
一校の師表しひょうと仰あおがれなくてはいかんの、学問以外に個
人の徳化とくかを及およぼさなくては教育者になれないの、と無
暗に法外な注文をする。そんなえらい人が月給四十円

で遙々はるばるこんな田舎へくるもんか。人間は大概似たもんだ。腹が立てば喧嘩けんかの一つぐらいいは誰でもするだろうと思つてたが、この様子じやめつたに口も聞けない、散歩も出来ない。そんなむずかしい役なら雇やとう前にこれこれだと話すがいい。おれは嘘うそをつくのが嫌きらいだから、仕方がない、だまされて来たのだとあきらめて、思い切りよく、ここで断ことわつて帰つちまおうと思つた。宿屋へ五円やつたから財布さいふの中には九円なにがししかない。九円じゃ東京までは帰れない。茶代なんかやらなければよかつた。惜おしい事をした。しかし九円だつ

て、どうかならない事はない。旅費は足りなくつても嘘をつくよりましだと思つて、到底とうていあなたのおつしやる通りにや、出来ません、この辞令は返しますと云つたら、校長は狸のような眼をぱちつかせておれの顔を見ていた。やがて、今のはただ希望である、あなたが希望通り出来ないのはよく知つているから心配しなくつてもいいと云いながら笑つた。そのくらいよく知つてるなら、始めから威嚇おどかささなければいいのに。

そう、こうする内に喇叭が鳴つた。教場の方が急にがやがやする。もう教員も控所へ揃いましたらうと云

うから、校長に尾いて教員控所へはいった。広い細長い部屋の周囲に机を並べてみんな腰をかけている。おれがはいったのを見て、みんな申し合せたようにおれの顔を見た。見世物じやあるまいし。それから申し付けられた通り一人一人の前へ行つて辞令を出して挨拶をした。大概是椅子を離れて腰をかかめるばかりであつたが、念の入つたのは差し出した辞令を受け取つて一応拝見をしてそれを恭しく返却した。まるで宮芝居の真似だ。十五人目に体操の教師へと廻つて来た時には、同じ事を何返もやるので少々じれつたくなつた。

向うは一度で済む。こつちは同じ所作しよさを十五返繰り返している。少しはひとの了見りようけんも察してみるのがいい。

挨拶をしたうちに教頭のなにがしと云うのが居た。

これは文学士だそうだ。文学士と云えば大学の卒業生だからえらい人なんだろう。妙みょうに女のような優しい声を出す人だった。もつとも驚いたのはこの暑いのにフランネルの襯衣しやつを着ている。いくらか薄い地うすには相違そういなくつても暑いには極つてる。文学士だけにご苦労千萬な服装なりをしたもんだ。しかもそれが赤シャツだから人を馬鹿ばかにしている。あとから聞いたらこの男は年が

年中赤シャツを着るんだそうだ。妙な病気があつた者だ。当人の説明では赤は身体からだに薬になるから、衛生のためにはわざわざ誂あつらえるんだそうだが、入らざる心配だ。そんならついでに着物も袴はかまも赤にすればいい。それから英語の教師に古賀こがとか云う大變顔色の悪わるい男が居た。大概顔の蒼あおい人は瘡やせてるもんだがこの男は蒼くふくれている。昔むかし小学校へ行く時分、浅井あさいの民たみさんと云う子が同級生にあつたが、この浅井のおやじがやはり、こんな色つやだった。浅井は百姓ひやくしやうだから、百姓になるとあんな顔になるかと清に聞いてみたら、そ

うじやありません、あの人はうらなりの唐茄子とうなすばかり
食べるから、蒼くふくれるんですと教えてくれた。そ
れ以来蒼くふくれた人を見れば必ずうらなりの唐茄子
を食った酬むくいだと思う。この英語の教師もうらなりば
かり食つてるに違ちがいない。もつともうらなりとは何の
事か今もつて知らない。清に聞いてみた事はあるが、
清は笑つて答えなかつた。大方清も知らないんだらう。
それからおれと同じ数学の教師に堀田ほったというのが居た。
これは逞たくましい毬栗坊主いがぐりぼうずで、叡山えいざんの悪僧あくそうと云うべき面構つらがまえ
である。人が叮寧ていねいに辞令を見せたら見向きもせず、や

あ君が新任の人か、ちと遊びに来給えアハハハと云つた。何がアハハハだ。そんな礼儀れいぎを心得ぬ奴の所へ誰が遊びに行くものか。おれはこの時からこの坊主やまあらしに山嵐あだなという渾名をつけてやった。漢学の先生はさすがに堅かたいものだ。昨日お着きで、さぞお疲れで、それでもう授業をお始めで、大分れいせいご励精で、——とのべつに弁じたのは愛嬌あいぎょうのあるお爺じいさんだ。画学の教師は全く芸人風だ。べらべらした透綾すきやの羽織を着て、扇子せんすをばちつかせて、お国はどちらでげす、え？ 東京？ そりや嬉しいうれい、お仲間が出来て……私わたしもこれで江戸えどっ子

ですと云つた。こんなのが江戸っ子なら江戸には生れたくないもんだと心中に考えた。そのほか一人一人についてこんな事を書けばいくらでもある。しかし際限がないからやめる。

挨拶が一通り済んだら、校長が今日はもう引き取つてもいい、もつとも授業上の事は数学の主任と打ち合せをしておいて、あさって明後日から課業を始めてくれと云つた。数学の主任は誰かと聞いてみたら例の山嵐であつた。いまいま忌々しい、こいつの下に働くのかおやおやと失望した。山嵐は「おい君どこにとま宿つてるか、山城屋か、う

ん、今に行つて相談する」と云い残して白墨はくぼくを持つて
教場へ出て行つた。主任の癖に向うから来て相談する
なんて不見識な男だ。しかし呼び付けるよりは感心だ。
それから学校の門を出て、すぐ宿へ帰ろうと思つた
が、帰つたつて仕方がないから、少し町を散歩してや
ろうと思つて、無暗に足の向く方があるき散らした。
県庁も見た。古い前世紀の建築である。兵營も見た。
麻布あざぶの聯隊れんたいより立派でない。大通りも見た。神楽坂かぐらざかを
半分に狭くしたぐらいな道幅みちはばで町並まちなみはあれより落ちる。
二十五万石の城下だつて高の知れたものだ。こんな所

に住んでご城下だなどと威張いばつてる人間は可哀かわい想そうなものだ。のだと考えながらくると、いつしか山城屋の前に出た。広いようでも狭いものだ。これで大抵たいていは見尽みつくしたのだらう。帰つて飯でも食おうと門口をはいった。帳場に坐すわっていたかみさんが、おれの顔を見ると急に飛び出してきてお帰り……と板の間へ頭をつけた。靴くつを脱ぬいで上がると、お座敷ざしきがあきましたからと下女まが二階へ案内をした。十五畳じゅうごの表二階で大きな床とこの間まがついている。おれは生れてからまだこんな立派な座敷へはいった事はない。この後いつは入れるか分らないから、

洋服を脱いで浴衣一枚ゆかたになつて座敷の真中まんなかへ大の字に寝てみた。いい心持ちである。

昼飯を食つてから早速清へ手紙をかいてやつた。おれは文章がまずい上に字を知らないから手紙を書くのが大嫌だいきらいだ。またやる所もない。しかし清は心配しているだろう。難船して死にやしないかなどと思つちや困るから、奮発ふんぱつして長いを書いてやつた。その文句はこうである。

「きのう着いた。つまらん所だ。十五畳の座敷に寝ている。宿屋へ茶代を五円やつた。かみさんが頭を板の

間へすりつけた。夕べは寝られなかった。清が笹飴を笹ごと食う夢を見た。来年の夏は帰る。今日学校へ行ってみんなにあだなをつけてやった。校長は狸、教頭は赤シャツ、英語の教師はうらなり、数学は山嵐、画学はのだいこ。今にいろいろな事を書いてやる。さようなら」

手紙をかいてしまったら、いい心持ちになって眠気ねむけがさしたから、最前のように座敷の真中へのびのびと大の字に寝た。今度は夢も何も見ないでぐっすり寝た。この部屋かいと大きな声がするので目が覚めたら、山

嵐がはいって来た。最前は失敬、君の受持ちは……と人が起き上がるや否や談判を開かれたので大いに狼狽ろうばいした。受持ちを聞いてみると別段むずかしい事もなさそうだから承知した。このくらいの事なら、明後日はおろか愚あした、明日から始めると云ったって驚ろかない。授業上の打ち合せが済んだら、君はいつまでこんな宿屋しゆくせんに居るつもりでもあるまい、僕ぼくがいい下宿を周旋しゆうせんしてやるから移りたまえ。外のものでは承知しないが僕が話せばすぐ出来る。早い方がいいから、今日見て、あす移つて、あさつてから学校へ行けば極りがいいと一人

で呑み込んでいる。なるほど十五畳敷にいつまで居る訳にも行くまい。月給をみんな宿料しゆくりように払はらつても追つかないかもしれぬ。五円の茶代を奮発ふんぱつしてすぐ移るのはちと残念だが、どうせ移る者なら、早く引き越こして落ち付く方が便利だから、そこところはよろしく山嵐たのに頼む事にした。すると山嵐はともかくもいつしよに来てみると云うから、行つた。町はずれの岡の中腹にある家で至極閑静かんせいだ。主人は骨董こつとうを売買するいか銀と云う男で、女房にようぼうは亭主ていしゆよりも四つばかり年嵩としかさの女だ。中学校に居た時ウィッチと云う言葉を習つた事がある

がこの女房はまさにウイツチに似ている。ウイツチ
だつて人の女房だから構わない。とうとう明日から引
き移る事にした。帰りに山嵐は通町とおうちょうで氷水を一杯奢ばいおごつ
た。学校で逢つた時はやに横風おうふうな失敬な奴だと思つた
が、こんなにいるいろ世話をしてくれるところを見る
と、わるい男でもなさそうだ。ただおれと同じように
せつかちで肝癩かんしやくもち持らしい。あとで聞いたらこの男が一
番生徒に人望があるのだそうだ。

三

いよいよ学校へ出た。初めて教場へはいつて高い所へ乗った時は、何だか変だった。講釈をしながら、おれでも先生が勤まるのかと思つた。生徒はやかましい。時々^{ずぬ}凶抜けた大きな声で先生と云^いう。先生には^{こた}応えた。今まで物理学校で毎日先生先生と呼びつけていたが、先生と呼ぶのと、呼ばれるのは雲泥^{うんでい}の差だ。何だか足の裏がむずむずする。おれは卑怯^{ひきょう}な人間ではない。

臆病おくびょうな男でもないが、惜おしい事に胆力たんりょくが欠けている。

先生と大きな声をされると、腹の減った時に丸の内
 午砲どんを聞いたような気がする。最初の一時間は何だか
 いい加減にやってしまった。しかし別段困った質問も
 掛かけられずに済んだ。控所ひかえじよへ帰つて来たら、山嵐がど
 うだいと聞いた。うんと単簡に返事したら山嵐は安
 心したらしかつた。

二時間目に白墨はくぼくを持つて控所を出た時には何だか敵
 地へ乗り込こむような気がした。教場へ出ると今度の組
 は前より大きな奴やつばかりである。おれは江戸えどっ子で

華奢きやしやに小作りせうざりに出来できているから、どうも高い所へ上あがっても押しおしが利きかない。喧嘩けんかなら相撲取すもうとりとでもやつてみせるが、こんな大僧おおぞうを四十人も前へ並ならべて、ただ一枚まいの舌したをたたいて恐縮きようしゆくさせる手際てがわはない。しかしこんな田舎者いなかものに弱身じやくみを見せると癖くせになると思おもつたから、なるべく大きな声こゑをして、少々せうじやう巻き舌まきしたで講釈かうしゃくしてやつた。最初のうちはじめは、生徒せいとも烟けむに捲まかれてぼんやりしていたから、それ見みろとますます得意とくいになつて、べらんなめい調めいぢやうを用もちいてたら、一番前いちばんまえの列れつの真中まんなかに居ゐた、一番強いちばんつよそうな奴やつが、いきなり起立きりつして先生せんせいと云いう。そら来

たと思ひながら、何だと聞いたたら、「あまり早くて分かんけれ、もちつと、ゆるゆる遣つて、おくれんかな、もし」と云つた。おくれんかな、もしは生温るい言葉だ。早過ぎるなら、ゆつくり云つてやるが、おれは江戸っ子だから君等の言葉は使えない、分らなければ、分るまで待つてるがいいと答えてやつた。この調子で二時間目は思つたより、うまく行つた。ただ帰りがけに生徒の一人がちよつとこの問題を解釈をしておくれんかな、もし、と出来そうもない幾何の問題を持って逼つたには冷汗を流した。仕方がないから何だか分ら

ない、この次教えてやると急いで引き揚げたら、生徒がわあと囃はやした。その中に出来ん出来んと云う声が聞きこえる。篋べらぼう棒め、先生だつて、出来ないのは当り前だ。出来ないのを出来ないと云うのに不思議があるもんか。そんなものが出来るくらいなら四十円でこんな田舎へくるもんかと控所へ帰つて来た。今度はどうだとまた山嵐が聞いた。うんと云つたが、うんだけでは気が済まなかつたから、この学校の生徒は分らずやだなと云つてやった。山嵐は妙みょうな顔をしていた。

三時間目も、四時間目も昼過ぎの一時間も大同小異

であつた。最初の日に出た級は、いずれも少々ずつ失敗した。教師ははたで見るとほど楽じゃないと思つた。

授業はひと通り済んだが、まだ帰れない、三時までばつ然ねんとして待つてなくてはならん。三時になると、受

持級の生徒が自分の教室を掃除そうじして報知しらせにくるから検

分をするんだそうだ。それから、出席簿しゅつせきぼを一応調べて

ようやくお暇ひまが出る。いくら月給で買われた身体からだだつ

て、あいた時間まで学校へ縛りしばつけて机と睨にらめつくら

をさせるなんて法があるものか。しかしほかの連中は

みんな大人おとなしくご規則通りやつてるから新参のおれば

かり、だだを捏ねるのもよろしくないと思つて我慢していた。帰りがけに、君何でもかんでも三時過まで学校にいさせるのは愚だぜと山嵐に訴えたら、山嵐はそうさアハハと笑つたが、あとから真面目になつて、君あまり学校の不平を云うと、いかんぜ。云うなら僕だけに話せ、随分妙な人も居るからなと忠告がましい事を云つた。四つ角で分れたから詳しい事は聞くひまがなかつた。

それからうちへ帰つてくると、宿の亭主がお茶を入れてましようと言つてやつて来る。お茶を入れると云う

からご馳走ちそうをするのかと思うと、おれの茶を遠慮えんりよなく入れて自分が飲むのだ。この様子では留守中るすちゆうも勝手に
お茶を入れましようを一人ひとりで履行りこうしているかも知れない。
亭主が云うには手前は書画骨董しよがこつとうがすぎで、とうとう
うこんな商買を内々で始めるようになりました。あなたも
お見受け申すところ大分ご風流でいらつしやるらしい。
ちと道楽かんゆうにお始めなすつてはいかがですと、飛
んでもない勧誘かんゆうをやる。二年前ある人の使つかいに帝国ホテ
ルへ行った時は錠前じようまえ直しと間違まちがえられた事がある。
ケツトを被かぶつて、鎌倉かまくらの大仏を見物した時は車屋から

親方と云われた。その外こんにち今日まで見損みそくなわれた事は随分あるが、まだおれをつらまえて大分たいていご風流でいらつしやると云つたものはない。大抵たいていはなりや様子でも分る。風流人なんていうものは、画えを見ても、頭巾ずきんを被かぶるか短冊たんざくを持つてるものだ。このおれを風流人だなどと真面目まじめに云うのはただの曲者くせものじやない。おれはそんな呑気のんきな隠居いんきよのやるような事は嫌きらいだと云つたら、亭主はへへへと笑いながら、いえ始めから好きなものは、どなたもございませんが、いったんこの道にはいととなかなか出られませんと一人で茶を注いで妙な

てつき
手付をして飲んでいゝ。実はゆうべ茶を買つてくれと頼たのんでおいたのだが、こんな苦い濃こい茶はいやだ。一杯ばい飲むと胃に答えるような気がする。今度からもつと苦くないのを買つてくれと云つたら、かしこまりましたとまた一杯しぼつて飲んだ。人の茶だと思つて無暗むやみに飲む奴やつだ。主人が引き下がつてから、明日の下読したよみをしてすぐ寝ねてしまった。

それから毎日毎日学校へ出ては規則通り働く、毎日毎日帰つて来ると主人がお茶を入れましようとして出てくる。一週間ばかりしたら学校の様子もひと通りは飲み

込めたし、宿の夫婦の人物も大概たいがいは分つた。ほかの教師に聞いてみると辞令を受けて一週間から一ヶ月ぐらいの間は自分の評判がいいだろうか、悪わるいだろうか非常に気に掛かかるそうであるが、おれは一向そんな感じはなかつた。教場で折々しくじるとその時だけはやな心持ちだが三十分ばかり立つと奇麗きれいに消えてしまう。おれは何事によらず長く心配しようと思つても心配が出来ない男だ。教場のしくじりが生徒にどんな影響えいきようを与あたえて、その影響が校長や教頭にどんな反応ていを呈ていするかまるで無頓着むとんじやくであつた。おれは前に云う通りあまり

度胸の据すわつた男ではないのだが、思い切りはすこぶるいい人間である。この学校がいけなければすぐどつかへ行く覚悟かくごでいたから、狸たぬきも赤シャツも、ちつとも恐おそしくはなかつた。まして教場の小僧こぞう共なんかには愛嬌あいきようもお世辞も使う気になれなかつた。学校はそれでいいのだが下宿の方はそうはいかなかつた。亭主が茶を飲みに来るだけなら我慢もするが、いろいろな者を持つてくる。始めに持つて来たのは何でも印材で、十とおばかり並ならべておいて、みんなで三円なら安い物だお買いなさいと云う。田舎巡いなかまわりのへボ絵師じゃあるまいし、そ

んなものは入らないと云つたら、今度は華山かざんとか何とか云う男の花鳥の掛物かけものをもつて来た。自分で床とこの間まへかけて、いい出来じやありませんかと云うから、そうかなと好加減いいかげんに挨拶あいさつをすると、華山には二人ふたりある、一人は何とか華山で、一人は何とか華山ですが、この幅ふくはその何とか華山の方だと、くだらない講釈をしたあとで、どうです、あなたなら十五円にしておきます。お買いなさいと催促さいそくをする。金がないと断わると、金なんか、いつでもようございませよとなかなか頑固がんこだ。金があつても買わないんだと、その時は追つ払ばらつち

まつた。その次には鬼瓦おにがわらぐらいな大硯おおすずりを担ぎ込んだ。これは端溪たんけいです、端溪ですと二遍へんも三遍も端溪がるから、面白半分に端溪た何だいと聞いたら、すぐ講釈を始め出した。端溪には上層中層下層とあつて、今時のものはみんな上層ですが、これはたしかに中層です、この眼がんをご覧なさい。眼が二つあるのは珍めずらしい。澆墨ほうぼくの具合も至極よろしい、試してご覧なさいと、おれの前へ大きな硯を突つきつける。いくらだと聞くと、持主が支那しなから持って帰って来て是非売りたいと云いますから、お安くして三十円にしておきましょうと云

う。この男は馬鹿ばかに相違そういない。学校の方はどうかこうか無事に勤まりそうだが、こう骨董責こつとうぜめに逢あつてはとても長く続きそうにない。

そのうち学校もいやになつた。ある日の晩大町おおまちと云う所を散歩していたら郵便局の隣となりに蕎麦そばとかいて、下に東京と注を加えた看板があつた。おれは蕎麦が大好きである。東京に居おつた時でも蕎麦屋の前を通つて薬味の香においをかぐと、どうしても暖簾のれんがくぐりたくなつた。今日までは数学と骨董で蕎麦を忘れていたが、こうして看板を見ると素通りが出来なくなる。

ついでだから一杯食つて行こうと思つて上がり込んだ。見ると看板ほどでもない。東京と断ことわる以上はもう少し奇麗にしそうなものだが、東京を知らないのか、金がないのか、減法めつぼうきたない。畳たたみは色が変わつてお負けに砂でざらざらしている。壁かべは煤すすで真黒だ。天井てんじようはランプの油煙ゆえんで燻くすぼつてるのみか、低くつて、思わず首を縮めるくらいだ。ただ麗々と蕎麦の名前をかいて張り付けたねだん付けだけは全く新しい。何でも古いうちを買つて二三日にさんち前から開業したに違ちがいなかろう。ねだん付の第一号に天麩羅てんぷらとある。おい天麩羅を持つてこ

いと大きな声を出した。するとこの時まで隅すみの方に三人かたまつて、何かつるつる、ちゅうちゅう食つてた連中れんじゅうが、ひとしくおれの方を見た。部屋へやが暗いので、ちよつと気がつかなくつたが顔を合せると、みんな学校の生徒である。先方で挨拶あいさつをしたから、おれも挨拶をした。その晩は久し振ひさぶりに蕎麦を食つたので、旨うまかつたから天麩羅を四杯平たいらげた。

翌日何の気もなく教場へはいると、黒板一杯ぐらいな大きな字で、天麩羅先生とかいてある。おれの顔を見てみんなわあと笑つた。おれは馬鹿馬鹿しいから、

天麩羅を食つちや可笑おかしいかと聞いた。すると生徒ひとりの一人が、しかし四杯は過ぎるぞな、もし、と云つた。四杯食おうが五杯食おうがおれの錢でおれが食うのに文句があるもんかと、さつさと講義を済まして控所へ歸つて来た。十分立つて次の教場へ出ると一つ天麩羅四杯なり。但ただし笑うべからず。と黒板にかいてある。さつきは別に腹も立たなかつたが今度は癩しやくに障さわつた。冗談じようだんも度を過たごせばいたずらだ。焼餅やきもちの黒焦くろこげのようなもので誰だれも賞ほめ手はない。田舎者はこの呼吸が分からないりようけんからどこまで押おして行つても構かわないと云う了見

だろう。一時間あるくと見物する町もないような狭いせま都に住んで、外に何にも芸がないから、天麩羅事件をにちろ日露戦争のように触れふちらかすんだろう。憐れな奴等あわだ。小供の時から、こんなに教育されるから、いやにひねっこびた、植木鉢うえきばちの楓かえでみたような小人しょうじんが出来るんだ。無邪気むじやきならいつしよに笑つてもいいが、こりやなくせんだ。小供の癖くせに乙おつに毒気を持つてる。おれはだまつて、天麩羅を消して、こんないたずらが面白いか、卑怯ひきような冗談だ。君等は卑怯と云う意味を知ってるか、と云ったら、自分がした事を笑われて怒おこるのが卑怯

じやろうがな、もしと答えた奴がある。やな奴だ。わざわざ東京から、こんな奴を教えに来たのかと思つたら情なくなつた。余計な減らず口を利かないで勉強しろと云つて、授業を始めてしまつた。それから次の教場へ出たら天麩羅を食うと減らず口が利きたくなるものなりと書いてある。どうも始末に終えない。あんな腹が立ったから、そんな生意気な奴は教えないと云つてすたすた帰つて来てやつた。生徒は休みになつて喜んだそうだ。こうなると学校より骨董の方がまだましだ。

天麩羅蕎麦もうちへ帰つて、一晚寝たらそんなに
肝癩かんしやくに障らなくなつた。学校へ出てみると、生徒も出
ている。何だか訳が分らない。それから三日ばかりは
無事であつたが、四日目の晩に住田すみたと云う所へ行つて
団子だんごを食つた。この住田と云う所は温泉のある町で城
下から汽車だと十分ばかり、歩いて三十分で行かれる、
料理屋も温泉宿も、公園もある上に遊廊ゆうかくがある。おれ
のはいつた団子屋は遊廊の入口にあつて、大変うまい
という評判だから、温泉に行つた帰りがけにちよつと
食つてみた。今度は生徒にも逢わなかつたから、誰だれも

知るまいと思つて、翌日学校へ行つて、一時間目の教場へはいると団子二皿七銭と書いてある。実際おれは二皿食つて七銭ほら払つた。どうも厄介やっかいな奴等だ。二時間目にもきつと何かあると思うと遊廓の団子旨い旨いと書いてある。あきれ返つた奴等だ。団子がそれで済んだと思つたら今度は赤手あかてぬぐい拭と云うのが評判になつた。何の事だと思つたら、つまらない来歴だ。おれはここへ来てから、毎日住田の温泉へ行く事に極きめている。ほかの所は何を見ても東京の足元にも及およばないが温泉だけは立派なものだ。せつかく来た者だから毎日は

いつてやろうという気で、晩飯前に運動かたがた出掛でかける。ところが行くときは必ず西洋手拭の大きな奴をぶら下げて行く。この手拭が湯に染そまつた上へ、赤い縞しまが流れ出したのでちよつと見ると紅色べにいろに見える。おれはこの手拭を行きも帰りも、汽車に乗つてもあるいても、常にぶら下げている。それで生徒がおれの事を赤手拭赤手拭と云うんだそうだ。どうも狭い土地に住んでるとうるさいものだ。まだある。温泉は三階の新築で上等は浴衣ゆかたをかして、流しをつけて八銭で済む。その上に女が天目てんもくへ茶を載のせて出す。おれはいつでも上等へ

はいった。すると四十円の月給で毎日上等へはいるのは贅沢ぜいたくだと云い出した。余計なお世話だ。まだある。湯壺ゆつぼは花崗石みかげいしを畳たたみ上げて、十五畳敷じょうじきぐらいの広さに仕切つてある。大抵たいていは十三四人漬つかつてるがたまには誰も居ない事がある。深さは立つて乳の辺まであるから、運動のために、湯の中を泳ぐのはなかなか愉快ゆかいだ。おれは人の居ないのを見済みすましては十五畳の湯壺を泳ぎ巡まわつて喜んでいた。ところがある日三階のぞから威勢いせいよく下りて今日も泳げるかなとぎくろ口を覗のぞいてみると、大きな札へ黒々と湯の中で泳ぐべからずとかいて貼り

つけてある。湯の中で泳ぐものは、あまりあるまいから、この貼札はりふだはおれのために特別に新調したのかも知れない。おれはそれから泳ぐのは断念した。泳ぐのは断念したが、学校へ出てみると、例の通り黒板に湯の中で泳ぐべからずと書いてあるには驚ろおどいた。何だか生徒全体がおれ一人を探偵たんでいしているように思われた。くさくさした。生徒が何を云つたつて、やろうと思つた事をやめるようなおれではないが、何でこんな狭苦しい鼻の先がつかえるような所へ来たのかと思うと情なくなつた。それでうちへ帰ると相変らず骨董責であ

る。

四

学校には宿直があつて、職員が代る代るこれをつとめる。但し狸ただと赤シャツたぬきは例外である。何でこの兩人が当然の義務を免まぬかれるのかと聞いてみたら、奏任待遇そうにんたいぐうだからと云う。面白くもない。月給はたくさんとり、時間は少ない、それで宿直を逃のがれるなんて不公平があるものか。勝手な規則をこしらえて、それがあた前まえだというような顔をしている。よくまああん

なにずうずうしく出来るものだ。これについては大分不平であるが、山嵐やまあらしの説によると、いくら一人ひとりで不平を並ならべたつて通るものじゃないそうだ。一人だつてふたり二人だつて正しい事なら通りそうなものだ。山嵐は might is right という英語を引いて説論せつゆを加えたが、何だか要領を得ないから、聞き返してみたら強者の権利と云う意味だそうだ。強者の権利ぐらいなら昔むかしから知っている。今さら山嵐から講釈をきかなくつてもいい。強者の権利と宿直とは別問題だ。狸や赤シャツが強者だなんて、誰だれが承知するものか。議論は議論とし

てこの宿直がいよいよおれの番に廻まわつて来た。一体
疝かんしょう性だから夜具蒲団などは自分のものへ楽に寝ない
と寝たような心持ちがしない。小供の時から、友達の
うちへ泊とまつた事はほとんどないくらいだ。友達のうち
でさえ厭いやなら学校の宿直はなおさら厭だ。厭だけれど
も、これが四十円のうちへ籠こもっているなら仕方がない。
我慢がまんして勤めてやろう。

教師も生徒も帰ってしまったあとで、一人ぽかんと
しているのは随分間ずいぶんが抜ぬけたものだ。宿直部屋は教場
の裏手にある寄宿舎の西はずれの一室だ。ちよつとは

いつてみたが、西日をまともに受けて、苦しくつて居たたまれない。田舎いなかだけあつて秋がきても、気長に暑いもんだ。生徒まかないの賄まかないを取りよせて晩飯を済ましたが、まずいには恐れ入おそつた。よくあんなものを食つて、あれだけに暴れられたもんだ。それで晩飯を急いで四時半に片付けてしまふんだから豪傑ごうけつに違ちがいない。飯は食つたが、まだ日が暮くれないから寝ねる訳に行かない。ちよつと温泉に行きたくなつた。宿直をして、外へ出るのはいい事だか、悪わるい事だかしらないが、こうつくねんとして重禁錮じゆうきんこ同様な憂目うきめに逢あうのは我慢の出来

るもんじやない。始めて学校へ来た時当直の人はと聞いたら、ちよつと用達ようたしに出たと小使こづかいが答えたのを妙みょうだと思つたが、自分に番が廻まわつてみると思い当る。出る方が正しいのだ。おれは小使にちよつと出てくると云つたら、何かご用ですかと聞くから、用じやない、温泉へはいるんだと答えて、さっさと出掛でかけた。
赤手拭あかてぬぐいは宿へ忘れて来たのが残念だが今日は先方で借りるとしよう。

それからかなりゆるりと、出たりはいつたりして、
ようやく日暮方ひぐれがたになつたから、汽車へ乗つて古町こまちの

停車場ていしやばまで来て下りた。学校まではこれから四丁だ。

訳はないとあるき出すと、向うから狸が来た。狸はこれからこの汽車で温泉へ行こうと云う計画なんだろう。すたすた急ぎ足にやってきたが、擦すれ違ちがった時おれの顔を見たから、ちよつと挨拶あいさつをした。すると狸はあなたまじめは今日は宿直ではなかつたですかねえと真面目まじめくさつて聞いた。なかつたですかねえもないもんだ。二時間前おれに向つて今夜は始めての宿直ですね。ご苦労さま。と礼を云つたじやないか。校長なんかになるといやに曲りくねつた言葉を使うもんだ。おれは腹が

立つたから、ええ宿直です。宿直ですから、これから
帰つて泊る事はたしかに泊りますと云い捨てて済まし
てあるき出した。豎町たてまちの四つ角までくると今度は山嵐やまあらし
に出つ喰くわした。どうも狭せまい所だ。出てあるきさえす
れば必ず誰かに逢う。「おい君は宿直じゃないか」と聞
くから「うん、宿直だ」と答えたら、「宿直が無暗むやみに出
てあるくなんて、不都合ふつごうじゃないか」と云つた。「ちつ
とも不都合なもんか、出てあるかない方が不都合だ」
と威張いばつてみせた。「君のずぼらにも困るな、校長か教
頭に出逢うと面倒めんどうだぜ」と山嵐に似合わない事を云う

から「校長にはたつた今逢つた。暑い時には散歩でもしないど宿直も骨でしようど校長が、おれの散歩をほめたよ」と云つて、面倒臭いから、さつさと学校へ帰つて来た。

それから日はすぐくれる。くれてから二時間ばかりは小使を宿直部屋へ呼んで話をしたが、それも飽きたから、寝られないまでも床へはいろいろと思つて、寝巻に着換えて、蚊帳を捲くつて、赤い毛布を跳ねのけて、とんと尻持を突いて、仰向けになつた。おれが寝るときにとんと尻持をつくのは小供の時から癪だ。わる

い癖だと云つて小川町の下宿に居た時分、二階下に居た法律学校の書生が苦情を持ち込んだ事がある。法律の書生なんてものは弱い癖に、やに口が達者なもので、愚^ぐな事を長たらしく述べ立てるから、寝る時にどんどん音がするのはおれの尻がわるいのじゃない。下宿の建築が粗末^{そまつ}なんだ。掛^かケ合うなら下宿へ掛^かケ合えと凹^{へこ}ましてやった。この宿直部屋は二階じゃないから、いくら、どしんと倒^{たお}れても構わない。なるべく勢^{いきおい}よく倒れないと寝たような心持ちがしない。ああ愉快だと足をうんと延ばすと、何だか両足へ飛び付いた。ざらざ

らして蚤のみのようでもないからこいつあと驚おどろいて、足を二三度毛布けつとの中で振ふつてみた。するとざらざらと当あつたものが、急に殖ふえ出して脛すねが五六カ所、股ももが二三カ所、尻しりの下でぐちやりと踏ふみ潰つぶしたのが一つ、臍へその所まで飛び上がったのが一つ——いよいよ驚おどろいた。早速さつそく起き上あがつて、毛布けつとをぱつと後ろうしろへ抛ほうると、蒲団ふとんの中なかから、バツタが五六十飛び出した。正体の知れない時は多少気味が悪わるかったが、バツタと相場あきが極きまつてみたら急に腹はらが立った。バツタの癖くせに人を驚おどろかしやがって、どうするか見ると、いきなり括くくり枕まくらを取とつ

て、二三度擲たきつけたが、相手が小さ過ぎるから勢よく抛なげつける割に利目ききめがない。仕方がないから、また布団の上へ坐すわつて、煤掃すすはきの時に塵ごじを丸めて畳たたみを叩たたくように、そこら近辺を無暗にたたいた。バツタが驚ろいた上に、枕の勢で飛び上がるものだから、おれの肩かただの、頭だの鼻の先だのへくっ付いたり、ぶつかつたりする。顔へ付いた奴やつは枕で叩く訳に行かないから、手で攫つかんで、一生懸命に擲すきつける。忌々いまいましい事に、いくら力を出しても、ぶつかる先が蚊帳だから、ふわりと動くだけで少しも手答がない。バツタは擲すきつけら

れたまま蚊帳へつらまつている。死にもどうもしない。ようやくの事に三十分ばかりでバツタは退治たいじた。箒ほうきを持って来てバツタの死骸しがいを掃き出した。小使が来て何ですかと云うから、何ですかもあるもんか、バツタを床の中に飼かつとく奴がどこの国にある。間拔まぬけめ。と叱しかつたら、私は存じませんと弁解をした。存じませんで済むかと箒えんがわを椽側ほううへ抛り出したら、小使は恐る恐る箒を担いで帰って行つた。

おれは早速寄宿生を三人ばかり総代に呼び出した。すると六人出て来た。六人だろうが十人だろうが構う

ものか。寝巻のまま腕うでまくりをして談判を始めた。

「なんでバツタなんか、おれの床の中へ入れた」

「バツタた何ぞな」と真先まつさきの一人がいった。やに落ち付いていやがる。この学校じゃ校長ばかりじゃない、生徒まで曲りくねった言葉を使うんだらう。

「バツタを知らないのか、知らなけりや見せてやろう」と云ったが、生憎あいにく掃き出してしまつて一匹びきも居ない。

また小使を呼んで、「さつきのバツタを持つてこい」と云つたら、「もう掃溜はきだめへ棄すててしまいましたが、拾つて参りましょうか」と聞いた。「うんすぐ拾つて来い」と

云うと小使は急いで馳け出したが、やがて半紙の上へ十匹ばかり載せて来て「どうもお気の毒ですが、生憎夜でこれだけしか見当りません。あしたになりましたらもつと拾つて参ります」と云う。小使まで馬鹿だ。おれはバツタの一つを生徒に見せて「バツタたこれだ、大きなずう体をして、バツタを知らないた、何の事だ」と云うと、一番左の方に居た顔の丸い奴が「そりや、イナゴぞな、もし」と生意気におれを遣り込めた。「籠棒め、イナゴもバツタも同じもんだ。第一先生を捕まえな、なめした何だ。菜飯は田楽の時より外に食うもん

「じゃない」とあべこべに遣り込めてやったら「なもしと菜飯とは違うぞな、もし」と云った。いつまで行ってもなもしを使う奴だ。

「イナゴでもバッタでも、何でおれの床の中へ入れたんだ。おれがいつ、バッタを入れてくれと頼たのんだ」

「誰も入れやせんがな」

「入れないものが、どうして床の中に居るんだ」

「イナゴは温ぬくい所が好きじゃけれ、大方一人でおはいりたのじゃある」

「馬鹿あ云え。バッタが一人でおはいりになるなんて

——バツタにおはいりになられてたまるもんか。——
さあなぜこんないたずらをしたか、云え」

「云えてて、入れんものを説明しようがないがな」

けちな奴等やつらだ。自分で自分のした事が云えないくらいなら、てんでしないがいい。証拠しょうこさえ拳がらなければ、しらを切るつもりで凶太く構えていやがる。おれだって中学に居た時分は少しはいたずらもしたもんだ。しかしだれがしたと聞かれた時に、尻込みをするような卑怯ひきような事はただの一度もなかった。したものはしたので、しないものはしないに極きまってる。おれなんぞは、

いくら、いたずらをしたって潔白なものだ。嘘を吐いて罰を逃げるくらいなら、始めからいたずらなんかやるものか。いたずらと罰はつきもんだ。罰があるからいたずらも心持ちよく出来る。いたずらだけで罰はご免蒙るなんて下劣な根性がどこの国に流行ると思ってるんだ。金は借りるが、返す事はご免だと云う連中はみんな、こんな奴等が卒業してやる仕事に相違ない。全体中学校へ何しにはいつてるんだ。学校へはいつて、嘘を吐いて、胡魔化して、陰でこせこせ生意気な悪いたずらをして、そうして大きな面で卒業すれば教育を

受けたもんだと癩かんちが違ちがいをしていやがる。話せない雑兵ぞうひようだ。

おれはこんな腐くさつた了見りようけんの奴等と談判するのは胸糞むなくそが悪わるいから、「そんなに云われなきや、聞かなくつていい。中学校へはいつて、上品も下品も区別が出来ないのは気の毒なものだ」と云つて六人を逐おつ放ばなしてやった。おれは言葉や様子こそあまり上品じゃないが、心はこいつらよりも遙はるかに上品なつもりだ。六人は悠々ゆうゆうと引き揚あげた。上部うわべだけは教師のおれよりよつぽどえらく見える。実は落ち付いているだけなお悪わるい。

おれには到底とうていこれほどの度胸はない。

それからまた床へはいつて横になつたら、さつきの騒動そうどうで蚊帳の中はぶんぶん唸うなっている。手燭てしよくをつけて一匹ずつ焼くなんて面倒な事は出来ないから、釣手つりてをはずして、長く畳たたんでおいて部屋の中で横よこたてに文字に振ふるつたら、環かんが飛んで手の甲こうをいやというほど撲ぶつた。三度目に床へはいつた時は少々落ち付いたがなかなか寝られない。時計を見ると十時半だ。考えてみると厄介な所へ来たもんだ。一体中学の先生なんて、どこへ行つても、こんなものを相手にするなら気の毒なもの

だ。よく先生が品切れにならない。よつぽど辛防強しんぼうい
朴念仁ぼくねんじんがなるんだらう。おれには到底やり切れない。
それを思うと清きよなんてのは見上げたものだ。教育もな
い身分もない婆ばあさんだが、人間としてはすこぶる尊たつと
い。今まではあんなに世話になつて別段難有ありがたいとも思
わなかつたが、こうして、一人で遠国へ来てみると、
始めてあの親切がわかる。越後えちごの笹飴ささあめが食いたければ、
わざわざ越後まで買いに行つて食わしてやつても、食
わせるだけの価値は充分じゆうぶんある。清はおれの事を欲がな
くつて、真直まっすぐな気性だと云つて、ほめるが、ほめられ

るおれよりも、ほめる本人の方が立派な人間だ。何だか清に逢いたくなつた。

清の事を考えながら、のつそつしていると、突然おれの頭の上で、数で云つたら三四十人もあるうか、二階が落つこちるほどどん、どん、どんと拍子ひょうしを取つて床板を踏みならす音がした。すると足音に比例した大きな関ときの声おこが起つた。おれは何事が持ち上がったのかと驚ろいて飛び起きた。飛び起きる途端とたんに、ははあさつきの意趣返いしゆがえしに生徒があばれるのだなと気がついた。手前のわるい事は悪るかつたと言つてしまわない

うちは罪は消えないもんだ。わるい事は、手前達に覚おぼえがあるだろう。本来なら寝てから後悔こうかいしてあしたの朝でもあやまりに来るのが本筋だ。たとい、あやまらな
いまでも恐れ入って、静粛せいしゆくに寝ているべきだ。それを
何だこの騒さわぎは。寄宿舎を建てて豚ぶたでも飼っておきあ
しまいいし。気狂きちがいじみた真似まねも大抵たいていにするがいい。ど
うするか見ると、寝巻のまま宿直部屋を飛び出して、
楷子段はしごだんを三股半みまたはんに二階おどまで躍り上がった。すると不思
議な事に、今まで頭の上で、たしかにどたばた暴れて
いたのが、急に静まり返って、人声どころか足音もし

なくなつた。これは妙だ。ランプはすでに消してあるから、暗くてどこに何が居るか判然と分らないが、わか人氣のあるとないとは様子でも知れる。長く東から西へ貫いた廊下には鼠ねずみ一匹びきも隠れていない。廊下のはずれから月がさして、遙か向うが際どく明るい。どうも変だ、おれは小供の時から、よく夢を見る癖があつて、夢中に跳ね起きて、わからぬ寢言を云つて、人に笑われた事がよくある。十六七の時ダイヤモンドを拾つた夢を見た晩などは、むくりと立ち上がつて、そばに居た兄に、今のダイヤモンドはどうしたと、非常

な勢いきおいで尋ねたずたくらいだ。その時は三日ばかりうち中じゅうの笑い草になつて大いに弱つた。ことによると今のも夢かも知れない。しかししたしかにあばれたに違いないがと、廊下の真中まんなかで考え込んでいると、月のさしている向うのはずれで、一二三わあと、三四十人の声がかたまつて響ひびいたかと思う間もなく、前のように拍子を取つて、一同が床板ゆかいたを踏み鳴らした。それ見る夢じゃないやっぱり事実だ。静かにしろ、夜なかだぞ、とこつちも負けんくらいな声を出して、廊下を向うへ馳かけだした。おれの通る路みちは暗い、ただはずれに見える

月あかりが目標だ。おれが馳け出して二間も来たかと思つと、廊下の真中で、堅い大きなものに向脛をぶつけて、あ、痛い、が頭へひびく間に、身体はすとんと前へ抛り出された。こん畜生と起き上がつてみたが、馳けられない。気はせくが、足だけは云う事を利かない。じれつたいから、一本足で飛んで来たなら、もう足音も人声も静まり返つて、森しんとしている。いくら人間が卑怯だつて、こんなに卑怯に出来るものじゃない。まるで豚だ。こうなれば隠れている奴を引きずり出して、あやまらせてやるまではひかないぞと、心を極めて

寢室しんしつの一つを開けて中を検査しようと思つたが開かない。錠じょうをかけてあるのか、机か何か積んで立て懸かけてあるのか、押おしても、押しても決して開かない。今度は向う合せの北側の室へやを試みた。開かない事はやつぱり同然である。おれが戸を開けて中に居る奴を引つ捕つらまえてやろうと、焦慮いらつてると、また東のはずれで鬨こゝろの声と足拍子が始まつた。この野郎やろう申し合せて、東西相応じておれを馬鹿にする気だな、とは思つたがさてどうしていいか分らない。正直に白状してしまふが、おれは勇気のある割合に智慧ちえが足りない。こんな時に

はどうしていいかさっぱりわからない。わからないけれども、決して負けるつもりはない。このままに済ましてはおれの顔にかかわる。江戸えどつ子は意気地いけぢがないと云われるのは残念だ。宿直をして鼻垂れ小僧はなつたこぞうにかからかわれて、手のつけようがなくって、仕方がないから泣き寝入りにしたと思われちや一生の名折れだ。これでも元は旗本はたもとだ。旗本の元は清和源氏せいわげんじで、多田ただの満仲まんじゆうの後裔こうえいだ。こんな土百姓どびやくしやうとは生まれからして違うんだ。ただ智慧の無いところが惜しいだけだ。どうしていいかわからないのが困るだけだ。困ったって負けるものか。

正直だから、どうしていいか分らないんだ。世の中に正直が勝たないで、外に勝つものがあるか、考えてみる。今夜中に勝てなければ、あした勝つ。あした勝てなければ、あさって勝つ。あさって勝てなければ、下宿から弁当を取り寄せて勝つまでここに居る。おれはこう決心をしたから、廊下の真中へあぐらをかいて夜のあけるのを待っていた。蚊がぶんぶん来たけれども何ともなかった。さつき、ぶつけた向脛を撫なでてみると、何だかぬらぬらする。血が出るんだらう。血なんか出たければ勝手に出るがいい。そのうち最前からの

疲れつかが出て、ついうとうと寝てしまった。何だか騒さわがしいので、眼めが覚めた時はえっ糞くそしまったと飛び上がった。おれの坐すわつてた右側にある戸が半分あいて、生徒が二人、おれの前に立っている。おれは正気に返つて、はつと思ふ途端に、おれの鼻の先にある生徒の足を引ひつ攫つかんで、力任せにぐいと引いたら、そいつは、どたりと仰向あおもむけに倒れた。ざまを見ろ。残る一人がちよつと狼狽ろうばいしたところを、飛びかかつて、肩を抑おさえて二三度こづき廻したら、あつけに取られて、眼をぱちぱちさせた。さあおれの部屋まで来いと引つ立てる

と、弱虫だと見えて、一も二もなく尾ついて来た。夜よはとうにあけている。

おれが宿直部屋へ連れてきた奴を詰問きつもんし始めると、豚は、打ぶつても擲ないても豚だから、ただ知らんがなで、どこまでも通す了見と見えて、けっして白状しない。そのうち一人来る、二人来る、だんだん二階から宿直部屋へ集まってくる。見るとみんな眠ねむそうに臉まぶたをはらしている。けちな奴等だ。一晩ぐらい寝ないで、そんな面をして男と云われるか。面でも洗って議論に來いと云ってやったが、誰も面を洗いに行かない。

おれは五十人あまりを相手に約一時間ばかり押問答おしもんどうをしてしていると、ひよつくり狸がやって来た。あとから聞いたら、小使が学校に騒動がありますつて、わざわざ知らせに行つたのだそうだ。これしきの事に、校長を呼ぶなんて意気地がなさ過ぎる。それだから中学校の小使なんぞをしてるんだ。

校長はひと通りおれの説明を聞いた。生徒の言草いいぐさもちよつと聞いた。追つて処分するまでは、今まで通り学校へ出る。早く顔を洗つて、朝飯を食わないと時間に合わないから、早くしろと云つて寄宿生をみん

な放免ほうめんした。手温てぬるい事だ。おれなら即席そくせきに寄宿生を
ことごとく退校してしまふ。こんな悠長ゆうちやうな事をするか
ら生徒が宿直員を馬鹿にするんだ。その上おれに向つ
て、あなたもさぞご心配でお疲れでしょう、今日はご
授業およに及ばんと云うから、おれはこう答えた。「いえ、
ちつとも心配じゃありません。こんな事が毎晩あつて
も、命のある間は心配にやなりません。授業はやりま
す、一晩ぐらい寝なくつて、授業が出来ないくらいな
ら、頂戴ちやうだいした月給を学校の方へ割戻わりもとします」校長は何
と思つたものか、しばらくおれの顔を見つめていたが、

しかし顔が大分はれていますよと注意した。なるほど何だか少々重たい気がする。その上べた一面痒い。蚊がよつぽと刺したに相違ない。おれは顔中ぼりぼり掻きながら、顔はいくら膨れたつて、口はたしかにきけますから、授業には差し支えませんかと答えた。校長は笑いながら、大分元気ですねと賞めた。実を云うと賞めたんじやあるまい、ひやかしたんだらう。

五

君釣りに行きませんかと赤シャツがおれに聞いた。赤シャツは気味の悪^わるいように優しい声を出す男である。まるで男だか女だか分^{わか}りやしない。男なら男らしい声を出すもんだ。ことに大学卒業生じゃないか。物理学校でさえおれくらいな声が出るのに、文学士がこれじゃ見つともない。

おれはそうですなあと少し進まない返事したら、

君釣をした事がありますかと失敬な事を聞く。あんなりないが、子供の時、小梅こうめの釣堀つりぼりで鮒ふなを三匹びき釣った事がある。それから神楽坂かぐらざかの毘沙門びしゃもんの縁日えんいちで八寸ばかりの鯉こいを針で引っかけて、しめたと思つたら、ぼちやりと落としてしまったがこれは今考えても惜おしいと云いつたら、赤シャツは頤あごを前の方へ突つき出してホホホと笑つた。何もそう気取つて笑わなくつても、よさそうな者だ。「それじゃ、まだ釣りの味は分らんですな。お望みならちと伝授しましょう」とすこぶる得意である。だれがご伝授をうけるものか。一体釣りや獵りようをする連中

はみんな不人情な人間ばかりだ。不人情でなくつて、
殺生せつしょうをして喜ぶ訳がない。魚だつて、鳥だつて殺され
るより生きてる方が楽に極きまつてる。釣や猟をしな
くつちや活計かつけいがたたないなら格別だが、何不足なく暮くら
している上に、生き物を殺さなくつちや寝られないな
んて贅沢ぜいたくな話だ。こう思ったが向うは文学士だけに口
が達者だから、議論じや叶かなわないと思つて、だまつて
た。すると先生このおれを降参させたと疇違かんちがいして、
早速伝授しましょう。おひまなら、今日どうです、
いつしよに行つちや。吉川君よしかわと二人ふたりぎりじや、淋さむしい

から、来たまえとしきりに勧める。吉川君というのは画学の教師で例の野だいこの事だ。この野だは、どうりようけんいう見だか、赤シャツのうちへ朝夕出入でいりして、どこへでも随行ずいこうして行く。まるで同輩どうはいじゃない。主従しゆうじゆうみたようだ。赤シャツの行く所なら、野だは必ず行くに極きまっているんだから、今さら驚おどろきもしないが、二人で行けば済むところを、なんで無愛想ぶあいそのおれへ口を掛かけたんだらう。大方高慢こうまんちきな釣道楽で、自分の釣るところをおれに見せびらかすつもりかなんかで誘さそったに違ちがいない。そんな事で見せびらかされるおれじやな

い。鮪まぐろの二匹や三匹釣ったつて、びくともするもんか。おれだつて人間だ、いくら下手へただつて糸さえ卸おろしや、何かかかるだろう、ここでおれが行かないと、赤シャツの事だから、下手だから行かないんだ、嫌きらいだから行かないんじゃないと邪推じゃすいするに相違そういない。おれはこう考えたから、行きましたようと答えた。それから、学校をしまつて、一応うちへ帰つて、支度したくを整えて、停車場で赤シャツと野だを待ち合せて浜はまへ行つた。船頭は一人ひとりで、船ふねは細長い東京辺では見た事もない恰好かつこうである。さつきから船中見渡みわたすが釣竿つりざおが一本も見えない。

釣竿なしで釣が出来るものか、どうする了見だろうと、野だに聞くと、沖釣おきづりには竿は用いませぬ、糸だけでげすと顎を撫なでて黒人くろうとじみた事を云つた。こう遣やり込こめられるくらいならだまつていればよかつた。

船頭はゆつくりゆつくり漕こいでいるが熟練おそろは恐おそしいもので、見返みかえると、浜はまが小さく見えるくらいもう出ている。高柏寺こうはくじの五重ごじゆうの塔とうが森の上へ抜ぬけ出して針はりのように尖とんがつてる。向側むこうがわを見ると青嶋あおしまが浮ういている。これは人の住まない島だそうだ。よく見ると石と松まつばかりだ。なるほど石と松ばかりじゃ住めつこない。赤

シャツは、しきりに眺望ちようぼうしていい景色だと云ってる。野だは絶景でげすと云ってる。絶景だか何だか知らないが、いい心持ちには相違ない。ひろびろとした海上で、潮風に吹ふかれるのは葉だと思つた。いやに腹が減る。「あの松を見たまえ、幹が真直まつすぐで、上が傘かさのように開いてターナーの画にありそうだね」と赤シャツが野だに云うと、野だは「全くターナーですね。どうもあの曲り具合つたらありませんね。ターナーそっくりですよ」と心得顔である。ターナーとは何の事だか知らないが、聞かないでも困らない事だから黙だまっていた。

舟は島を右に見てぐるりと廻まわつた。波は全くない。これたいらで海だとは受け取りにくいほど平だ。赤シャツのお陰かげではなはだ愉快だ。出来る事なら、あの島の上へ上がつてみたいと思つたから、あの岩のある所へは舟はつけられないんですかと聞いてみた。つけられん事もないですが、釣をするには、あまり岸じやいけないですと赤シャツが異議を申し立てた。おれは黙つてた。すると野だかどうです教頭、これからあの島をターナー島と名づけようじやありませんかと余計な発議ほつぎをしました。赤シャツはそいつは面白い、吾々われわれはこれからそ

う云おうと賛成した。この吾々のうちにおれもはいつてるなら迷惑だ。めいわく おれには青嶋でたくさんだ。あの岩の上に、どうです、ラフハエルのマドンナを置いちや。いい画が出来ますぜと野だが云うと、マドンナの話はよそうじやないかホホホホと赤シャツが気味の悪るい笑い方をした。なに誰も居ないから大丈夫ですと、だいじょうぶ ちよつとおれの方を見たが、わざと顔をそむけてにやにやと笑った。おれは何だかやな心持ちがした。マドンナだろうが、小旦那こだんなだろうが、おれの関係した事でないから、勝手に立たせるがよかろうが、人に分らな

い事を言つて分らないから聞いたつて構やしませんて
えような風をする。下品な仕草だ。これで当人は私も
江戸えどつ子でげすなどと云つてる。マドンナと云うのは
何でも赤シャツの馴染なじみの芸者の渾名あだなか何かの違いない
と思つた。なじみの芸者を無人島の松の木の下に立た
して眺ながめていれば世話はない。それを野だが油絵にで
もかいて展覧会へ出したらよかろう。

ここいらがいいだろうと船頭は船をとめて、錨いかりを卸
した。幾尋いくひろあるかねと赤シャツが聞くと、六尋むひろぐらい
だと云う。六尋ぐらいじや鯛たいはむずかしいなと、赤

シャツは糸を海へなげ込んだ。大将鯛を釣る気と見える、ごうたん豪胆なものだ。野だは、なに教頭のお手際じやかかりますよ。それになぎですからとお世辞を云いながら、これも糸を繰くり出して投げ入れる。何だか先におもりりのような鉛なまりがぶら下がってるだけだ。浮うきがない。浮がなくつて釣をするのは寒暖計なしで熱度をはかるようなものだ。おれには到底とうてい出来ないと見ていると、さあ君もやりたまえ糸はありますかと聞く。糸はあまるほどあるが、浮がありませんと云つたら、浮がなくつちや釣が出来ないのは素人しろうとですよ。こうしてね、糸が

水底へついた時分に、船縁ふなべりの所で人指しゆびで呼吸をはかるんです、食うとすぐ手に答える。——そらきた、と先生急に糸をたぐり始めるから、何かかかったと思つたら何にもかからない、餌えがなくなつてたばかりだ。いい気味きびだ。教頭、残念な事をしましたね、今のはたしかに大ものに違いなかつたんですが、どうも教頭のお手際でさえ逃にげられちゃ、今日は油断ができませんよ。しかし逃げられても何です。浮と睨にらめくらしをしてる連中よりはましですね。ちようど歯どめがなくつちや自転車へ乗れないのと同程度ですからねと

野だは妙な事ばかり喋舌る。よつぽど撲りつけてやるかと思つた。おれだつて人間だ、教頭ひとりで借り切つた海じゃあるまいし。広い所だ。鰹の一匹ぐらい義理にだつて、かかつてくれるだろうと、どぼんと錘と糸を抛り込んでいい加減に指の先であやつつていた。しばらくすると、何だかびくびくと糸にあたるものがある。おれは考えた。こいつは魚に相違ない。生きてるものでなくつちや、こうびくつく訳がない。しめた、釣れたとぐいぐい手繰り寄せた。おや釣れましたかね、後世恐るべしだと野だがひやかすうち、糸はも

う大概手繰り込んでただ五尺ばかりほどしか、水に浸ついておらん。船縁から覗のぞいてみたら、金魚のような縞しまのある魚が糸にくつついて、右左へ漾ただよいながら、手に応じて浮き上がってくる。面白い。水際から上げるとき、ぽちやりと跳はねたから、おれの顔は潮水だらけになつた。ようやくつらまえて、針をとろうとするがなかなか取れない。捕つらまえた手はぬるぬるする。大いに気味がわるい。面倒だから糸を振ふつて胴どうの間まへ擲たきつけたら、すぐ死んでしまった。赤シャツと野だは驚ろいて見ている。おれは海の中で手をぎぶぎぶと洗つて、

鼻の先へあてがつてみた。まだ腥臭なまぐさい。もう懲こり懲ごりだ。何が釣れたつて魚は握にぎりたくない。魚も握られたくなかろう。そうそう糸を捲まいてしまった。

一いちばん番槍やりはお手柄てがらだがゴルキじや、と野だがまた生意いちばんな名だねと赤シャツが洒落しやれた。そうですね、まるで露西亞の文学者ですねと野だはすぐ賛成しやがる。ゴルキが露西亞の文学者で、丸木が芝しばの写真師で、米のなる木が命の親だらう。一体この赤シャツはわるい癖くせだ。誰だれを捕つかまえても片仮名の唐人とうじんの名を並べたがる。人に

はそれぞれ専門があつたものだ。おれのような数学の教師にゴルキだか車力しやりきだか見当がつくものか、少しは遠慮えんりよするがいい。云いうならフランクリンの自伝だとかブッシング、ツー、ゼ、フロントだとか、おれでも知つてる名を使うがいい。赤シャツは時々帝国文学とかいう真赤まっかな雑誌を学校へ持つて来て難有ありがたそうに読んでいやまめらしる。山嵐やまめらしに聞いてみたら、赤シャツの片仮名はみんなあの雑誌から出るんだそうだ。帝国文学も罪な雑誌だ。それから赤シャツと野いつしやうけんめいだは一生懸命に釣つていたが、約一時間ばかりのうちに二人ふたりで十五六上げた。可笑おかし

い事に釣れるのも、釣れるのも、みんなゴルキばかりだ。鯛なんて薬にしたくつてもありやしない。今日は露西亞文学の大当りだと赤シャツが野だに話している。あなたの手腕しゅわんでゴルキなんですから、私わたしなんぞがゴルキなのは仕方ありません。当り前ですなと野だが答えている。船頭に聞くとこの小魚は骨が多くつて、ま
ずくつて、とても食えないんだそうだ。ただ肥料こやしには出来るそうだ。赤シャツと野だは一生懸命に肥料を釣っているんだ。気の毒の至りだ。おれは一匹びきで懲こりたから、胴の間へ仰向けあおむになつて、さつきから大空を

眺めていた。釣をするよりこの方がよつぽど洒落しやれている。

すると二人は小声で何か話し始めた。おれにはよく聞きこえない、また聞きたくもない。おれは空を見ながら清きよの事を考えている。金があつて、清をつれて、こんな奇麗きれな所へ遊びに来たらさぞ愉快だろう。いくら景色がよくつても野だなどといつしよじやつまらない。

清は皺しわくちや苦茶だらけの婆さんだが、どんな所へ連れて出たつて恥はずかしい心持ちはしない。野だのようなのは、馬車に乗ろうが、船に乗ろうが、凌雲閣りょううんかくへのろうが、

到底寄り付けたものじゃない。おれが教頭で、赤シャツがおれだったら、やつぱりおれにへけつけお世辞を使つて赤シャツを冷かすひやに違いない。江戸っ子は軽薄けいはくだと云うがなるほどこんなものが田舎巡りいなかまわをして、私わたしは江戸っ子でげすと繰り返していたら、軽薄は江戸っ子で、江戸っ子は軽薄の事だと田舎者が思うに極まつてる。こんな事を考えていると、何だか二人がくすくす笑い出した。笑い声の間に何か云うが途切れ途切れとぎでとんと要領を得ない。

「え？ どうだか……」 「……全くです……知らないん

ですから……罪ですね」「まさか……」「バツタを……本
当ですよ」

おれは外の言葉には耳を傾けかたむなかつたが、バツタと
云う野だの語を聴きいた時は、思わずきつとなつた。野
だは何のためかバツタと云う言葉だけことさら力を入
れて、明瞭めいりょうにおれの耳にはいるようにして、そのあと
をわざとぼかしてしまった。おれは動かないでやはり
聞いていた。

「また例の堀田ほったが……」「そうかも知れない……」
「天麩羅てんぷら……ハハハハハ」「……煽動せんどうして……」「団子だんご

も？」

言葉はかように途切れ途切れであるけれども、バツタだの天麩羅だの、団子だのというところをもつて推し測つてみると、何でもおれのことについて内所話ないしょばなしをしてに相違ない。話すならもつと大きな声で話すがいい、また内所話をするくらいなら、おれなんか誘わなければいい。いけ好かない連中だ。バツタだろうが雪踏せっただろうが、非はおれにある事たぬきじやない。校長がひとまずあずけると云ったから、狸たぬきの顔にめんじてただ今ひかのところは控えているんだ。野だの癖に入らぬ

批評をしやがる。毛筆けふででもしやぶつて引つ込んでるが
いい。おれの事は、遅おそかれ早かれ、おれ一人で片付け
てみせるから、差支さしつかえはないが、また例の堀田がとか
煽動おんどうしてとか云う文句が気にかかる。堀田がおれを煽
動おんどうして騒動そうどうを大きくしたと云う意味なのか、あるいは
堀田が生徒を煽動おんどうしておれをいじめたと云うのか方角
がわからない。青空を見ていると、日の光がだんだん
弱よわつて来て、少しはひやりとする風が吹き出した。
線香せんこうの烟けむりのような雲が、透すき徹とおる底の上を静しずかに伸のし
て行いったと思おもつたら、いつしか底おの奥おくに流れ込んで、

うすくもやを掛けたようになった。

もう帰ろうかと赤シャツが思い出したように云うと、ええちようど時分ですね。今夜はマドンナの君にお逢いですかと野だが云う。赤シャツは馬鹿あ云つちやいけない、間違になると、船縁に身を倚たした奴を、少し起き直る。エへへへ大丈夫ですよ。聞いたつて……と野だが振り返った時、おれは皿のような眼を野だの頭の上へまともに浴びせ掛けてやった。野だはまぼしそうに引つ繰り返つて、や、こいつは降参だと首を縮めて、頭を掻いた。何という猪口才だろう。

船は静かな海を岸へ漕ぎ戻る。君釣はあまり好きでないと見えますねと赤シャツが聞くから、ええ寝て空を見る方がいいですと答えて、吸いかけた巻烟草を海の中へたたき込んだら、ジュと音がして艀の足で掻き分けられた浪の上を揺られながら漾っていった。「君が来たんで生徒も大いに喜んでいいるから、奮発してやってくれたまえ」と今度は釣にはまるで縁故もない事を云い出した。「あんまり喜んでいいないでしょう」「いえ、お世辞じゃない。全く喜んでいいるんです、ね、吉川君」「喜んでるところじゃない。大騒ぎです」

と野だはにやにやと笑った。こいつの云う事は一々しやく癩さわに障るから妙だ。「しかし君注意しないと、けんのん險呑ですよ」と赤シャツが云うから「どうせ險呑です。こうなりや險呑は覚悟かくごです」と云つてやつた。実際おれは免職めんしよくになるか、寄宿生をことごとくあやまらせるか、どつちか一つにする了見でいた。「そう云つちや、取りつきどころもないが——実は僕も教頭として君のためを思うから云うんだが、わるく取つちや困る」およ「教頭は全く君に好意を持つてゐるんですよ。僕も及ばずながら、同じ江戸っ子だから、なるべく長くご在校を願つて、

お互たがいに力になろうと思つて、これでも蔭ながらじんりよく尽力しているんですよ」と野だが人間並なみの事を云つた。野だのお世話になるくらいなら首を縊くくつて死んじまわあ。

「それでね、生徒は君の来たのを大變歡迎かんげいしているんだが、そこにはいろいろな事情があつてね。君も腹の立つ事もあるだろうが、ここが我慢がまんだと思つて、辛防しんぼうしてくれたまえ。決して君のためにならないような事はしないから」

「いろいろの事情た、どんな事情です」

「それが少し込み入つてゐるんだが、まあだんだん分り

ますよ。僕が話さないでも自然と分つて来るです、ね
吉川君」

「ええなかなか込み入ってますからね。一朝一夕にや
到底分りません。しかしだんだん分ります、僕が話さ
ないでも自然と分つて来るです」と野達は赤シャツと
同じような事を云う。

「そんな面倒めんどうな事情なら聞かなくてもいいんですが、
あなたの方から話し出したから伺うかがうんです」

「そりゃごもつともだ。こつちで口を切つて、あとを
つけないのは無責任ですね。それじゃこれだけの事を

云つておきましたよ。あなたは失礼ながら、まだ学校を卒業したてで、教師は始めての、経験である。ところが学校というものはなかなか情実のあるもので、そういう書生流に淡泊たんぱくには行かないですからね」

「淡泊に行かなければ、どんな風に行くんです」

「さあ君はそう率直だから、まだ経験に乏とぼしいと云うんですがね……」

「どうせ経験には乏しいはずですよ。履歴書りれきしよにもかいときましたが一十二年四ヶ月ですから」

「さ、そこで思わぬ辺から乗ぜられる事があるんです」

「正直にしていれば誰だれが乗じたつて怖こわくはないです」

「無論怖こわくはない、怖こわくはないが、乗ぜられる。現に君の前任者がやられたんだから、気を付けないといけな
いと云うんです」

野だが大人おとなしくなつたなと気が付いて、ふり向いて見ると、いつしか艫ともの方で船頭と釣の話をしている。野だが居ないんでよつぽど話しよくなつた。

「僕の前任者が、誰だれに乗ぜられたんです」

「だれと指すと、その人の名誉しやうごに関係するから云えない。また判然と証拠しやうこのない事だから云うとこつちの落

度になる。とにかく、せつかく君が来たもんだから、ここで失敗しちや僕等ぼくらも君を呼んだ甲斐かがない。どうか気を付けてくれたまえ」

「気を付けろつたつて、これより気の付けようはありません。わるい事をしなけりや好いんでしよう」

赤シャツはホホホと笑った。別段おれは笑われる

ような事を云つた覚えはない。今日こんにちただ今に至るまで

これでいいと堅かたく信じている。考えてみると世間の大

部分の人はわるくなる事を奨励しょうれいしているように思う。

わるくならなければ社会に成功はしないものと信じて

いるらしい。たまに正直な純粋な人を見ると、坊っ
ちゃんだの小僧だのと難癖をつけて軽蔑する。それ
じゃ小学校や中学校で嘘をつくな、正直にしろと倫理
の先生が教えない方がいい。いつそ思い切つて学校で
嘘をつく法とか、人を信じない術とか、人を乗せる策
を教授する方が、世のためにも当人のためにもなるだ
ろう。赤シャツがホホホと笑つたのは、おれの単純
なのを笑つたのだ。単純や真率が笑われる世の中じゃ
仕様がな。清はこんな時に決して笑つた事はない。
大いに感心して聞いたもんだ。清の方が赤シャツより

「無論悪^わるい事をしなければ好いんですが、自分だけ悪るい事をしなくつても、人の悪るいのが分らなくつちや、やつぱりひどい目に逢うでしょう。世の中には磊^{らいらく}落^{らく}なように見えても、淡泊なように見えても、親切に下宿の世話なんかしてくれても、めったに油断の出来ないのがありますから……。大分寒くなった。もう秋ですね、浜の方は霽^{もや}でセピヤ色になった。いい景色だ。おい、吉川君どうだい、あの浜の景色は……。」と大きな声を出して野だを呼んだ。なあるほどこりや

奇絶きぜつですね。時間があると写生するんだが、惜おしいです
ね、このままにしておくのはと野だは大いにたたく。
港屋の二階に灯が一つついて、汽車の笛ふえがヒューと
鳴るとき、おれの乗っていた舟は磯いその砂へざぐりと、
舳へをつき込んで動かなくなつた。お早うお帰りと、か
みさんが、浜に立って赤シャツあゐさつに挨拶する。おれは
船端ふなばたから、やつと掛声かけこゑをして磯へ飛び下りた。

六

野だは大嫌いだ。こんな奴は沢庵石をつけて海の底へ沈めちまう方が日本のためだ。赤シャツは声が気に食わない。あれは持前の声をわざと気取つてあんな優しいように見せてるんだろう。いくら気取つたつて、あの面じゃ駄目だ。惚れるものがあつたつてマドンナぐらいなものだ。しかし教頭だけに野だよりむずかしい事を云う。うちへ帰つて、あいつの申し条を考えて

みると一応もつともものようでもある。はつきりとした事は云わないから、見当がつきかねるが、何でも山嵐やまあらしがよくない奴だから用心しろと云うのらしい。それならそうとはつきり断言するがいい、男らしくもない。そうして、そんな悪わるい教師なら、早く免職めんしよくしたらよかろう。教頭なんて文学士の癖くせに意気地いきぢのないもんだ。蔭口かげぐちをきくのでさえ、公然と名前が云えないくらいな男だから、弱虫に極きまつてる。弱虫は親切なものだから、あの赤シャツも女のような親切ものなんだろう。親切は親切、声は声だから、声が気に入らないつ

て、親切を無にしちや筋が違ちがう。それにしても世の中は不思議なものだ、虫の好かない奴が親切で、気のあつた友達が悪漢わるものだなんて、人を馬鹿ばかにしている。大方田舎いなかだから万事東京のさかに行くんだろう。物騒ぶつそうな所だ。今に火事が氷つて、石が豆腐とうふになるかも知れない。しかし、あの山嵐が生徒を煽動するなんて、いたずらをしそうもないがな。一番人望のある教師だと云うから、やろうと思つたら大抵たいていの事は出来るかも知れないが、——第一そんな廻まわりくどい事をしないでも、じかにおれを捕つかまえて喧嘩けんかを吹き懸かけりや手数が省け

る訳だ。おれが邪魔じやまになるなら、実はこれこれだ、邪魔だから辞職してくれと云や、よさそうなもんだ。物は相談ずくでどうでもなる。向うむこの云い条がもつともなら、明日にでも辞職してやる。ここばかり米が出来る訳でもあるまい。どこの果はてへ行つたつて、のたれ死じにはしないつもりだ。山嵐もよつぽど話せない奴だな。

ここへ来た時第一番に氷水を奢おごつたのは山嵐だ。そんな裏表のある奴から、氷水でも奢つてもらつちや、おれの顔に関わる。おれはたった一杯ばいしか飲まなかつたから一銭五厘りんしか払はらわしちやない。しかし一銭だろ

うが五厘だろうが、詐欺師さぎしの恩おんになつては、死ぬまで心持ちがよくない。あした学校へ行つたら、一錢五厘返しておこう。おれは清きよから三円借りている。その三円は五年経たつた今日までまだ返さない。返せないんじゃない。返さないんだ。清は今に返すだろうなどと、かりそめにもおれの懐中かいちゆうをあてにしてはいない。おれも今に返そうなどと他人がましい義理立てはしないつもりだ。こつちがこんな心配をすればするほど清の心を疑ぐるようなもので、清の美しい心にけちを付けると同じ事になる。返さないのは清を踏ふみつけるのじゃ

ない、清をおれの片破れかたわと思うからだ。清と山嵐とはもとより比べ物にならないが、たとい氷水だろうが、甘茶あまぢやだろうが、他人から恵めぐみを受けて、だまつているのは向うをひとかどの人間と見立てて、その人間に対する厚意の所作だ。割前を出せばそれだけの事で済むところを、心のうちで難有ありがたいと恩に着るのは銭金で買える返礼じゃない。無位無冠でも一人前の独立した人間だ。独立した人間が頭を下げるのは百万両より尊たつといお礼と思わなければならない。

おれはこれでも山嵐に一銭五厘ふんぼつ奮発ふんぱつさせて、百万両

より尊とい返礼をした気でいる。山嵐は難有ありがたいと思つてしかるべきだ。それに裏へ廻つて卑劣ひれつな振舞ふるまいをするとは怪けしからん野郎やろうだ。あした行つて一錢五厘返してしまえば借りも貸しもない。そうしておいて喧嘩をしてやろう。

おれはここまで考えたら、眠ねむくなつたからぐうぐう寝ねてしまった。あくる日は思う仔細しさいがあるから、例刻より早ヤ目に出校して山嵐を待ち受けた。ところがなかなか出て来ない。うらなりが出て来る。漢学の先生が出て来る。野だが出て来る。しまいには赤シャツま

で出て来たが山嵐の机の上は白墨はくぼくが一本たて竝たてに寝ているだけで閑静かんせいなものだ。おれは、控所ひかえじよへはいるや否や返そうと思つて、うちを出る時から、湯銭のように手の平へ入れて一銭五厘、学校まで握にぎつて来た。おれは膏あぶらっ手だから、開けてみると一銭五厘が汗あせをかいている。汗をかいてる銭を返しちや、山嵐が何とか云うだろうと思つたから、机の上へ置いてふうふう吹いてまた握つた。ところへ赤シャツが来て昨日は失敬、迷惑めいわくでしたらうと云つたから、迷惑じゃありません、お蔭で腹が減りましたと答えた。すると赤シャツは山嵐の

机の上へ肱ひじを突ついて、あの盤ばん台面だいづらをおれの鼻の側面へ持つて来たから、何をするかと思つたら、君昨日返りがけに船の中で話した事は、秘密にしてくれたまえ。まだ誰だれにも話しやしますまいねと云つた。女のような声を出すだけに心配性な男と見える。話さない事はたしかである。しかしこれから話そうと云う心持ちで、すでに一錢五厘手の平に用意しているくらいだから、ここで赤シャツから口留めをされちゃ、ちと困る。赤シャツも赤シャツだ。山嵐と名を指さないにしろ、あれほど推察の出来る謎なぞをかけておきながら、今さらそ

の謎を解いちや迷惑だとは教頭とも思えぬ無責任だ。
元来ならおれが山嵐と戦争をはじめて鎬しのぎを削けずつてる
真中まんなかへ出て堂々とおれの肩かたを持つべきだ。それでこそ
一校の教頭で、赤シャツを着ている主意も立つという
もんだ。

おれは教頭に向むかつて、まだ誰にも話さないが、これ
から山嵐と談判するつもりだと云つたら、赤シャツは
大いに狼狽ろうばいして、君そんな無法な事をしちや困る。僕ぼく
は堀田君ほったの事について、別段君に何も明言した覚えは
ないんだから——君がもしここで乱暴を働いてくれる

と、僕は非常に迷惑する。君は学校に騒動そうどうを起すつもりで来たんじゃないやなろうと妙みょうに常識をはずれた質問をするから、当り前あたまえです、月給をもらつたり、騒動を起したりしちや、学校の方でも困るでしょうと云つた。すると赤シャツはそれじゃ昨日の事は君の参考さんこうだけにとめて、口外してくるなと汗をかいて依頼いらいに及ぶおよから、よろしい、僕も困るんだが、そんなにあなたあなたが迷惑めいわくならよしまししょうと受け合つた。君大丈夫だいじょうぶかいと赤シャツは念ねんを押おした。どこまで女らしいんだか奥行おくゆきがわからない。文学士なんて、みんなあんな連中ならつ

まらんものだ。辻褄つじつまの合わない、論理に欠けた注文を
して恬然てんぜんとしている。しかもこのおれを疑ぐつてる。
はばか
憚りながら男だ。受け合つた事を裏へ廻つて反古ほごにす
るようなさもしい了見りようけんはもつてるもんか。

ところへ両隣りようどなりの机の所有者も出校したんで、赤
シャツは早々自分の席へ帰つて行つた。赤シャツは歩あ
るき方から気取つてる。部屋の中を往来するのでも、
音を立てないように靴くつの底をそつと落すおと。音を立てな
いであるくのが自慢じまんになるもんだとは、この時から始
めて知つた。泥棒どろぼうの稽古けいこじゃあるまいし、当り前にす

るがいい。やがて始業の喇叭らっぱがなつた。山嵐はとうとう出て来ない。仕方がないから、一銭五厘を机の上へ置いて教場へ出掛でかけた。

授業の都合つごうで一時間目は少し後おくれて、控所へ帰つたら、ほかの教師はみんな机を控えて話をしている。山嵐もいつの間にか来ている。欠勤だと思つたら遅刻ちこくしたんだ。おれの顔を見るや否や今日は君のお蔭で遅刻したんだ。罰金ばっきんを出したまえと云つた。おれは机の上にあつた一銭五厘を出して、これをやるから取つておけ。先達せんだつて通町とおりちょうで飲んだ氷水の代だと山嵐の前へ置く

と、何を云つてゐるんだと笑いかけたが、おれが存外真面目まじめでいるので、つまらない冗談じょうたんをするなと錢をおれの机の上に掃はき返した。おや山嵐の癖くせにどこまでも奢る気だな。

「冗談じやない本当だ。おれは君に氷水を奢られる因縁いんえんがないから、出すんだ。取らない法があるか」

「そんなに一錢五厘が気になるなら取つてもいいが、なぜ思い出したように、今時分返すんだ」

「今時分でも、いつ時分でも、返すんだ。奢られるのが、いやだから返すんだ」

山嵐は冷然とおれの顔を見てふんと云つた。赤シャツの依頼がなければ、ここで山嵐の卑劣ひれつをあばいて大喧嘩をしてやるんだが、口外しないと受け合つたんだから動きがとれない。人がこんなまっかに真赤になつてるのにふんという理窟りくつがあるものか。

「氷水の代は受け取るから、下宿は出てくれ」

「一錢五厘受け取ればそれでいい。下宿を出ようが出まいがおれの勝手だ」

「ところが勝手にでない、昨日、あすこの亭主ていしゅが来て君に出してもらいたいと云うから、その訳を聞いたら亭主の

云うのはもつともだ。それでももう一応たしかめるつもりで今朝あすこへ寄つて詳しい話を聞いてきたんだ」

おれには山嵐の云う事が何の意味だか分らない。

「亭主が君に何を話したんだか、おれが知ってるもんか。そう自分だけで極めたって仕様があるか。訳があるなら、訳を話すが順だ。てんから亭主の云う方がもつともだなんて失敬千万な事を云うな」

「うん、そんなら云つてやろう。君は乱暴である下宿で持て余まされてるんだ。いくら下宿の女房だって、

下女たあ違うぜ。足を出して拭ふかせるなんて、威張いばり過ぎるさ」

「おれが、いつ下宿の女房に足を拭かせた」

「拭かせたかどうだか知らないが、とにかく向うじや、君に困こつてるんだ。下宿料の十円や十五円は懸物かけものを一い幅はく売りや、すぐ浮ういてくるつて云つてたぜ」

「利いた風な事をぬかす野郎やろうだ。そんなら、なぜ置いた」

「なぜ置いたか、僕は知らん、置くことは置いたんだが、いやになつたんだから、出ると云うんだらう。君出て

やれ」

「当り前だ。居てくれと手を合せたつて、居るものか。一体そんな云い懸がりを云うような所へ周旋しゆうせんする君からしてが不埒ふらちだ」

「おれが不埒か、君が大人おとなしくないんだか、どつちかだろ」

山嵐もおれに劣おとらぬ肝癩かんしゃくも持ちだから、負け嫌きらいな大きな声を出す。控所に居た連中は何事が始まつたかと思つて、みんな、おれと山嵐の方を見て、顚あごを長くしてぼんやりしている。おれは、別に恥はずかしい事をし

た覚えはないんだから、立ち上がりながら、部屋中一通り見巡みまわしてやった。みんなが驚おどろいてるなかに野だだけは面白そうに笑っていた。おれの大きな眼めが、貴様も喧嘩をするつもりかと云う権幕で、野だの干瓢かんびょうづらを射貫いぬいた時に、野だは突然真面目な顔をして、大いにつつしんだ。少し怖こわかったと見える。そのうち喇叭が鳴る。山嵐もおれも喧嘩を中止して教場へ出た。

午後は、先夜おれに対して無礼を働いた寄宿生の処

分法についての会議だ。会議というものは生れて始めてだからとんと容子が分らないが、職員が寄つて、たかつて自分勝手な説をたてて、それを校長が好い加減に纏めるのだらう。纏めるといふのは黒白の決しかねる事柄ことについて云うべき言葉だ。この場合のような、誰が見たつて、不都合としか思われな事件に会議をするのは暇潰ひまつぶしだ。誰が何と解釈したつて異説の出ようはずがない。こんな明白なのは即座そくざに校長が処分してしまえばいいに。随分決断ずいぶんのない事だ。校長つてものが、これならば、何の事はない、煮え切にらない愚図ぐず

の異名だ。

会議室は校長室の隣となりにある細長い部屋で、平常は食堂の代理を勤める。黒い皮で張った椅子いすが二十脚きやくばかり、長いテーブルの周囲に並ならんでちよつと神田の西洋料理屋ぐらいな格だ。そのテーブルの端はじに校長が坐すわつて、校長の隣りに赤シャツが構える。あとは勝手次第に席に着くんだそうだが、体操たいそうの教師だけはいつも席末に謙遜けんそんするという話だ。おれは様子が分らないから、博物の教師と漢学の教師の間へはいり込こんだ。向うを見ると山嵐と野だが並んでる。野だの顔はどう

考えても劣等だ。喧嘩はしても山嵐の方が遥かに趣がある。おやじの葬式の時に小日向の養源寺の座敷にかかつてた懸物はこの顔によく似ている。坊主に聞いてみたら韋駄天いだてんと云う怪物だそうだ。今日は怒おこってるから、眼をぐるぐる廻しちや、時々おれの方を見る。そんな事で威嚇おどかされてたまるもんかと、おれも負けないう気で、やつぱり眼をぐりつかせて、山嵐をにらめてやった。おれの眼は恰好かつこうはよくないが、大きい事においては大抵な人には負けない。あなたは眼が大きいから役者になるときつと似合いますと清がよく云ったく

もう大抵お揃いそろいでしようかと校長が云うと、書記の川村と云うのが一つ二つと頭数を勘定かんじょうしてみる。一人足りない。一人不足ですがと考えていたが、これは足りないはずだ。唐茄子とうなすのうらなり君が来ていない。おれとうらなり君とはどう云う宿世すくせの因縁か知らないが、この人の顔を見て以来どうしても忘れられない。控所へくれば、すぐ、うらなり君が眼に付く、途中とちゆうをあるいていても、うらなり先生の様子あおが心に浮ぶうか。温泉へ行くと、うらなり君が時々蒼い顔あおをして湯壺ゆつぽのなかに

膨ふくれている。挨拶あいさつをするとへえと恐縮きようしゆくして頭を下げるから気の毒になる。学校へ出てうらなり君ほど大人しい人は居ない。めつたに笑った事もないが、余計な口をきいた事もない。おれは君子という言葉を書物の上で知ってるが、これは字引にあるばかりで、生きてるものではないと思つてたが、うらなり君に逢あつてから始めて、やつぱり正体のある文字だと感心したくらいだ。

このくらい関係の深い人の事だから、会議室へはいらぬや否や、うらなり君の居ないのは、すぐ気がついた。

実を云うと、この男の次へでも坐すわろうかと、ひそかに目標めじるしにして来たくらいだ。校長はもうやがて見えるでしよう、自分の前むらさきにある紫の袱紗包ふくさづつみをほどいて、蒔菴版こんにやくばんのような者を読んでゐる。赤シャツは琥珀こはくのパイプを絹ハンケチで磨みがき始めた。この男はこれが道楽である。赤シャツ相当のところだろう。ほかの連中は隣り同志で何だか私語ささやき合っている。手持無沙汰てもちぶさたなのは鉛筆えんぴつの尻しりに着いている、護謨ゴムの頭でテーブルの上へしきりに何か書いている。野だは時々山嵐に話しかけるが、山嵐は一向応じない。ただうんとかああと云う

ばかりで、時々怖い眼をして、おれの方を見る。おれも負けずに睨め返す。

ところへ待ちかねた、うらなり君が気の毒そうにはいつて来て少々用事がありました、遅刻致しましたと慇懃に狸に挨拶をした。では会議を開きますと狸はまず書記の川村君に蒔菔版を配布させる。見ると最初が処分の件、次が生徒取締の件、その他二三ヶ条である。狸は例の通りもつたいぶつて、教育の生霊という見えでこんな意味の事を述べた。「学校の職員や生徒に過失のあるのは、みんな自分の寡徳の致すところで、何

か事件がある度に、自分はよくこれで校長が勤まると
ひそかに慚愧ざんきの念に堪たえんが、不幸にして今回もまた
かかる騒動を引き起したのは、深く諸君に向つて謝罪
しなければならん。しかしひとたび起つた以上は仕方
がない、どうにか処分をせんければならん、事實はす
でに諸君のご承知の通りであるからして、善後策につ
いて腹藏のない事を参考のためにお述べ下さい」

おれは校長の言葉を聞いて、なるほど校長だの狸だ
のと云うものは、えらい事を云うもんだと感心した。
こう校長が何もかも責任を受けて、自分の咎とがだとか、

不徳だとか云うくらいなら、生徒を処分するのは、やめにして、自分から先へ免職めんしよくになつたら、よさそうなものだ。そうすればこんな面倒めんどうな会議なんぞを開く必要もなくなる訳だ。第一常識から云いつても分つてる。おれが大人しく宿直をする。生徒が乱暴をする。わるいのは校長でもなけりや、おれでもない、生徒だけに極きまつてる。もし山嵐せんどうが煽動せんどうしたとすれば、生徒と山嵐を退治たいじればそれでたくさんだ。人の尻しりを自分で背負しよい込んで、おれの尻しりだ、おれの尻しりだと吹き散らかす奴が、どこの国にあるもんか、狸でなくつちや出来る芸当

じやない。彼はこんな条理じょうりに適かなわなない議論を吐はいて、得意気に一同を見廻した。ところが誰も口を開くものがない。博物の教師は第一教場の屋根に烏からすがとまってるのを眺ながめている。漢学の先生は蒟蒻版こんやくばんを畳たたんだり、延ばしたりしてる。山嵐はまだおれの顔をにらめていゝ。会議と云うものが、こんな馬鹿ばか気かげなものなら、欠席して昼寝でもしている方がましだ。

おれは、じれったくなつたから、一番大いに弁じてやろうと思つて、半分尻をあげかけたら、赤シャツが何か云い出したから、やめにした。見るとパイプをし

まつて、縞しまのある絹ハンケチで顔をふきながら、何か云つてゐる。あの手巾はんけちはきつとマドンナから巻き上げたに相違そういない。男は白い麻あざを使うもんだ。「私も寄宿生の乱暴を聞いてはなはだ教頭として不行届ふゆきとどきであり、かつ平常の徳化が少年に及ばなかつたのを深く慚はずるのであります。でこう云う事は、何か陥欠かんけつがあると起るもので、事件その物を見ると何だか生徒だけがわるいようであるが、その真相を極めると責任はかえつて学校にあるかも知れない。だから表面上にあらわれたところだけで嚴重な制裁を加えるのは、かえつて未来

のためによくないかとも思われます。かつ少年血気のものであるから活気があふれて、善悪の考えはなく、半ば無意識にこんな悪戯いたずらをやる事はないとも限らん。

でもとより処分法は校長のお考えにある事だから、私の容喙ようかいする限りではないが、どうかその辺をご斟酌しんしやくになつて、なるべく寛大なお取計とりはからいを願いたいと思います」

なるほど狸が狸なら、赤シャツも赤シャツだ。生徒があばれるのは、生徒がわるいんじゃない教師が悪るいんだと公言している。気狂きちがいが人の頭を撲なぐり付けるの

は、なぐられた人がわるいから、気狂がなぐるんだそ
うだ。ありがた難有い仕合せだ。活気にみちて困るなら運動場
へ出て相撲すもうでも取るがいい、半ば無意識に床の中へ
バツタを入れられてたまるものか。この様子じゃ寝頸ねくび
をかかれても、半ば無意識だつて放免するつもりだろ
う。

おれはこう考えて何か云おうかなと考えてみたが、
云うなら人を驚ろすかように滔々とうとうと述べたてなくつ
ちやつまらない、おれの癖として、腹が立ったときに
口をきくと、一言か三言で必ず行き塞つまってしまふ。狸

でも赤シャツでも人物から云うと、おれよりも下等だが、弁舌はなかなか達者だから、まずい事を喋舌しゃべつて揚足あげあしを取られちゃ面白くない。ちよつと腹案を作つてみよう、胸のなかで文章を作つてる。すると前に居た野だが突然起立したには驚ろいた。野だの癖に意見を述べるなんて生意気だ。野だは例のへらへら調で「実に今回のバツタ事件及び咄喊とっかん事件は吾々われわれ心ある職員をして、ひそかに吾校わが将来の前途ぜんとに危惧きぐの念を抱いだかしむるに足る珍事ちんじでありまして、吾々職員たるものはこの際奮ふるつて自ら省りみて、全校の風紀を振肅しんしゆくしなけ

ればなりません。それでただ今校長及び教頭のお述べ
になつたお説は、実に肯綮こうけいに中あたつた剴切がいせつなお考えで私
は徹頭徹尾賛成致します。どうかなるべく寛大かんだいのご処
分あおを仰あおぎたいと思います」と云つた。野だの云う事は
言語はあるが意味がない、漢語をのべつに陳列ちんれつするぎ
りで訳が分らない。分つたのは徹頭徹尾賛成致します
と云う言葉だけだ。

おれは野だの云う意味は分らないけれども、何だか
非常に腹が立つたから、腹案も出来ないうちに起たち上
がつてしまった。「私は徹頭徹尾反対です……」と云つ

たがあとが急に出て来ない。「……そんな頓珍漢な、処

分は大嫌いだいきらです」とつけたら、職員が一同笑い出した。

「一体生徒が全然悪わるいのです。どうしても詫あやまらせな
くつちや、癖になります。退校さしても構いません。

……何だ失敬な、新しく来た教師だと思つて……」と
云つて着席した。すると右隣りに居る博物が「生徒が

わるい事も、わるいが、あまり嚴重な罰などをすると
かえつて反動を起していけないでしょう。やつぱり教
頭のおつしやる通り、寛な方に賛成します」と弱い事
を云つた。左隣の漢学は穩便説おんびんせつに賛成と云つた。歴史

も教頭と同説だと云つた。忌々しい、大抵のものは赤シャツ党だ。こんな連中が寄り合つて学校を立てていりや世話はない。おれは生徒をあやまらせるか、辞職するか二つのうち一つに極めてるんだから、もし赤シャツが勝ちを制したら、早速うちへ帰つて荷作りをする覚悟かくごでいた。どうせ、こんな手合てあいを弁口べんこうで屈伏くつぷくさせる手際はなし、させたところでいつまでご交際を願うのは、こつちでご免だ。学校に居ないとすればどうなつたつて構うもんか。また何か云うと笑うに違いない。だれが云うもんかと澄すましていた。

すると今までだまつて聞いていた山嵐が奮然として、
起ち上がった。野郎また赤シャツ賛成の意を表するな、
どうせ、貴様とは喧嘩だ、勝手にしろと見ていると山
嵐は硝子窓を振ふるわせるような声で「私わたくしは教頭及びその
他諸君のお説には全然不同意であります。というものはこの事件はどの点から見ても、五十名の寄宿生が新
来の教師某ぼうし氏を軽侮けいぶしてこれを翻弄ほんろうしようとした所しよ為い
とより外ほかには認められないのであります。教頭はその源
因を教師の人物いかににお求めになるようであります
が失礼ながらそれは失言かと思ひます。某氏が宿直に

あたられたのは着後早々の事で、まだ生徒に接せられてから二十日に満たぬ頃ころであります。この短かい二十日間において生徒は君の学問人物を評価し得る余地がないのであります。軽侮されべき至当な理由があつて、軽侮を受けたのなら生徒の行為に斟酌しんしゃくを加える理由もありません。何らの原因もないのに新来の先生を愚弄ぐろうするような軽薄な生徒を寛假かんかしては学校の威信いしんに関わる事と思ひます。教育の精神は単に学問を授けるばかりではない、高尚こうしような、正直な、武士的な元気を鼓吹こすいすると同時に、野卑やひな、軽躁けいそうな、暴慢ぼうまんな悪風を

動おそろが大きいなるのと姑息こそくな事を云つた日にはこの弊風へいふうはいつ矯正きようせい出来るか知れません。かかる弊風を杜絶とぜつするためこそ吾々はこの学校に職を奉じているので、これを見逃みのがすくらいなら始めから教師にならん方がいいと思います。私は以上の理由で寄宿生一同を嚴罰げんばつに処する上に、当該教師の面前において公けに謝罪の意を表せしむるのを至当の所置と心得ます」と云いながら、どんと腰こしを卸おろした。一同はだまつて何にも言わない。赤シャツはまたパイプを拭ふき始めた。おれは何

だか非常に嬉うれしかった。おれの云おうと思うところをおれの代りに山嵐がすっかり言ってくれたようなものだ。おれはこう云う単純な人間だから、今までの喧嘩はまるで忘れて、大いに難有ありがたいと云う顔をもつて、腰を卸した山嵐の方を見たら、山嵐は一向知らん面かおをしている。

しばらくして山嵐はまた起立した。「ただ今ちよつと失念して言い落おとしましたから、申します。当夜の宿直員は宿直中外出して温泉に行かれたようであるが、あれはもつての外の事と考えます。いやしくも自分が

一校の留守番を引き受けながら、咎める者のないのをさいわい幸に、場所もあろうに温泉などへ入湯にいくなどと云うのは大きな失体である。生徒は生徒として、この点については校長からとくに責任者にご注意あらん事を希望します」

妙な奴だ、ほめたと思つたら、あとからすぐ人の失策をあばいている。おれは何の気もなく、前の宿直が出あるいた事を知つて、そんな習慣だと思つて、つい温泉まで行ってしまつたんだが、なるほどそう云われてみると、これはおれが悪るかつた。攻撃こうげきされても仕

方がない。そこでおれはまた起つて「私は正に宿直中に温泉に行きました。これは全くわるい。あやまります」と云つて着席したら、一同がまた笑い出した。おれが何か云いさえすれば笑う。つまらん奴等だ。貴様等これほど自分のわるい事を公けにわるかつたと断言出来るか、出来ないから笑うんだらう。

それから校長は、もう大抵ご意見もないようでありますから、よく考えた上で処分しましょうと云つた。ついでだからその結果を云うと、寄宿生は一週間の禁足になつた上に、おれの前へ出て謝罪をした。謝罪を

しなければその時辞職して帰るところだったがなまじい、おれのいう通りになったのでとうとう大変な事になつてしまつた。それはあとから話すが、校長はこの時会議の引き続きだと号してこんな事を云つた。生徒の風儀ふうぎは、教師の感化で正していかななくてはならん、その一着手として、教師はなるべく飲食店などしゅつにゅうに出入しない事にしたい。もつとも送別会などの節は特別であるが、単独にあまり上等でない場所へ行くのはよしい——たとえば蕎麦屋そばやだの、団子屋だんごやだの——と云いかけたらまた一同が笑つた。野だが山嵐を見て天麩羅てんぷら

と云つて目くばせをしたが山嵐は取り合わなかつた。
いい気味だ。

おれは脳がわるいから、狸の云うことなんか、よく分らないが、蕎麦屋や団子屋へ行つて、中学の教師が勤まらなくつちや、おれみたような食い心棒しんぼうにや到底出来つ子ないと思つた。それなら、それでいいから、初手から蕎麦と団子の嫌いなものと注文して雇やとうがい。だんまりで辞令を下げたおいて、蕎麦を食うな、団子を食うなと罪なお布令ふれを出すのは、おれのような外に道楽のないものにとつては大変な打撃だ。すると

赤シャツがまた口を出した。「元来中学の教師などは
社会の上流にくらいするものだからして、単に物質的
の快樂ばかり求めるべきものでない。その方に耽ふけると
つい品性にわるい影響えいきょうを及ぼすようになる。しかし人
間だから、何か娯樂ごらくがないと、田舎いなかへ来て狭せまい土地で
は到底暮くらせるものではない。それで釣つりに行くとか、文
学書を読むとか、または新体詩や俳句を作るとか、何
でも高尚こうしょうな精神的娯樂を求めなくってはいけない
……」

だまつて聞いてると勝手な熱を吹く。沖おきへ行つて

肥料こやしを釣つたり、ゴルキが露西亞ロシアの文学者だつたり、
馴染なじみの芸者が松まつの木の下に立つたり、古池へ蛙かわずが飛び
込んだりするものが精神的娯楽なら、天麩羅を食つて団
子を吞のみ込むのも精神的娯楽だ。そんな下さらない娯
楽を授けるより赤シャツの洗濯せんたくでもするがいい。あん
まり腹が立つたから「マドンナに逢あうのも精神的娯楽
ですか」と聞いてやった。すると今度は誰も笑わない。
妙な顔をして互たがいに眼と眼を見合せている。赤シャツ自
身は苦しそうに下を向いた。それ見ろ。利いたろう。
ただ気の毒だつたのはうらなり君で、おれが、こう

云つたら蒼い顔をますます蒼くした。

七

おれは即夜そくや下宿を引き払ほらつた。宿へ帰つて荷物をまとめていると、女房にようぼうが何か不都合ふつごうでもございましたか、お腹の立つ事があるなら、云いつておくれたら改めますと云う。どうも驚おどろく。世の中にはどうして、こんな要領を得ない者ばかり揃そろつてるんだらう。出てもらいたいんだか、居てもらいたいんだか分わかりやしない。まるで気狂きちがいだ。こんな者を相手に喧嘩けんかをしたつて江戸えどつ

子の名折れだから、車屋をつれて来てきつさとして出てきた。

出た事は出たが、どこへ行くというあてもない。車屋が、どちらへ参りますと云うから、だまつて尾ついて来い、今にわかる、と云つて、すたすたやつて来た。面倒めんどうだから山城屋へ行こうかとも考えたが、また出なければならぬから、つまり手数だ。こうして歩いてるうちには下宿とか、何とか看板のあるうちを目付け出すだろう。そうしたら、そこが天意あまごころに叶かなったわが宿と云う事にしよう。とぐるぐる、閑静かんせいで住みよさそう

な所をあるいているうち、とうとう鍛冶屋町へ出てしまつた。ここは土族屋敷やしきで下宿屋などのある町ではないから、もつと賑にぎやかな方へ引き返そうかとも思つたが、ふといい事を考え付いた。おれが敬愛するうらなり君はこの町内に住んでいる。うらなり君は土地の人で先祖代々の屋敷を控ひかえているくらいだから、この辺の事情には通じているに相違そういない。あの人を尋ねたずて聞いたら、よさそうな下宿を教えてくださいませんか。幸さいわい一度挨拶あいさつに来て勝手は知つてるから、捜さがしてあ
るく面倒はない。ここだろうと、いい加減に見当をつ

けて、ご免めんご免と二返ばかり云うと、奥おくから五十ぐら
いな年寄としよりが古風な紙燭しそくをつけて、出て来た。おれは若
い女きらも嫌いではないが、年寄を見ると何だかなつかし
い心持ちがする。大方きよ清がすぎだから、その魂たましいが方々
のお婆ばあさんに乗り移るんだろう。これは大方うらなり
君のおつ母かさんだろ。切り下げの品格のある婦人だ
が、よくうらなり君に似ている。まあお上がりと云う
ところを、ちよつとお目にかかりたいからと、主人を
玄関げんかんまで呼び出して実はこれこれだが君どこか心当り
はありませんかと尋ねてみた。うらなり先生それはさ

ぞお困りでございましょう、としばらく考えていたが、この裏町に萩野はぎのと云つて老人夫婦くぎりで暮らしているものがある、いつぞや座敷ざしきを明けておいても無駄むだだから、たしかな人があるなら貸してもいいから周旋しゅうせんしてくれと頼たのんだ事がある。今でも貸すかどうか分らんが、まあいつしよに行つて聞いてみましよう、親切に連れて行つてくれた。

その夜から萩野の家の下宿人となつた。驚おどろいたのは、おれがいか銀の座敷を引き払うと、翌日あくるひから入れ違ちがいに野だが平気な顔をして、おれの居た部屋を占領せんりょうした

事だ。さすがのおれもこれにはあきれた。世の中はいかさま師ばかりで、お互たがいに乗せつこをしているのかも知れない。いやになった。

世間がこんなものなら、おれも負けない気で、世間並せけんなみにしなくちや、遣やりきれない訳になる。巾着切きんちやくきりの上前をはねなければ三度のご膳ぜんが戴いたけないと、事が極きまればこうして、生きてるのも考え物だ。と云つてぴんぴんした達者なからだで、首を縊くつちや先祖へ濟まない上に、外聞が悪い。考えると物理学校などへはいつて、数学なんて役にも立たない芸を覚えるよりも、

六百円を資本もとでにして牛乳屋でも始めればよかった。そうすれば清もおれの傍そばを離はなれずに済いむし、おれも遠くから婆さんの事を心配しずに暮くらされる。いつしよに居るうちは、そうでもなかつたが、こうして田舎いなかへ来てみると清はやつぱり善人だ。あんな気立きだてのいい女は日本中さがして歩いたつてめつたにはない。婆さん、おれの立つときに、少々風邪かぜを引いていたが今頃いまごろはどうしてるか知らん。先だつての手紙を見たらさぞ喜んだろう。それにしても、もう返事がきそうなものだが——おれはこんな事ばかり考えて二三日暮くっていた。

気になるから、宿のお婆さんに、東京から手紙は来
ませんかと時々尋ねてみるが、聞きたんびに何にも参
りませんと気の毒そうな顔をする。ここの夫婦はいか
銀とは違つて、もとが士族だけに双方共上品だ。爺さ
んが夜よるになると、変な声を出して謡うたいをうたうには閉
口するが、いか銀のようにお茶を入れましようむやみと無暗
に出て来ないから大きに楽だ。お婆さんは時々部屋へ
来ていろいろな話をする。どうして奥さんをお連れな
さつて、いつしよにお出いでなんだのぞなもしなどと質
問をする。奥さんがあるように見えますかね。可哀想かわいそう

にこれでもまだ二十四ですぜと云つたらそれでも、あなた二十四で奥さんがおありなさるのは当り前ぞなもしと冒頭ぼうとうを置いて、どこの誰だれさんは二十でお嫁よめをお貰もらいたの、どこの何とかさんは二十二で子供を二人ふたりお持ちたのと、何でも例を半ダースばかり挙げて反駁はんぱくを試みたには恐れ入った。それじゃ僕ぼくも二十四でお嫁をお貰いるけれ、世話をしておくれんかなと田舎言葉を真似まねて頼んでみたら、お婆さん正直に本当かなもしと聞いた。

「本当ほんまの本当のつて僕あ、嫁が貰いたくつて仕方がな

いんだ」

「そうじゃろうがな、もし。若いうちは誰もそんなものじゃけれ」この挨拶あいさつには痛み入って返事が出来なかつた。

「しかし先生はもう、お嫁がおありなさるに極きまつとらい。私はちやんと、もう、睨ねらんどるぞなもし」

「へえ、活眼かつがんだね。どうして、睨ねらんどるんですか」
「どうしてて。東京から便りはないか、便りはないかて、毎日便りを待ち焦こがれておいでるじゃないかなもし」

「こいつあ驚いた。大変な活眼だ」

「中あたりましたろうがな、もし」

「そうですね。中つたかも知れませんよ」

「しかし今時の女子おなごは、昔むかしと違ちがうて油断が出来んけれ、お気をお付けたがええぞなもし」

「何ですかい、僕の奥さんが東京で間男でもこしらえていますかい」

「いいえ、あなたの奥さんはたしかじやけれど……」

「それで、やっと安心した。それじゃ何を気を付けるんですい」

「あなたのはたしか——あなたのはたしかじゃが——」

「どこに不たしかなのが居ますかね」

「ここ等らにも大分居おります。先生、あの遠山のお嬢じようさんをご存知かなもし」

「いいえ、知りませんね」

「まだご存知ないかなもし。ここらであなた一番の別嬪べっぴんさんじゃがなもし。あまり別嬪さんじゃけれ、学校の先生方はみんなマドンナマドンナと言うといでるぞなもし。まだお聞きんのかなもし」

「うん、マドンナですか。僕あ芸者の名かと思った」

「いいえ、あなた。マドンナと云うと唐人とうじんの言葉で、別嬪べっぴんさんの事じゃろうがなもし」

「そうかも知れないね。驚いた」

「大方画学の先生がお付けた名ぞなもし」

「野だがつけたんですかい」

「いいえ、あの吉川先生よしかわがお付けたのじゃがなもし」

「そのマドンナが不たしかなんですかい」

「そのマドンナさんが不たしかなマドンナさんでな、

もし」

「厄介やっかいだね。渾名あだなの付いてる女にや昔むかしから碌ろくなもの

居ませんからね。そうかも知れませんよ」

「ほん当にそうじゃなもし。鬼神きじんのお松まつじやの、だつき姉妃のお百じやのてて怖こわい女が居おりましたなもし」

「マドンナもその同類なんですかね」

「そのマドンナさんがなもし、あなた。そらあの、あなたをここへ世話をしておくれた古賀先生なもし——あの方の所へお嫁よめに行く約束やくそくが出来ていたのじやがなもし——」

「へえ、不思議なもんですね。あのうらなり君が、そんな艶福えんぷくのある男とは思わなかった。人は見懸みかけによら

ない者だな。ちつと気を付けよう」

「ところが、去年あすこのお父さんが、お亡くなりて、——それまではお金もあるし、銀行の株も持つてお出るし、万事都合がよかつたのじゃが——それからというものは、どういふものか急に暮し向きが思わしくなくなつて——つまり古賀さんがあまりお人が好過ぎるけれ、お欺だまされたんぞなもし。それや、これやでお興入こしいれも延びているところへ、あの教頭さんがお出いでて、是非お嫁にほしいとお云いるのじゃがなもし」

「あの赤シャツがですか。ひどい奴やつだ。どうもあの

シャツはただのシャツじゃないと思つてた。それから？」

「人を頼んで懸合かけおうておみると、遠山さんでも古賀さんに義理があるから、すぐには返事は出来かねて——まあよう考えてみようぐらいの挨拶をおしたのじやがなもし。すると赤シャツさんが、手蔓てづるを求めて遠山さんの方へ出入でいりをおしるようになったて、とうとうあなた、お嬢さんを手馴てなづ付けておしまいたのじやがなもし。赤シャツさんも赤シャツさんじやが、お嬢さんもお嬢さんじやてて、みんなが悪わるく云いますのよ。いったん

古賀さんへ嫁に行くて承知をしときながら、今さら
学士さんがお出た^{いで}けれ、その方に替^かえよてて、それ
じゃ今日^{こんにち}様へ済むまいがなもし、あなた」

「全く済まないね。今日様どころか明日様にも明後日
様にも、いつまで行つたつて済みっこありませんね」
「それで古賀さんにお気の毒じやてて、お友達の堀田^{ほった}
さんが教頭の所へ意見をしにお行きたら、赤シャツさ
んが、あしは約束のあるものを横取りするつもりはな
い。破約になれば貰うかも知れんが、今のところは遠
山家とただ交際をしているばかりじや、遠山家と交際

をするには別段古賀さんに済まん事もなからうとお云
いるけれ、堀田さんも仕方がなしにお戻りもどたそうな。

赤シャツさんと堀田さんは、それ以来折合おりあいがわるいとい
う評判ぞなもし」

「よくいろいろな事を知ってますね。どうして、そん
な詳しい事が分るんですか。感心しちまつた」

「狭せまいけれ何でも分りますぞなもし」

分り過ぎて困るくらいだ。この容子ようすじやおれの
天麩羅てんぷらや団子だんごの事も知ってるかも知れない。厄介やっかいな所
だ。しかしお蔭かげ様でマドンナの意味もわかるし、山嵐

と赤シャツの関係もわかるし大いに後学になった。ただ困るのはどつちが悪る者だか判然しない。おれのよ
うな単純なものには白とか黒とか片づけてもらわな
いと、どつちへ味方をしていいか分らない。

「赤シャツと山嵐たあ、どつちがいい人ですかね」

「山嵐て何ぞなもし」

「山嵐というのは堀田の事ですよ」

「そりや強い事は堀田さんの方が強そうじゃけれど、
しかし赤シャツさんは学士さんじゃけれ、働きはある
方かたぞな、もし。それから優しい事も赤シャツさんの方

が優しいが、生徒の評判は堀田さんの方がええというぞなもし」

「つまりどつちがいいんですかね」

「つまり月給の多い方が豪いえらのじやろうがなもし」

これじゃ聞いたって仕方がないから、やめにした。

それから二三日して学校から帰るとお婆さんがにこに

こして、へえお待遠さま。やつと参りました。と一本

の手紙を持って来てゆつくりご覧と云って出て行つた。

取り上げてみると清からの便りだ。符箋ふせんが二三枚まいついで

てるから、よく調べると、山城屋から、いか銀の方へ

廻まわして、いか銀から、萩野はぎのへ廻まわつて来たのである。その上山城屋では一週間ばかり逗留とまりゆうしている。宿屋だけに手紙まで泊とめるつもりなんだろう。開いてみると、非常に長いもんだ。坊ぼっちゃんの手紙を頂いてから、すぐ返事をかこうと思つたが、あいにく風邪を引いて一週間ばかり寝ねていたものだから、つい遅おそくなつて済まない。その上今時のお嬢さんのように読み書きが達者でないものだから、こんなまずい字でも、かくのによつぽど骨が折れる。甥おいに代筆を頼もうと思つたが、せつかくあげるのに自分でかかなくつちや、坊ぼっちゃん

んに済まないと思つて、わざわざ下たがきを一返して、それから清書をした。清書をするには二日で済んだが、下た書きをするには四日かかった。読みにくいかも知れないが、これでも一生懸命にかいたのだから、どうぞしまいまで読んでくれ。という冒頭ぼうとうで四尺ばかり何やらかやら認めしたたてある。なるほど読みにくい。字がまずいばかりではない、大抵たいてい平仮名だから、どこで切れて、どこで始まるのだから句読くとうをつけるのによつぽど骨が折れる。おれは焦せつ勝かちな性分だから、こんな長くて、分りにくい手紙は、五円やるから読んでくれと頼

まれても断わるのだが、この時ばかりは真面目まじめになつて、始はじめから終しまいまで読み通した。読み通した事は事実だが、読む方に骨が折れて、意味がつかないから、また頭から読み直してみた。部屋のなかは少し暗くなつて、前の時より見にくく、なつたから、とうとう椽鼻えんばなへ出て腰こしをかけながら鄭寧ていねいに拝見した。すると初秋はつあきの風が芭蕉ばしやうの葉を動かして、素肌すはだに吹ふきつけた。歸りに、読みかけた手紙を庭の方へなびかしたから、しまいぎわには四尺あまりの半切れがさらりさらりと鳴つて、手を放すと、向むこうの生垣まで飛んで行きそう

だ。おれはそんな事には構っていられない。坊っちゃん
んは竹を割ったような気性だが、ただ肝癩かんしゃくが強過ぎて
それが心配になる。——ほかの人に無暗むやみに渾名あだななんか、
つけるのは人に恨うらまれるもことになるから、やたらに
使っちゃいけない、もしつけたら、清だけに手紙で知
らせる。——田舎者は人がわるいそうだから、気をつ
けてひどい目に遭あわなないようにしろ。——氣候だつて
東京より不順に極つてるから、寝冷ねびえをして風邪を引い
てはいけない。坊っちゃんの手紙はあまり短過ぎて、
容子がよくわからないから、この次にはせめてこの手

紙の半分ぐらいの長さのを書いてくれ。——宿屋へ茶代を五円やるのはいいが、あとで困りやしないか、田舎へ行って頼りになるはお金ばかりだから、なるべく儉約して、万一の時に差支えないようにしなくつちやいけない。——お小遣がなくて困るかも知れないから、為替で十円あげる。——先だつて坊っちゃんからもらつた五十円を、坊っちゃんが、東京へ帰つて、うちを持つ時の足しにと思つて、郵便局へ預けておいたが、この十円を引いてもまだ四十円あるから大丈夫だ。——なるほど女と云うものは細かいものだ。

おれが椽鼻で清の手紙をひらつかせながら、考え込んでみると、しきりの襖ふすまをあけて、萩野のお婆さんが晩めしを持ってきた。まだ見てお出いでるのかなもし。えっぽど長いお手紙じゃなもし、と云ったから、ええ大事な手紙だから風に吹かしては見、吹かしては見るんだと、自分でも要領を得ない返事をして膳ぜんについた。見ると今夜も薩摩芋さつまいもの煮につけだ。ここのうちは、いかに銀よりも鄭寧ていねいで、親切で、しかも上品だが、惜おしい事に食い物がまずい。昨日も芋、一昨日おとといも芋で今夜も芋だ。おれは芋は大好きだと明言したには相違ないが、

こう立てつづけに芋を食わされては命がつづかない。
うらなり君を笑うどころか、おれ自身が遠からぬうちに、芋のうらなり先生になつちまう。清ならこんな時に、おれの好きまぐろな鮪まぐろのさし身か、蒲鉾かまぼこのつけ焼を食わせるんだが、貧乏びんぼう士族のけちん坊ぼうと来ちや仕方がない。どう考えても清といっしょでなくつちあ駄だめ目だ。もしあの学校に長くでも居る模様なら、東京から召よび寄よせてやろう。天麩羅蕎麦そばを食つちやならない、団子を食つちやならない、それで下宿に居て芋ばかり食つて黄色くなっているなんて、教育者はつらいものだ。

禅宗坊主だつて、これよりは口に栄耀えいようをさせているだ

ろう。——おれは一皿の芋を平げて、机ひきだしの抽斗ひきだしから生

卵を二つ出して、茶碗ちやわんの縁ふちでたたき割つて、ようやく

凌しのいだ。生卵でも營養をとらなくつちあ一週二十一

時間の授業が出来るものか。

今日は清の手紙で湯に行く時間が遅くなつた。しか

し毎日行きつけたのを一日でも欠かすのは心持ちがわ

るい。汽車にでも乗つて出懸でかけようと、例あかてぬぐいの赤手拭あかてぬぐいを

ぶら下げて停車場ていしやばまで来ると二三分前に発車したばかりで、

少々待たなければならぬ。ベンチへ腰を懸けて、

敷島しきしまを吹かしていると、偶然ぐうぜんにもうらなり君がやつて来た。おれはさつきの話聞いてから、うらなり君がなおさら気の毒になった。平常ふだんから天地の間に居候いそうろうをして、いるように、小さく構えているのがいかにも憐れあわに見えたが、今夜は憐れどころの騒さわぎではない。出来るならば月給を倍にして、遠山のお嬢さんと明日あしたから結婚けっこんさして、一ヶ月ばかり東京へでも遊びにやつてやりたい気がした矢先だから、やお湯ですか、さあ、こつちへお懸けなさいと威勢いせいよく席ゆずを譲ると、うらなり君は恐れ入った体裁で、いえ構かもうておくれなさるな、

と遠慮えんりよだか何だかやつぱり立つてる。少し待たなくつちや出ません、草臥くたびれますからお懸けなさいとまた勧めてみた。実はどうかして、そばへ懸けてもらいたかつたくらいに気の毒でたまらない。それではお邪魔じやまを致いたしましょうとようやくおれの云う事を聞いてくれた。世の中には野だみたように生意気な、出ないで済む所へ必ず顔を出す奴もいる。山嵐のようにおれが居なくつちや日本にっぽんが困るだろうと云うような面を肩かたの上へ載のせてる奴もいる。そうかと思うと、赤シャツのようにコスメチックと色男の間屋をもつて自ら任じてい

るのもある。教育が生きてフロックコートを着ればおれになるんだと云わぬばかりの狸たぬきもいる。皆々みなみなそれ相應に威張つてるんだが、このうらなり先生のように在れどもなきがごとく、人質に取られた人形のように大人おとなしくしているのは見た事がない。顔はふくれているが、こんな結構な男を捨てて赤シャツに靡なびくなんて、マドンナもよつぼど気の知れないおきやんだ。赤シャツが何ダース寄つたつて、これほど立派な旦那だんなさま様が出るもんか。

「あなたはどつか悪いんじゃないやありませんか。大分たい

ぎそうに見えますが……」「いえ、別段これという持病もないですが……」

「そりや結構です。からだが悪いと人間も駄目ですね」「あなたは大分じょうぶご丈夫じょうぶのようですね」

「ええ瘠やせても病気はしません。病気なんてものあ大嫌いですから」

うらなり君は、おれの言葉を聞いてにやにやと笑つた。

ところへ入口で若々しい女の笑声きこが聞えたから、何心なく振り返ふつてみるとえらい奴が来た。色の白い、

ハイカラ頭の、背の高い美人と、四十五六の奥さんが並んで切符を売る窓の前に立っている。おれは美人の形容などが出来る男でないから何にも云えないが全く美人に相違ない。何だか水晶の珠を香水で暖ためて、掌へ握つてみたような心持ちがした。年寄の方が背は低い。しかし顔はよく似ているから親子だろう。おれは、や、来たなと思う途端に、うらなり君の事は全然忘れて、若い女の方ばかり見ていた。すると、うらなり君が突然おれの隣から、立ち上がって、そろそろ女の方へ歩き出したんで、少し驚いた。マドンナじやな

いかと思つた。三人は切符所の前で軽く挨拶している。遠いから何を云つてるのか分らない。

停車場の時計を見るともう五分で発車だ。早く汽車がくればいいがなと、話し相手が居なくなつたので待ち遠しく思つていると、また一人あわてて場内へ馳^かけ込んで来たものがある。見れば赤シャツだ。何だかべらべら然たる着物へ縮緬^{ちりめん}の帯をだらしなく巻き付けて、例の通り金鎖^{きんぐさ}りをぶらつかしている。あの金鎖りはにせもの贋物である。赤シャツは誰^{だれ}も知るまいと思つて、見せびらかしているが、おれはちゃんと知つてる。赤シャ

ツは馳け込んだなり、何かきよろきよろきしていたが、
切符売下所の前に話している三人へ慇懃いんぎんにお辞儀じぎをし
て、何か二こと、三こと、云ったと思つたら、急にこつ
ちへ向いて、例のごとく猫足ねこあしにあるいて来て、や君も
湯ですか、僕は乗り後れやしないかと思つて心配して
急いで来たら、まだ三四分ある。あの時計はたしかか
しらんと、自分の金側きんがわを出して、二分ほどちがつてる
と云いながら、おれの傍そばへ腰を卸おろした。女の方はちつ
とも見返らないで杖つえの上に顎あごをのせて、正面ばかり眺なが
めている。年寄の婦人は時々赤シャツを見るが、若い

方は横を向いたままである。いよいよマドンナに違いない。

やがて、ピューと汽笛きてきが鳴つて、車がつく。待ち合せた連中はぞろぞろ吾れ勝がちに乗り込む。赤シャツはいの一号に上等へ飛び込んだ。上等へ乗つたつて威張れるどころではない、住田すみたまで上等が五銭で下等が三銭だから、わずか二銭違いで上下の区別がつく。こういうおれでさえ上等を奮発ふんぱつして白切符を握にぎつてるんでもわかる。もつとも田舎者はけちだから、たつた二銭の出入でもすこぶる苦になると見えて、大抵たいていは下等へ乗

る。赤シャツのあとからマドンナとマドンナのお袋が上等へはいり込んだ。うらなり君は活版で押おしたように下等ばかりへ乗る男だ。先生、下等の車室の入口へ立って、何だか躊躇ちゆうちゆうの体であつたが、おれの顔を見るや否や思いきつて、飛び込んでしまった。おれはこの時何となく気の毒でたまらなかつたから、うらなり君のあとから、すぐ同じ車室へ乗り込んだ。上等の切符で下等へ乗るに不都合はなからう。

温泉へ着いて、三階から、浴衣ゆかたのなりで湯壺ゆつばへ下りてみたら、またうらなり君に逢つた。おれは会議や何

かでいざと極まると、咽喉のどが塞ふさがつて饒舌しゃべれない男だが、平常ふだんは随分弁ずいぶんずる方だから、いろいろ湯壺のなかでうらなり君に話しかけてみた。何だか憐れぼくつてたまらない。こんな時に一口でも先方の心を慰なぐさめてやるのは、江戸えどっ子の義務だと思つてる。ところがあいにくうらなり君の方では、うまい具合にこつちの調子に乗つてくれない。何を云つても、えとかい、えとかぎりで、しかもそのえとい、えが大分面倒めんどうらしいので、しまいにはとうとう切り上げて、こつちからご免蒙めんこうむつた。湯の中では赤シャツに逢わなかつた。もつとも風呂ふろ

の数にはたくさんあるのだから、同じ汽車で着いても、同じ湯壺で逢うとは極まっていな。別段不思議にも思わなかつた。風呂を出てみるといい月だ。町内の両側に柳やなぎが植うつて、柳の枝えだが丸まるい影を往来の中へ落おれしている。少し散歩でもしよう。北へ登つて町のはずれへ出ると、左に大きな門があつて、門の突き当りがお寺で、左右が妓楼ぎろうである。山門のなかに遊廊ゆうかくがあるな。んで、前代未聞の現象だ。ちよつとはいつてみたいが、また狸から会議の時にやられるかも知れないから、やめて素通りにした。門の並びに黒い暖簾のれんをかけた、小

さな格子窓こうしまどの平屋はおれが団子だんじきを食つて、しくじつた

所だ。丸提灯まるぢようちんに汁粉しるこ、お雑煮ぞうじとかいたのがぶらさがつ

て、提灯の火が、軒端のきばに近い一本の柳の幹を照らして

いる。食いたいなと思つたが我慢して通り過ぎた。

食いたい団子の食えないのは情ない。しかし自分の

許嫁いいなすけが他人に心移したのは、なお情ないだろう。う

らなり君の事を思うと、団子は愚かおろ、三日ぐらい断食だんじき

しても不平はこぼせない訳だ。本当に人間ほどあてに

ならないものはない。あの顔を見ると、どうしたつて、

そんな不人情な事をしそうには思えないんだが——う

つくしい人が不人情で、冬瓜とうがんの水膨れみずぶくのような古賀さんが善良な君子なのだから、油断が出来ない。淡泊たんぼくだと思つた山嵐は生徒を煽動せんどうしたと云うし。生徒を煽動せんどうしたのかと思うと、生徒の処分を校長に逼せまるし。厭味いやみで練りかためたような赤シャツが存外親切で、おれに余所よそながら注意をしてくれるかと思うと、マドンナを胡魔化ごまかしたり、胡魔化ごまかしたのかと思うと、古賀の方が破談にならなければ結婚は望まないんだと云うし。いか銀が難癖なんくせをつけて、おれを追い出すかと思うと、すぐ野だ公が入れ替かわつたり——どう考えてもあてになら

ない。こんな事を清にかいてやったら定めて驚く事だろう。箱根ほこねの向うだから化物ぼけものが寄り合ってるんだと云うかも知れない。

おれは、性来しょうらい構わない性分だから、どんな事でも苦にしないで今日まで凌いで来たのだが、ここへ来てからまだ一ヶ月立つか、立たないうちに、急に世のなかを物騒ぶっそうに思い出した。別段際だった大事件にも出逢わないのに、もう五つ六つ年を取ったような気がする。早く切り上げて東京へ帰るのが一番よかろう。などとそれからそれへ考えて、いつか石橋を渡わたって野芹川のぜりがわの

堤へ出た。川と云うとえらそうだが実は一間ぐらいな、ちよろちよろした流れで、土手に沿うて十二丁ほど下ると相生村へ出る。村にはあおいむら観音様がある。

温泉の町を振り返ると、赤い灯が、月の光の中にかがやいている。太鼓たいこが鳴るのは遊廓に相違ない。川の流れは浅いけれども早いから、神経質の水のようにやたらに光る。ぶらぶら土手の上をあるきながら、約三丁も来たと思つたら、向うに人影ひとかげが見え出した。月に透すかしてみると影は二つある。温泉へ来て村へ帰る若い衆しゅかも知れない。それにしても唄うたもうたわない。存

だんだん歩いて行くと、おれの方が早足だと見えて、二つの影法師が、次第に大きくなる。一人は女らしい。おれの足音を聞きつけて、十間ぐらいの距離きよりに逼った時、男がたちまち振り向いた。月は後うしろからさしている。その時おれは男の様子を見て、はてなと思った。男と女はまた元の通りにあるき出した。おれは考えがあるから、急に全速力で追っ懸かけた。先方は何の気もつかずに最初の通り、ゆるゆる歩を移している。今は話し声も手に取るように聞える。土手の幅は六尺ぐらいだ

から、並んで行けば三人がようやくだ。おれは苦もな
く後ろから追い付いて、男の袖そでを擦すり抜ぬけざま、二足
前へ出した踵くびすをぐるりと返して男の顔を覗のぞき込こんだ。
月は正面からおれの五分刈がりの頭から顚あたの辺りまで、
会釈えしやくもなく照てらす。男はあつと小声に云ったが、急に横
を向いて、もう帰ろうと女を促うながすが早いか、温泉ゆの
町の方へ引き返した。

赤シャツは凶太くて胡魔化すつもりか、気が弱くて
名乗り損そくなつたのかしら。ところが狭くて困ってるの
は、おればかりではなかつた。

八

赤シャツに勧められて釣つりに行つた帰りから、山嵐やまあらしを疑ぐり出した。無い事を種くさねに下宿を出ると云われた時は、いよいよ不埒ふらちな奴やつだと思つた。ところが会議の席では案あんに相違そういして滔々とうとうと生徒げんぱつろん嚴罰論げんぱつろんを述べたから、おや変だひねと首を振つた。萩野はぎのの婆ばあさんから、山嵐やまあらしが、うらなり君のために赤シャツと談判をしたと聞いた時は、それは感心だと手を拍うつた。この様子ではわる者

は山嵐じやあるまい、赤シャツの方が曲つてるんで、
好いい加減かげんな邪推じやすいを突まことしやかに、しかも遠廻とおまわしに、おれの
頭の中へ浸しみ込こましたのではあるまいかと迷つてる矢
先へ、野芹川のぜりがわの土手で、マドンナを連れて散歩なんか
している姿を見たから、それ以来赤シャツは曲者くせものだと
極きめてしまった。曲者だか何だかよくは分わからないが、
ともかくも善いいい男じやない。表と裏とは違ちがつた男だ。
人間は竹のように真直まっすぐでなくつちや頼たのもしくくない。真
直なものは喧嘩けんかをしても心持こころちがいい。赤シャツのよ
うなやさしいのと、親切こころよくなのと、高尚こうしょうなのと、琥珀こはくの

パイプとを自慢じまんそうに見せびらかすのは油断が出来ない、めつたに喧嘩けんかも出来ないと思つた。喧嘩けんかをしても、回向院えこういんの相撲すもうのような心持ちのいい喧嘩は出来ないと思つた。そうなるで一銭五厘でいりひかえじよの出入で控所ひかえじよ全体を驚おどろかした議論の相手の山嵐の方がはるかに人間らしい。会議の時に金壺眼かなつぼまなこをぐりつかせて、おれを睨にらめた時は憎にくい奴だと思つたが、あとで考えると、それも赤シヤツのねちねちした猫撫声ねこなでごえよりはましだ。実はあの会議が済んだあとで、よつぽど仲直りをしようかと思つて、一こと二こと話しかけてみたが、野郎返事やろうもしないで、

まだ眼を剥つてみせたから、こつちも腹が立ってそのままにしておいた。

それ以来山嵐はおれと口を利かない。机の上へ返した一銭五厘はいまだに机の上に乗っている。ほこりだらけになって乗っている。おれは無論手が出せない、山嵐は決して持つて帰らない。この一銭五厘が二人の間の墻壁しょうへきになって、おれは話そうと思つても話せない、山嵐は頑がんとして黙だまってる。おれと山嵐には一銭五厘が祟たたつた。しまいには学校へ出て一銭五厘を見るのが苦になつた。

山嵐とおれが絶交の姿となつたに引き易^かえて、赤シャツとおれは依然^{いぜん}として在来の關係を保つて、交際をつづけている。野芹川で逢^あつた翌日などは、学校へ出ると第一番におれの傍^{そば}へ来て、君今度の下宿はいいですかのまたいつしよに露西亞^{ロシア}文学を釣^つりに行こうじゃないかのといろいろな事を話しかけた。おれは少々憎^{にく}らしかつたから、昨夜^{ゆうべ}は二返逢^あいましたねと云^いつたら、ええ停車場^{ていしやば}で——君はいつでもあの時分出^で掛^かけるのですか、遅いじゃないかと云う。野芹川の土手でもお目に懸^かりましたねと喰^くらわしてやったら、

いいえ僕ぼくはあつちへは行かない、湯にはいつて、すぐ帰つたと答えた。何もそんなに隠かくさないでもよかろう、現に逢つてるんだ。よく嘘うそをつく男だ。これで中学の教頭が勤まるなら、おれなんか大学総長がつとまる。おれはこの時からいよいよ赤シャツを信用しなくなつた。信用しない赤シャツとは口をきいて、感心してゐる山嵐とは話をしない。世の中は随分ずいぶん妙なものだ。

ある日の事赤シャツがちよつと君に話があるから、僕のうちまで来てくれと云うから、惜おしいと思つたが温泉行きを欠勤して四時頃ごろ出掛けて行つた。赤シャツ

は一人ものだが、教頭だけに下宿はとくの昔むかしに引き
 払はらって立派げんかんな玄関を構かまえている。家賃は九円五拾錢じっせんだ
 そうだ。田舎いなかへ来て九円五拾錢払えばこんな家へはい
 れるなら、おれも一つ奮発ふんぱつして、東京から清を呼び寄
 せて喜ばしてやろうと思つたくらいな玄関だ。頼むと
 云つたら、赤シャツの弟が取次とりつきに出て来た。この弟は
 学校で、おれに代数と算術を教わる至つて出来のわる
 い子だ。その癖くせ渡りわたりものだから、生れ付いての田舎者
 よりも人が悪わるい。

赤シャツに逢つて用事を聞いてみると、大将例の琥

珀のパイプで、きな臭い烟草くさをふかしながら、こんな事を云った。「君が来てくれてから、前任者の時代よりも成績せいせきがよくあがつて、校長も大いにいい人を得たと喜んでいるので——どうか学校でも信頼しんらいしているのだから、そのつもりで勉強していただきたい」

「へえ、そうですか、勉強つて今より勉強は出来ませんが——」

「今のくらいで充分じゅうぶんです。ただ先だつてお話しした事ですね、あれを忘れずにいて下さればいいのです」

「下宿の世話なんかするものあ剣呑けんのおんだという事ですか」

「そう露骨ろこつに云うと、意味もない事になるが——まあ

善いさ——精神は君にもよく通じている事と思うから。

そこで君が今のように出精しゅつせいして下されば、学校の方で

も、ちやんと見ているんだから、もう少しして都合つごうさ

えつければ、待遇たいぐうの事も多少はどうかなるだろうと思

うんですがね」

「へえ、俸給ほうきゅうですか。俸給なんかどうでもいいんです

が、上がれば上がった方がいいですね」

「それで幸い今度転任者が一人出来るから——もつと

も校長に相談してみないと無論受け合えない事だが

——その俸給から少しは融通ゆうずうが出来るかかも知れないから、それで都合をつけるように校長に話してみようと思ふんですがね」

「どうも難有ありがとう。だれが転任するんですか」

「もう発表になるから話しても差し支つかえないでしょう。実は古賀君です」

「古賀さんは、だつてこの人じゃありませんか」

「こここの地じの人ですが、少し都合があつて——半分は
当人の希望です」

「どこへ行くんです」

「日向の延岡で——土地が土地だから一級俸上あがつて行

く事になりました」

「誰だれか代りが来るんですか」

「代りも大抵たいてい極まってるんです。その代りの具合で君の待遇上の都合もつくんです」

「はあ、結構です。しかし無理に上がらないでも構いません」

「とも角も僕は校長に話すつもりです。それで校長も同意見らしいが、追っては君にもっと働いて頂いただかなくってはならんようになるかも知れないから、どうか

今からそのつもりで覚悟かくごをしてやってもらいたいですね」

「今より時間でも増すんですか」

「いいえ、時間は今より減るかも知れませんが——」

「時間が減って、もつと働くんですか、妙だな」

「ちよつと聞くと妙だが、——判然とは今言いにくいが——まあつまり、君にもつと重大な責任を持つてもらうかも知れないという意味なんです」

おれには一向分らない。今より重大な責任と云えば、数学の主任だろうが、主任は山嵐だから、やつこさん

なかなか辞職する気遣いきづかはない。それに、生徒の人望

めんしよく

があるから転任や免職は学校の得策であるまい。赤シャツの談話はいつでも要領を得ない。要領を得なくつても用事はこれで済んだ。それから少し雑談をしているうちに、うらなり君の送別会をやる事や、ついではおれが酒を飲むかと云う問や、うらなり先生は君子で愛すべき人だと云う事や——赤シャツはいろいろ弁じた。しまいに話をかえて君俳句をやりますかと来たから、こいつは大変だと思つて、俳句はやりません、さようならと、そこそこに帰つて来た。発句ほっくは芭蕉ばしやうか

髪結床かみいどこの親方のやるもんだ。数学の先生が朝顔やに釣瓶つるべをとられてたまるものか。

帰つてうんと考え込んだ。世間には随分気の知れない男が居る。家屋敷はもちろん、勤める学校に不足のない故郷がいやになつたからと云つて、知らぬ他国へ苦勞を求めに出る。それも花の都の電車が通つてかよる所なら、まだしもだが、日向の延岡とは何の事だ。おれは船つきのいいここへ来てさえ、一ヶ月立たないうちにもう帰りたくなつた。延岡と云えば山の中も山の中も大変な山の中だ。赤シャツの云うところによると船

から上がって、一日馬車へ乗って、宮崎へ行つて、宮崎からまた一日車いちんちへ乗らなくつては着けないそうだ。名前を聞いてさえ、開けた所とは思えない。猿ざると人が半々に住んでるような気がする。いかに聖人のうらなり君だつて、好んで猿の相手になりたくもないだろうに、何という物数奇ものずきだ。

ところへあいかわらず婆ばあさんが夕食ゆうめしを運んで出る。

今日もまた芋いもですかいと聞いてみたら、いえ今日はお豆腐とうふぞなもと云つた。どつちにしたつて似たものだ。

「お婆さん古賀さんは日向へ行くそうですね」

「ほん当にお気の毒じやな、もし」

「お気の毒だつて、好んで行くんなら仕方がないですね」

「好んで行くて、誰がぞなもし」

「誰がぞなもしつて、当人がさ。古賀先生が物数奇に行くんじゃありませんか」

「そりやあなた、大違いの勘五郎かんごろうぞなもし」

「勘五郎かね。だつて今赤シャツがそう云いましたぜ。

それが勘五郎なら赤シャツは嘘つきの法螺ほらえもん右衛門だ」

「教頭さんが、そうお云いするのはもつともじゃが、古賀

さんのお往いきともないのももつともぞなもし」

「そんなら両方もつともなんですね。お婆さんは公平でいい。一体どういう訳なんですすい」

「今朝古賀のお母さんが見えて、だんだん訳をお話したたがなもし」

「どんな訳をお話したんです」

「あそこもお父さんがお亡くなりてから、あたし達が思うほど暮くらし向むきが豊かになうてお困りじゃけれ、お母さんが校長さんにお頼みて、もう四年も勤めているものじゃけれ、どうぞ毎月頂くものを、今少しふやして

おくれんかてて、あなた」

「なるほど」

「校長さんが、ようまあ考えてみとこうとお云いたげな。それでお母さんも安心して、今に増給のご沙汰さたがあるぞ、今月か来月かと首を長くして待つておいでたところへ、校長さんがちよつと来てくれと古賀さんにお云いるけれ、行つてみると、氣の毒だが学校は金が足りんけれ、月給を上げる訳にゆかん。しかし延岡になら空いた口があつて、そつちなら毎月五円余分にとれるから、お望み通りでよかろうと思つて、その手続

きにしたから行くがええと云われたげな。――」

「じゃ相談じゃない、命令じゃありませんか」

「さよよ。古賀さんはよそへ行つて月給が増すより、元のままでもええから、ここに居おりたい。屋敷もあるし、母もあるからとお頼みたけれども、もうそう極めたあとで、古賀さんの代りは出来ているけれ仕方がないと校長がお云いたげな」

「へん人を馬鹿ばかにしてら、面白おもしろくもない。じゃ古賀さんは行く気はないんですね。どうれで変だと思つた。五円ぐらい上がったって、あんな山の中へ猿のお相手

をしに行く唐変木はまずないからね」
とうへんぼく

「唐変木で、先生なんぞなもし」

「何でもいいでさあ、——全く赤シャツの作略だね。よ
さりやく

くない仕打だ。しうち まるで欺撃だましうちです。それでおれの月給

を上げるなんて、不都合ふつごうな事があるものか。上げてや
 るったって、誰が上がってやるものか」

「先生は月給がお上りるのかなもし」

「上げてやるって云うから、断ことわろうと思うんです」

「何で、お断ことわりるのぞなもし」

「何でもお断ことわりだ。お婆さん、あの赤シャツは馬鹿

ひきょう
「卑怯でさあ」

「卑怯でもあんた、月給を上げておくれたら、大人おとなしく
頂いておく方が得ぞなもし。若いうちはよく腹の立つ
ものじゃが、年をとつてから考えると、も少しの我慢がまん
じゃあつたのに惜しい事をした。腹立てたためにこな
いな損をしたと悔くやむのが当り前じゃけれ、お婆の言う
事をきいて、赤シャツさんが月給をあげてやろとお言
いたら、難有ありがとうと受けておおきなさいや」
としより
「年寄の癖に余計な世話を焼かなくつてもいい。おれ
の月給は上がろうと下がろうとおれの月給だ」

婆さんはだまつて引き込んだ。爺さんは呑気な声を出して謡をうたつてゐる。謡うたいというものは読んでわかる所を、やにむずかしい節をつけて、わざと分らなくする術だろう。あんな者を毎晩飽あききずに唸うなる爺さんの気が知れない。おれは謡どころの騒さわぎじゃない。月給を上げてやろうと云うから、別段欲しくもなかったが、入らない金を余しておくのももつたいたいと思つて、よろしいと承知したのだが、転任したくないものを無理に転任させてその男の月給の上前を跳はねるなんて不人情な事が出来るものか。当人がもとの通りでいいと

云うのに延岡くんだ下りまで落ちさせるとは一体どう云う

りようけん

了見だろう。

ださいごんのそつ

太宰権帥でさえ博多はかた近辺で落ちついたも

のだ。河合又五郎かあいまたごろうだつて相良さがらでとまつてるじゃないか。

とにかく赤シャツの所へ行つて断わつて来なくつちあ
気が済まない。

こくら

はかま

小倉の袴をつけてまた出掛けた。大きな玄関へ突つ

立つて頼むと云うと、また例の弟が取次に出て来た。

おれの顔を見てまた来たかという眼付めつきをした。用があ

れば二度だつて三度だつて来る。よる夜なかだつて叩たた

おこ

き起さないととは限らない。教頭の所へご機嫌きげんうかが伺いにく

るようなおれと見損みそくなつてるか。これでも月給が入らないから返しきたに来んだ。すると弟が今来客中だと云うから、玄関でいいからちよつとお目にかかりたいと云つたら奥おくへ引き込んだ。足元を見ると、畳たたみ付きの薄っぺらな、のめりの駒下駄こまげたがある。奥でもう万歳ばんざいですよと云う声が聞きこえる。お客とは野だだなと気がついた。野だでなくては、あんな黄色い声を出して、こんな芸人じみた下駄はを穿はくものはない。

しばらくすると、赤シャツがランプを持って玄関まで出て来て、まあ上がりたまえ、外の人じゃない吉川

君だ、と云うから、いえここでたくさんです。ちよつと話せばいいんです、と云つて、赤シャツの顔を見ると金時のようだ。野だ公と一杯飲いっぱいんでると見える。

「さつき僕の月給を上げてやるというお話でしたが、少し考えが變つたから断わりに来たんです」

赤シャツはランプを前へ出して、奥の方からおれの顔を眺ながめたが、とつさの場合返事をしかねて茫然ぼうぜんとしてゐる。増給を断わる奴が世の中にたった一人飛び出して来たのを不審ふしんに思ったのか、断わるにしても、今帰つたばかりで、すぐ出直してこなくつてもよさそう

なものだど、呆れ返あきつたのか、または双方合併そうほうがつっぺいしたのか、妙な口をして突っ立つたままである。

「あの時承知したのは、古賀君が自分の希望で転任するという話でしたからで……」

「古賀君は全く自分の希望で半ば転任するんです」

「そうじゃないんです、ここに居たいんです。元の月給でもいいから、郷里に居たいのです」

「君は古賀君から、そう聞いたのですか」

「そりや当人から、聞いたんじゃないやありません」

「じゃ誰からお聞きです」

「僕の下宿の婆さんが、古賀さんのおつ母さんかから聞いたのを今日僕に話したのです」

「じゃ、下宿の婆さんがそう云ったのですね」

「まあそうです」

「それは失礼ながら少し違うでしょう。あなたのおつしやる通りだと、下宿屋の婆さんの云う事は信ずるが、教頭の云う事は信じないと云うように聞えるが、そういう意味に解釈して差支さしつかえないでしょうか」

おれはちよつと困った。文学士なんてものはやつぱりえらいものだ。妙な所へこだわつて、ねちねち押おし

寄せてくる。おれはよく親父おやじから貴様はそそっかしくて駄目だめだ駄目だと云われたが、なるほど少々そそっかしいようだ。婆さんの話を聞いてはつと思つて飛び出して来たが、実はうらなり君にもうらなりのおつ母さんにも逢つて詳しい事情くわは聞いてみなかつたのだ。だからこう文学士流に斬り付けきられると、ちよつと受け留めにくい。

正面からは受け留めにくいだが、おれはもう赤シャツに対して不信任を心うちの中で申し渡してしまつた。下宿の婆さんもけちん坊ぼうの欲張り屋に相違ないが、嘘は吐つ

かない女だ、赤シャツのように裏表はない。おれは仕方がないから、こう答えた。

「あなたの云う事は本当かも知れないですが——とにかく増給はご免蒙めんこうむります」

「それはますます可笑おかしい。今君がわざわざお出いでになつたのは増俸を受けるには忍しのびない、理由を見出したからのように聞えたが、その理由が僕の説明で取り去られたにもかかわらず増俸を否まれるのは少し解しかねるようですね」

「解しかねるかも知れませんがね。とにかく断わりま

すよ」

「そんなに否いやなら強いてとまでは云いませんが、そう二三時間のうちに、特別の理由もないのに豹ひょう変うへんしちゃ、将来君の信用にかかわる」

「かかわつても構わないです」

「そんな事はないはずです、人間に信用ほど大切なものはありませんよ。よしんば今一步ゆず譲つて、下宿の主人が……」

「主人じゃない、婆さんです」

「どちらでもよろしい。下宿の婆さんが君に話した事

を事実としたところで、君の増給は古賀君の所得を削けずつて得たものではないでしょう。古賀君は延岡へ行かれる。その代りがくる。その代りが古賀君よりも多少低給で来てくれる。その剰余じょうよを君に廻まわすと云うのだから、君は誰にも気の毒がる必要はないはずです。古賀君は延岡でただ今よりも栄進される。新任者は最初からの約束やくそくで安くくる。それで君が上がられれば、これほど都合つしうのいい事はないと思うですがね。いやなら否いやでもいいが、もう一返うちでよく考えてみませんか」

おれの頭はあまりえらくないのだから、いつもなら、
相手がこういう巧妙な弁舌を揮えば、おやそうかな、
それじゃ、おれが間違つてたと恐れ入つて引きさがる
のだけれども、今夜はそうは行かない。ここへ来た最
初から赤シャツは何だか虫が好かなかつた。途中で親
切な女みたような男だと思ひ返した事はあるが、それ
が親切でも何でもなさそうなので、反動の結果今じゃ
よつぽど厭いやになつてゐる。だから先がどれほどうまく
論理的に弁論を逞たくましくしようとも、堂々たる教頭流にお
れを遣り込めようとも、そんな事は構わない。議論の

いい人が善人とはきまらない。遣り込められる方が悪人とは限らない。表向きは赤シャツの方が重々もつともだが、表向きがいくら立派だつて、腹の中まで惚れさせる訳には行かない。金や威力いりよくや理屈りくつで人間の心が買える者なら、高利貸でも巡査じゆんさでも大学教授でも一番人に好かれなくてはならない。中学の教頭ぐらいな論法でおれの心がどう動くものか。人間は好き嫌いで働くものだ。論法で働くものじゃない。

「あなたの云う事はもつともですが、僕は増給がいやになつたんですから、まあ断わります。考えたつて同

じ事です。さようなら」と云いすてて門を出た。頭の上には天の川が一筋かかっている。

九

うらなり君の送別会のあるという日の朝、学校へ出たら、山嵐やまあらしが突然とつぜん、君先だつてはいか銀が来て、君が乱暴して困るから、どうか出るように話してくれと頼たのんだから、真面目まじめに受けて、君に出てやれと話したのだが、あとから聞いてみると、あいつは悪わるい奴やつで、よく偽筆ぎひつへ贋落款にせらつかんなどを押おして売りつけるそうだから、全く君の事も出鱈目でたらめに違ちがいない。君に懸物かけものや骨董こつとうを売

りつけて、商売にしようと思つてたところが、君が取り合わないで儲けもうがないものだから、あんな作りごとをこしらえて胡魔化ごまかしたのだ。僕はあの人物を知らなかつたので君に大變失敬した勘弁かんべんしたまえと長々しい謝罪をした。

おれは何とも云わずに、山嵐の机の上にあつた、一錢五厘りんをとつて、おれの蝦蟇口がまぐちのなかへ入れた。山嵐は君それを引き込こめめるのかと不審ふしんそうに聞くから、うんおれは君に奢おごられるのが、いやだったから、是非返すつもりでいたが、その後だんだん考えてみると、

やつぱり奢ってもらおう方がいいようだから、引き込ますんだと説明した。山嵐は大きな声をしてアハハハと笑いながら、そんなら、なぜ早く取らなかつたのだと聞いた。実は取ろう取ろうと思つてたが、何だか妙みょうだからそのままにしておいた。近来は学校へ来て一錢五厘を見るのが苦になるくらいいやだつたと云つたら、君はよつぽど負け惜おしみの強い男だと云うから、君はよつぽど剛情張せいじょうりだと答えてやつた。それから二人の間にこんな問答が起おこつた。

「君は一体どこの産だ」

「おれは江戸えどっ子だ」

「うん、江戸っ子か、道理で負け惜しみが強いと思つた」

「きみはどこだ」

「僕は会津あいづだ」

「会津っ婆か、強情な訳だ。今日の送別会へ行くのかい」

「行くとも、君は？」

「おれは無論行くんだ。古賀さんが立つ時は、浜はままで見送りに行こうと思つてるくらいだ」

「送別会は面白いぜ、出て見たまえ。今日は大いに飲むつもりだ」

「勝手に飲むがいい。おれは肴さかなを食つたら、すぐ帰る。酒なんか飲む奴は馬鹿ばかだ」

「君はすぐ喧嘩けんかを吹き懸かける男だ。なるほど江戸っ子の軽跳けいちような風を、よく、あらわしてる」

「何でもいい、送別会へ行く前にちよつとおれのうちへお寄り、話はなしがあるから」

山嵐やくそくは約束通りおれの下宿へ寄つた。おれはこの間

から、うらなり君の顔を見る度に気の毒でたまらな
かったが、いよいよ送別の今日となつたら、何だか憐あわ
れつぽくつて、出来る事なら、おれが代りに行つてや
りたい様な気がしだした。それで送別会の席上で、大
いに演説でもしてその行を盛さかんにしてやりたいと思うの
だが、おれのべらんめえ調子じゃ、到底物とうていにならない
から、大きな声を出す山嵐を雇やとつて、一番赤シャツの
荒肝あらぎもを挫ひしいでやろうと考え付いたから、わざわざ山嵐
を呼んだのである。

おれはまず冒頭ぼうとうとしてマドンナ事件から説き出した

が、山嵐は無論マドンナ事件はおれより詳しく知つて
いる。おれが野芹川のせりがわの土手の話をして、あれは
馬鹿野郎ぼかやろうだと云つたら、山嵐は君はだれを捕まえても
馬鹿呼わりよぼをする。今日学校で自分の事を馬鹿と云つ
たじゃないか。自分が馬鹿なら、赤シャツは馬鹿じゃ
ない。自分は赤シャツの同類じゃないと主張した。そ
れじゃ赤シャツは腑抜けふぬの呆助ほうすけだと云つたら、そうか
もしれないと山嵐は大いに賛成した。山嵐は強い事は
強いが、こんな言葉になると、おれより遙ほるかに字を
知っていない。会津つぽなんてものはみんな、こんな、

ものなんだろう。

それから増給事件と将来重く登用すると赤シャツが云つた話をしたら山嵐はふふんと鼻から声を出して、それじゃ僕を免職めんしよくする考えだなと云つた。免職するつもりだつて、君は免職になる気かと聞いたら、誰だれがなるものか、自分が免職になるなら、赤シャツもいつしよに免職させてやると大いに威張いばつた。どうしていつしよに免職させる気かと押し返して尋ねたら、そこははまだ考えていないと答えた。山嵐は強そうだが、智慧ちえはあまりなさそうだ。おれが増給を断ことわつたと話

したら、大将大きに喜んでさすが江戸っ子だ、えらいと賞^ほめてくれた。

うらなりが、そんなに厭^{いや}がつているなら、なぜ留任の運動をしてやらなかつたと聞いてみたら、うらなりから話を聞いた時は、既^{すで}にきまつてしまつて、校長へ二度、赤シャツへ一度行つて談判してみたが、どうする事も出来なかつたと話した。それについても古賀があまり好人物過ぎるから困る。赤シャツから話があつた時、断然断わるか、一応考えてみますと逃^にげればいいのに、あの弁舌に胡魔化されて、即席^{そくせき}に許諾^{きよだく}したも

のだから、あとからお母つかさんが泣きついてても、自分が談判に行つても役に立たなかつたと非常に残念がった。

今度の事件は全く赤シャツが、うらなりを遠ざけて、マドンナを手に入れる策略なんだろうとおれが云つたら、無論そうに違いない。あいつは大人おとなしい顔をして、悪事を働いて、人が何か云うと、ちやんと逃道にげみちを拵こしらえて待つてるんだから、よつほど奸物かんぶつだ。あんな奴にかかつては鉄拳制裁てつけんせいさいでなくつちや利かないと、瘤こぶだらけの腕うでをまくつてみせた。おれはついでだから、君の腕は強そうだな柔術じゆうじゆつでもやるかと聞いてみた。すると大

将二の腕へ力瘤を入れて、ちよつと攫つかんでみろと云うから、指の先で揉もんでみたら、何の事はない湯屋にある軽石の様なものだ。

おれはあまり感心したから、君そのくらの腕なら、赤シャツの五人や六人は一度に張り飛ばされるだろうと聞いたら、無論さと云いながら、曲げた腕を伸のばしたり、縮ましたりすると、力瘤がぐるりぐるりと皮のなかで廻かいてん転する。すこぶる愉快ゆかいだ。山嵐の証明する所によると、かんじん縋よりを二本より合せて、この力瘤の出る所へ巻きつけて、うんと腕を曲げると、ぷつり

と切れるそうだ。かんじんよりなら、おれにも出来そうだと云つたら、出来るものか、出来るならやってみろと来た。切れないと外聞がわるいから、おれは見合せた。

君どうだ、今夜の送別会に大いに飲んだあと、赤シャツと野だを撲なぐつてやらないかと面白半分に勧めてみたら、山嵐はそうだなと考えていたが、今夜はまあよそうと云つた。なぜと聞くと、今夜は古賀に気の毒だから——それにどうせ撲るくらいなら、あいつらの悪るい所を見届けて現場で撲らなくつちや、こつちの

落度になるからと、分別のありそうな事を附加つけたした。

山嵐でもおれよりは考えがあると見える。

じゃ演説をして古賀君を大いにほめてやれ、おれがすると江戸っ子のぺらぺらになつて重みがなくていけない。そうして、きまつた所へ出ると、急に溜飲りゆういんが起つて咽喉のどの所へ、大きな丸たまが上がつて来て言葉が出ないから、君に譲ゆずるからと云つたら、妙な病気だな、じゃ君は人中じゃ口は利けないんだね、困るだろう、と聞くから、何そんなに困りやしないと答えておいた。そうこうするうち時間が来たから、山嵐と一所に会

場へ行く。会場は花晨亭かしんていと行って、当地ここで第一等の料理屋だそうだが、おれは一度も足を入れた事がない。もとの家老とかの屋敷やしきを買い入れて、そのまま開業したという話だが、なるほど見懸みかけからして厳めいかしい構えだ。家老の屋敷が料理屋になるのは、陣羽織じんぼおりを縫ぬい直して、胴着どうぎにする様なものだ。

二人が着いた頃ころには、人数にんずももう大概揃たいがいそろつて、五十畳じゅうじょうの広間ひろまに二つ三つ人間の塊かたまりが出来ている。五十畳じゅうじょうだけに床とこは素敵すてきに大きい。おれが山城屋せんりょうで占領せんりょうした十五畳敷じゅうごじょうの床とは比較ひかくにならない。尺を取つてみたら二

間あつた。右の方に、赤い模様のある瀬戸物の瓶を据えて、その中に松の大きな枝が挿してある。松の枝を挿して何にする気か知らないが、何ヶ月立つても散る気遣いがないから、銭が懸らなくつて、よかろう。あの瀬戸物はどこで出来るんだと博物の教師に聞いたら、あれは瀬戸物じゃありません、伊万里ですと云つた。伊万里だつて瀬戸物じゃないかと、云つたら、博物はえへへへと笑つていた。あとで聞いてみたら、瀬戸で出来る焼物だから、瀬戸と云うのだそうだ。おれは江戸っ子だから、陶器の事を瀬戸物というのかと思つ

ていた。床の真中に大きな懸物があつて、おれの顔く
らいな大ききな字が二十八字かいてある。どうも下手
なものだ。あんまり不味いから、漢学の先生に、なぜ
あんなまずいものを麗々と懸けておくんですと尋ねた
ところ、先生はあれは海屋といつて有名な書家のかい
た者だと教えてくれた。海屋だか何だか、おれは今だ
に下手だと思つている。

やがて書記の川村がどうかお着席をと云うから、柱
があつて寄りかかるのに都合のいい所へ坐つた。海屋
の懸物の前に狸が羽織、袴で着席すると、左に赤シヤ

ツが同じく羽織袴で陣取じんどつた。右の方は主人公だとい
うのでうらなり先生、これも日本服で控ひかえている。お
れは洋服だから、かしこまるのが窮屈きゆうくつだったから、す
ぐ胡坐あぐらをかいた。隣となりの体操教師たいそうは黒ずぼんで、ちや
んとかしこまっている。体操の教師だけにいやに修行
が積んでいる。やがてお膳ぜんが出る。徳利とくりが並ならぶ。幹事
が立って、一言開会いちげんの辞を述べる。それから狸が立つ。
赤シャツが起たつ。ことごとく送別の辞を述べたが、三
人共申し合せたようにうらなり君の、良教師で好人物
な事を吹聴ふいちようして、今回去られるのはまことに残念であ

る、学校としてのみならず、個人として大いに惜しむところであるが、ご一身上のご都合で、切に転任をご希望になったのだから致し方がないという意味を述べた。こんな嘘をついて送別会を開いて、それでちつとも恥かしいとも思っていない。ことに赤シャツに至つて三人のうちで一番うらなり君をほめた。この良友を失うのは実に自分にとって大なる不幸であるともまで云つた。しかもそのいい方がいかにも、もつともらしくつて、例のやさしい声を一層やさしくして、述べ立てるのだから、始めて聞いたものは、誰でもきつとだ

まさされるに極きまつてる。マドンナも大方この手で引掛ひっかけたんだらう。赤シャツが送別の辞を述べ立てている最中、向側むかいがわに坐っていた山嵐がおれの顔を見てちよつと稲光いなびかりをさした。おれは返電として、人指し指でべつかんこうをして見せた。

赤シャツが座に復するのを待ちかねて、山嵐がぬつと立ち上がったから、おれは嬉うれしかったので、思わず手をぱちぱちと拍うつた。すると狸を始め一同がことごとくおれの方を見たには少々困った。山嵐は何を云うかと思うとただ今校長始めことに教頭は古賀君の転任

を非常に残念がられたが、私は少々反対で古賀君が
いちじつ 一日も早く当地を去られるのを希望しております。延
岡は僻遠へきえんの地で、当地に比べたら物質上の不便はある
だろう。が、聞くところによれば風俗のすこぶる淳朴じゅんぼく
な所で、職員生徒ことごとく上代樸直じょうだいぼくちよくの気風を帯びて
いるそうである。心にもないお世辞を振り蒔まいたり、
美しい顔をして君子を陥おとしれたりするハイカラ野郎は一
人もないと信ずるからして、君のごとき温良篤厚とっこうの士
は必ずその地方一般の歓迎かんげいを受けられるに相違そういない。
吾輩わがはいは大いに古賀君のためにこの転任を祝するのであ

る。終りに臨んで君が延岡に赴任ふにんされたら、その地の

しゅくじよ

淑女にして、君子の好逑こうきゆうとなるべき資格あるものを択えら

いちじつ

んで一日も早く円満なる家庭をかたち作つて、かの不

てんぼ

貞無節なるお転婆を事実の上において慚死ざんしせしめん事

せきばら

を希望します。えへんえへんと二つばかり大きな咳せきばら払

たた

いをして席に着いた。おれは今度も手を叩たたこうと思つ

かお

たが、またみんながおれの面かおを見るといやだから、や

めにしておいた。山嵐やまの嵐が坐ると今度はうらなり先生が

起つた。先生はご鄭寧ていねいに、自席じせきから、座敷ざしきの端はしの末座

まで行つて、慇懃いんぎんに一同いどうに挨拶あいさつをした上、今般こんぱんは一身

まで行つて、慇懃いんぎんに一同いどうに挨拶あいさつをした上、今般こんぱんは一身

まで行つて、慇懃いんぎんに一同いどうに挨拶あいさつをした上、今般こんぱんは一身

まで行つて、慇懃いんぎんに一同いどうに挨拶あいさつをした上、今般こんぱんは一身

まで行つて、慇懃いんぎんに一同いどうに挨拶あいさつをした上、今般こんぱんは一身

まで行つて、慇懃いんぎんに一同いどうに挨拶あいさつをした上、今般こんぱんは一身

上の都合で九州へ参る事になりましたについて、諸先生方が小生のためにこの盛大なる送別会をお開き下さつたのは、まことに感銘の至りに堪えぬ次第で——
ことにただ今は校長、教頭その他諸君の送別の辞を頂戴して、大いに難有く服膺する訳であります。私はこれから遠方へ参りますが、なにとぞ従前の通りお見捨てなくご愛顧のほどを願います。とへえつく張つて席に戻つた。うらなり君はどこまで人が好いんだか、ほとんど底が知れない。自分がこんなに馬鹿にされている校長や、教頭に恭しくお礼を云っている。それも

義理一遍いっぺんの挨拶ならだが、あの様子や、あの言葉つき

や、あの顔つきから云うと、心しんから感謝しているらしい。こんな聖人に真面目にお礼を云われたら、気の毒になつて、赤面しそうなものだが狸も赤シャツも真面目に謹聴きんちようしているばかりだ。

挨拶が済んだら、あちらでもチュー、こちらでも

チュー、という音がする。おれも真似をして汁しるを飲ん

でみたがまずいもんだ。口取くちとりに蒲鉾かまぼこはついてるが、ど

す黒くて竹輪たけのこの出来損ないである。刺身さしみも並んでるが、

厚くつて鮪まぐろの切り身を生で食うと同じ事だ。それでも

隣り近所の連中はむしやむしや旨そうに食っている。

大方江戸前の料理を食った事がないんだらう。

そのうち爛徳利が頻繁に往来し始めたら、四方が急

に賑やかになった。野だ公は恭しく校長の前へ出て盃

を頂いてる。いやな奴だ。うらなり君は順々に献酬を

して、一巡周るつもりとみえる。はなはだご苦勞であ

る。うらなり君がおれの前へ来て、一つ頂戴致しま

しようとか袴のひだを正して申し込まれたから、おれも

窮屈にズボンのままかまこまつて、一盃差し上げた。

せつかく参つて、すぐお別れになるのは残念ですな。

ご出立しゅつたつはいつです、是非浜までお見送りをしましょうと云つたら、うらなり君はいえご用多おほのところ決してそれには及びおよませんと答えた。うらなり君が何と云つたつて、おれは学校を休んで送る氣でいる。

それから一時間ほどするうちに席上は大分乱れて来る。まあ一杯ばい、おや僕が飲めと云うのに……などと呂律ろれつの巡りまわかねるのも一人二人出来て来た。少々退屈たいくつしたから便所へ行つて、昔風な庭を星明りにすかして眺めながていると山嵐が来た。どうださっきの演説はうまかつたろう。と大分得意である。大賛成だが一ヶ所氣

に入らないと抗議こうぎを申し込んだら、どこが不賛成だと聞いた。

「美しい顔をして人を陥れるようなハイカラ野郎は延岡おに居おらないから……と君は云ったろう」

「うん」

「ハイカラ野郎だけでは不足だよ」

「じゃ何と云うんだ」

「ハイカラ野郎の、ペテン師の、イカサマ師の、猫被ねこつかぶりの、香具や師しの、モモンガーの、岡っ引きの、わんわん鳴

けば犬も同然な奴とでも云うがいい」

「おれには、そう舌は廻らない。君は能弁だ。第一単語を大變たくさん知ってる。それで演舌えんぜつが出来ないのは不思議だ」

「なにこれは喧嘩けんかのときに使おうと思つて、用心のためを取つておく言葉さ。演舌となつちや、こうは出ない」

「そうかな、しかしぺらぺら出るぜ。もう一遍やつて見たまえ」

「何遍でもやるさいいか。——ハイカラ野郎のペテン師

の、イカサマ師の……」と云いかけていると、椽側えんがわをどたばた云わして、二人ばかり、よろよろしながら馳かけ出して来た。

「両君そりやひどい、——逃げるなんて、——僕が居るうちは決して逃にがさない、さあのみたまえ。——いかさま師？——面白い、いかさま面白い。——さあ飲みたまえ」

とおれと山嵐をぐいぐい引つ張つて行く。実はこの両人共便所に来たのだが、酔よってるもんだから、便所へはいるのを忘れて、おれ等を引つ張るのだらう。酔つ

払いは目の中あたの中る所へ用事を拵えて、前の事はすぐ忘れてしまふんだらう。

「さあ、諸君、いかさま師を引つ張つて来た。さあ飲ましてくれたまえ。いかさま師をうんと云うほど、酔わしてくれたまえ。君逃げちやいかん」

と逃げもせぬ、おれを壁際かべぎわへお押し付けた。諸方を見廻してみると、膳の上に満足な肴の乗っているのは一つもない。自分の分を奇麗きれいに食つくい尽して、五六間先へ遠征えんせいに出た奴もいる。校長はいつ帰ったか姿が見えない。

ところへお座敷はこちら？　と芸者が三四人はいつて来た。おれも少し驚ろいたが、壁際へ押し付けられているんだから、じつとしてただ見ていた。すると今まで床柱へもたれて例の琥珀のパイプを自慢そうに啣くわえていた、赤シャツが急に起つて、座敷を出にかかった。向うからはいつて来た芸者の一人が、行き違いながら、笑つて挨拶をした。その一人は一番若くて一番奇麗な奴だ。遠くで聞えなかつたが、おや今晚はぐらい云つたらしい。赤シャツは知らん顔をして出て行つたぎり、顔を出さなかつた。大方校長のあとを追懸け

て帰つたんだらう。

芸者が来たら座敷中急に陽気になつて、一同が鬨ときの声を揚あげて歓迎かんげいしたのかと思おもうくらい、騒そうぞう々しい。そうしてある奴はなんこを攫つかむ。その声の大きな事、まるで居合拔いあいぬきの稽古けいこのようだ。こつちでは拳けんを打つてる。よつ、はつ、と夢中むちゆうで両手を振るところは、ダーク一座あやつりにんぎようの操人形あやつりにんぎようよりよつほど上手じょうずだ。向うの隅すみではおいお酌しやくだ、と徳利を振つてみて、酒だ酒だと言い直ちしている。どうもやかましくて騒々しくつてたまらない。そのうちで手持無沙汰てもちぶさたに下を向むいて考え込んでるのは

うらなり君ばかりである。自分のために送別会を開いてくれたのは、自分の転任を惜んでくれるんじゃない。みんなが酒を呑んで遊ぶためだ。自分独りが手持無沙汰で苦しむためだ。こんな送別会なら、開いてもらわない方がよっぽどましだ。

しばらくしたら、めいめい胴間声どうまごえを出して何か唄うたい始めた。おれの前へ来た一人の芸者が、あんた、なんぞ、唄いなはれ、と三味線を抱かかえたから、おれは唄わない、貴様唄ってみろと云ったら、金かねや太鼓たいこでねえ、迷子の迷子の三太郎と、どんどこ、どんのちゃんちき

りん。叩いて廻つて逢あわれるものならば、わたしなんぞも、金や太鼓でどんどこ、どんのちゃんちきりんと叩いて廻つて逢あいたい人がある、と二た息にうたつて、おおしんどと云つた。おおしんどなら、もつと楽なものをやればいいのに。

すると、いつの間にか傍そばへ来て坐つた、野だが、鈴ちゃん逢あいたい人に逢つたと思つたら、すぐお帰りで、お気の毒さまみたようでげすと相変らず嘸はなし家みたような言葉使いをする。知りまへんと芸者はつんと済ました。野だは頓とん着じゃくなく、たまたま逢あいは逢あいながら

……と、いやな声を出して義太夫ぎだゆうの真似まねをやる。おきな
なはれやと芸者は平手で野だの膝ひざを叩いたら野だは
恐悦きようえつして笑つてる。この芸者は赤シャツに挨拶をした
奴だ。芸者に叩かれて笑うなんて、野だもおめでたい
者だ。鈴ちゃん僕が紀伊きいの国を踴おどるから、一つ弾ひいて
頂戴と云い出した。野だはこの上まだ踴る氣でいる。
向うの方で漢学のお爺じいさんが齒でんべいのない口を歪ゆがめて、
そりや聞えません伝兵衛でんべいさん、お前とわたしのその中
は……とまでは無事に済すましたが、それから？ と芸者
に聞いている。爺さんなんて物覚えのわるいものだ。

一人が博物を捕まえて近頃こないなのが、でけましたつらぜ、弾いてみまほうか。よう聞いて、いなはれや——
花月巻かげつまき、白いリボンのハイカラ頭、乗るは自転車、弾くはヴァイオリン、半可はんかの英語でぺらぺらと、I am glad to see youと唄うと、博物はなるほど面白い、英語入りだねと感心している。

山嵐は馬鹿に大きな声を出して、芸者、芸者と呼んで、おれが剣舞けんぶをやるから、三味線を弾けと号令を下した。芸者はあまり乱暴な声なので、あつけに取られて返事もしない。山嵐は委細構わず、ステッキを持つ

て来て、踏破^{ふみやぶる}千山万岳^{せんざんばんがくのけむり}烟と真中^{まんなか}へ出て独りで隠^{かく}し芸を演じている。ところへ野だがすでに紀伊^{きい}の国を済まして、かつぽれを済まして、棚^{たな}の達磨^{だるま}さんを済まして、まるはだか^{えつちゆうふんどし}丸裸の越中^{えつちゆうふんどし}禪一つになつて、棕櫚^{しゆろぼうき}箒を小脇に抱^かい込んで、日清談判破裂^{はれつ}して……と座敷中練りあるき出した。まるで気違^{きちが}いだ。

おれはさつきから苦しそうに袴も脱^ぬがず控えているうらなり君が気の毒でたまらなかつたが、なんぼ自分の送別会^{はだかおどり}だつて、越中禪の裸躑^{はだかおどり}まで羽織袴^{がまん}で我慢^{がまん}してみている必要はあるまいと思つたから、そばへ行つて、

古賀さんもう帰りましようかと退去を勧めてみた。するとうらなり君は今日は私の送別会だから、私が先へ帰つては失礼です、どうぞご遠慮えんりよなくと動く景色もない。なに構うもんですか、送別会なら、送別会らしくするがいいです、あの様をご覧なさい。気狂きりがいかい会です。さあ行きましようかと、進まないのを無理に勧めて、座敷を出かかるところへ、野だが箒を振り振り進行して来て、やご主人が先へ帰るとはひどい。日清談判だ。帰せないと箒を横にして行く手を塞ふさいだ。おれはさつきから肝癪かんしゃくが起つているところだから、日清談判なら

貴様はちゃんちやんだろうと、いきなり拳骨げんこつで、野だの頭をばかりと喰くわしてやった。野だは二三秒の間毒気を抜かれた体ていで、ぼんやりしていたが、おやこれはひどい。お撲ぶちになつたのは情ない。この吉川を打擲ちようちやくとは恐れ入つた。いよいよもつて日清談判だ。とわからぬ事をならべているところへ、うしろから山嵐が何か騒動そうどうが始まつたと見てとつて、剣舞をやめて、飛んできたが、このていたらくを見て、いきなり頸筋くびすじをうんと攪つかんで引き戻もどした。日清………いたい。いたい。どうもこれは乱暴だと振りもがくところを横ねじに振つた

ら、すたとんと倒たおれた。あとはどうなつたか知らない。
途とちゆう中でうらなり君に別れて、うちへ帰つたら十一時過
ぎだった。

十

祝勝会で学校はお休みだ。練兵場れんべいばで式があるというので、狸たぬきは生徒を引率して参列しなくてはならない。おれも職員ひとの一人としていつしよにくつついて行くんだ。町へ出ると日の丸だらけで、まぼしいくらいである。学校の生徒は八百人もあるのだから、体操の教師が隊たいご伍を整えて、一組一組の間を少しづつ明けて、それへ職員が一人か二人ふたりずつ監督かんとくとして割り込こむ仕掛しかけ

である。仕掛しかけだけはすこぶる巧妙こうみょうなものだが、実際はすこぶる不手際である。生徒は小供こどもの上に、生意気で、規律を破らなくつては生徒の体面にかかわると思つて、奴等やつらだから、職員が幾人いくたりついでに行つたつて何の役に立つもんか。命令も下さないのに勝手な軍歌をうたつたり、軍歌をやめるとワーと訳もないのに鬨ときの声を揚げたり、まるで浪人ろうにんが町内をねりあるいてるようなものだ。軍歌も鬨ときの声も揚げない時はがやがや何か喋舌しゃべつてる。喋舌しゃべらないでも歩けそうなもんだが、日本人はみな口から先へ生れるのだから、いくら小言を

云つたつて聞きつこない。喋舌るのもただ喋舌るのではない、教師のわる口を喋舌るんだから、下等だ。おれは宿直事件で生徒を謝罪さして、まあこれならよろうと思つていた。ところが実際は^{おおちが}大違いである。下宿の^{ぼあ}婆さんの言葉を借りて云えば、正に大違いの勘五郎^{かんごろう}である。生徒があやまつたのは心^{しん}から後悔^{こうかい}してあやまつたのではない。ただ校長から、命令されて、形式的に頭を下げたのである。商人が頭ばかり下げて、^{ずる}狡い事をやめないのと一般で生徒も謝罪だけはするが、いたずらは決してやめるものでない。よく考えてみる

と世の中はみんなこの生徒のようなものから成立して
いるかも知れない。人があやまつたり詫わびたりするの
を、真面目まじめに受けて勘弁するのは正直過ぎる馬鹿ばかと云
うんだらう。あやまるのも仮りにあやまるので、勘弁
するのも仮りに勘弁するのだと思つてれば差さし支つかえな
い。もし本当にあやまらせる気なら、本当に後悔する
まで叩たたきつけなくてはいけない。

おれが組と組の間にはいつて行くと、天麩羅てんぷらだの、
団子だんごだの、と云う声が絶えずする。しかも大勢だから、
誰だれが云うのだから分らない。よし分つてもおれの事を天

麩羅と云つたんじやありません、団子と申したのじやありません、それは先生が神経衰弱だから、ひがんで、そう聞くんだぐらい云うに極まつてる。こんな卑劣な根性は封建時代から、養成したこの土地の習慣なんだから、いくら云つて聞かしたつて、教えてやったつて、到底直りつこない。こんな土地に一年も居ると、潔白なおれも、この真似をしなければならなく、なるかも知れない。向うでうまく言い抜けられるような手段で、おれの顔を汚すのを抛つておく、樗蒲一はない。向うが人ならおれも人だ。生徒だつて、子供だつて、ず

う体はおれより大きいや。だから刑罰けいばつとして何か返報をしてやらなくつては義理がわるい。ところがこつちから返報をする時分に尋常じんじょうの手段で行くと、向うから逆振さかねじを食わして来る。貴様がわるいからだと言うと、初手から逃げ路にみちが作つてある事だから滔々とうとうと弁じ立てる。弁じ立てておいて、自分の方を表向きだけ立派にしてそれからこつちの非を攻撃こうげきする。もともと返報にした事だから、こちらの弁護は向うの非が拳がらない上は弁護にならない。つまりは向うから手を出しておいて、世間体はこつちが仕掛けた喧嘩けんかのように、見倣みなな

されてしまう。大変な不利益だ。それなら向うのやるなり、愚迂多良童子ぐうたらどうじを極め込んでいれば、向うはますます増長するばかり、大きく云えば世の中のためにならない。そこで仕方がないから、こつちも向うの筆法を用いて捕まつらえられないで、手の付けようのない返報をしなくてはならなくなる。そうなつては江戸えどつ子も駄目だめだ。駄目だが一年もこうやられる以上は、おれも人間だから駄目でも何でもそうならなくつちや始末がつかない。どうしても早く東京へ帰つて清きよといつしよになるに限る。こんな田舎いなかに居るのは墮落だらくしに来てい

るようなものだ。新聞配達をしたって、ここまで墮落するよりはましだ。

こう考えて、いやいや、附ついてくると、何だか先鋒せんぽうが急にがやがや騒さわぎ出した。同時に列はぴたりと留まる。変だから、列を右へはずして、向うを見ると、おおてまち大手町を突つき当あって薬師町やくしまちへ曲がる角の所で、行き詰づまったぎり、押おし返したり、押し返されたりして揉もみ合あっている。前方から静かに静かにと声を涸からして来た体操教師に何ですと聞くと、曲り角で中学校と師範しはん学校が衝突しょうとつしたんだと云う。

中学と師範とはどこの県下でも犬と猿さるのように仲がわるいそうだ。なぜだかわからないが、まるで気風が合わない。何かあると喧嘩けんかをする。大方狭せまい田舎で退屈たいくつだから、暇潰ひまつぶしにやる仕事なんだろう。おれは喧嘩は好きな方だから、衝突と聞いて、面白半分に馳かけ出して行つた。すると前の方にいる連中は、しきりに何だ地方税の癖くせに、引き込めと、怒鳴どなってる。後ろからは押せ押せと大きな声を出す。おれは邪魔じやまになる生徒の間をくぐり抜けて、曲がり角へもう少しで出ようとした時に、前へ！と云う高く鋭すどどい号令ごうれいが聞きこえた

思つたら師範学校の方は肅肅しゆくしゆくとして行進を始めた。先を争つた衝突は、折合ゆずがついたには相違そういないが、つまり中学校が一步を譲つたのである。資格から云うと師範学校の方が上だそうだ。

祝勝の式はすこぶる簡単なものであつた。旅団長が祝詞を読む、知事が祝詞を読む、参列者が万歳ばんざいを唱える。それでおしまいだ。余興は午後にあると云う話だから、ひとまず下宿へ帰つて、こないだじゅうから、気に掛かつていた、清への返事をかきかけた。今度はもつと詳くわしく書いてくれとの注文だから、なるべく

念入ねんいりに認めしめたなくつちやならない。しかしいざとなつて、
半切はんきれを取り上げると、書く事はたくさんあるが、何か
ら書き出していいか、わからない。あれにしようか、
あれは面倒臭めんどうくさい。これにしようか、これはつまらない。
何か、すらすらと出て、骨が折れなくつて、そうして
清が面白がるようなものはないかしらん、と考えるみ
ると、そんな注文通りの事件は一つもなさそうだ。お
れは墨すみを磨すつて、筆をしめして、巻紙まきしを睨にらめて、——巻
紙を睨めて、筆をしめして、墨を磨つて——同じ所作
を同じように何返も繰くり返したあと、おれには、とて

も手紙は書けるものではないと、諦めて硯の蓋をしてしまった。手紙なんぞをかくのは面倒臭い。やつぱり東京まで出掛けて行って、逢つて話をするのが簡便だ。清の心配は察しなくてもないが、清の注文通りの手紙を書くのは三七日の断食よりも苦しい。

おれは筆と巻紙を抛り出して、ごろりと転がつて肱枕ひじまくらをして庭にわの方を眺めてみたが、やつぱり清の事が気にかかる。その時おれはこう思った。こうして遠くへ来てまで、清の身の上を案じていてやりさえすれば、おれの真心まことは清に通じるに違いない。通じさえすれば

手紙なんぞやる必要はない。やらなければ無事で暮(くら)してると思(おも)つてるだろう。たよりは死(し)んだ時(とき)か病(びやう)氣(き)の時(とき)か、何か事(こと)の起(お)つた時(とき)にやりさえすればいい訳(わけ)だ。

庭(にわ)は十坪(とつぽ)ほどの平庭(へい)で、これという植木(うゑき)もない。ただ一本(いっぽん)の蜜柑(みかん)があつて、塀(へい)のそとから、目標(めじるし)になるほど高い。おれはうちへ帰(かへ)ると、いつでもこの蜜柑(みかん)を眺(なが)める。東京(とうきやう)を出(で)た事(こと)のないものには蜜柑(みかん)の生(な)つているところはすこぶる珍(めづら)しいものだ。あの青(あお)い実(み)がだんだん熟(じやく)してきて、黄色(きいろ)になるんだろうが、定(さだ)めて奇麗(きれい)だろう。今(いま)でももう半分(はんぶん)色(いろ)の変(か)つたのがある。婆(ばあ)さんに

聞いてみると、すこぶる水気の多い、旨い蜜柑だそう
だ。今に熟たら、たんと召し上がれと云つたから、毎
日少しずつ食つてやろう。もう三週間もしたら、充分
食えるだろう。まさか三週間以内にここを去る事もな
かろう。

おれが蜜柑の事を考えているところへ、偶然山嵐が
話しにやって来た。今日は祝勝会だから、君といつ
しよにご馳走を食おうと思つて牛肉を買つて来たと、
竹の皮の包を袂から引きずり出して、座敷の真中へ抛
り出した。おれは下宿で芋責豆腐責になつてる上、

蕎麦屋行き、団子屋行きを禁じられてる際だから、そいつは結構だと、すぐ婆さんから鍋と砂糖をかり込んで、煮方に取りかかった。

山嵐は無暗に牛肉を頬張りながら、君あの赤シャツが芸者に馴染のある事を知ってるかと聞くから、知ってるとも、この間うらなりの送別会の時に来た一人がそうだろうと云ったら、そうだ僕はこの頃ようやく勘づいたのに、君はなかなか敏捷だと大いにほめた。

「あいつは、ふた言目には品性だの、精神的娯楽だのと云う癖に、裏へ廻って、芸者と関係なんかつけとる、

怪けしからん奴やつだ。それもほかの人が遊あそぶのを寛容かんようする
ならいいが、君が蕎麦屋へ行つたり、団子屋へはいる
のさえ取締とりしまりじょう上害になると云つて、校長の口を通して
注意を加えたじやないか」

「うん、あの野郎の考えじや芸者買は精神的娯楽で、天
麩羅や、団子は物理的娯楽なんだろう。精神的娯楽な
ら、もつと大べらにやるがいい。何だあの様さまは。馴染
の芸者がはいつてくると、入れ代りに席をはずして、
逃げるなんて、どこまでも人を胡魔化ごまかす気だから気に
食わない。そうして人が攻撃こうげきすると、僕は知らないと

か、露西亞ロシア文学だとか、俳句が新体詩の兄弟分だとか云つて、人を烟けむに捲まくつもりなんだ。あんな弱虫は男じゃないよ。全く御殿女中ごてんじよちゆうの生れ変りか何かだぜ。これによると、あいつのおやじは湯島のかげまかもしれない」

「湯島のかげま、また何だ」

「何でも男らしくないもんだらう。——君そこのところはまだ煮えていないぜ。そんなのを食たうと條虫さなだむしが湧わくぜ」

「そうか、大抵たいてい大丈夫だいじゆうぶだらう。それで赤シャツは人に

隠れて、温泉の町の角屋へ行つて、芸者と会見するそ

うだ」

「角屋つて、あの宿屋か」

「宿屋兼料理屋さ。だからあいつを一番へこますためには、あいつが芸者をつれて、あすこへはいり込むところを見届けておいて面詰するんだね」

「見届けるつて、夜番でもするのかい」

「うん、角屋の前に柵屋ますやという宿屋があるだろう。あの表二階をかりて、障子しょうじへ穴をあけて、見ているのさ」

「見ているときに来るかい」

「来るだろう。どうせひと晩じやいけない。二週間ばかりやるつもりでなくっちゃ」

「随分ずいぶん疲れるぜ。僕あ、おやじの死ぬとき一週間ばかり徹夜てつやして看病した事があるが、あとでぼんやりして、大いに弱った事がある」

「少しぐらい身体が疲れたって構わんさ。あんな奸物かんぶつをあのままにしておくと、日本のためにならないから、僕が天に代って誅戮ちゆうりくを加えるんだ」

「愉快ゆかいだ。そう事が極まれば、おれも加勢してやる。それで今夜から夜番をやるのかい」

「まだ枡屋に懸合かけあつてないから、今夜は駄目だ」

「それじゃ、いつから始めるつもりだい」

「近々のうちやるさ。いずれ君に報知をするから、そうしたら、加勢してくれたまえ」

「よろしい、いつでも加勢する。僕は計略ほく はかりごとは下手へただが、喧嘩けんかとくるとこれでなかなかすばしこいぜ」

おれと山嵐がしきりに赤シャツ退治はかりごとの計略を相談している、宿の婆ほったさんが出て来て、学校の生徒せいとさんが一人、堀田先生ほったにお目にかかりたいてお出いでたぞなもし。今お宅へ参じたのじゃが、お留守るすじゃけれ、大

方ここじやろうてて捜し当ててお出でたのじやがなもしと、闕しきいの所へ膝ひざを突ついて山嵐の返事を待つてる。山嵐はそうですかと玄関げんかんまで出て行つたが、やがて帰つて来て、君、生徒が祝勝会の余興を見に行かないかつて誘さそいに来たんだ。今日は高知こうちから、何とか踊おどりをしに、わざわざここまで多人数たにんず乗り込んで来ているのだから、是非見物しろ、めつたに見られない踊おどりだというんだ、君もいつしよに行つてみたまえと山嵐は大いに乗り気で、おれに同行を勧める。おれは踊なら東京でたくさん見ている。毎年八幡はちまんさま様のお祭りには屋台が町

内へ廻つてくるんだから汐酌しおくみでも何でもちやんと心得ている。土佐つぼの馬鹿踊なんか、見たくもないと思つたけれども、せつかく山嵐が勧めるもんだから、つい行く気になつて門へ出た。山嵐を誘みよういに来たものは誰かと思つたら赤シャツの弟だ。妙みやうな奴やつが来たものだ。

会場へはいると、回向院えこういんの相撲すもうか本門寺ほんもんじの御会式おえしきのように幾旒いくながれとなく長い旗を所々に植え付けた上に、世界万国の国旗をことごとく借りて来たくらい、繩なわから繩、綱つなから綱へ渡わたしかけて、大きな空が、いつになく

賑にぎやかに見える。東の隅すみに一夜作りの舞台ぶたいを設けて、ここでいわゆる高知の何とか踊りをやるんだそうだ。舞台を右へ半町ばかりくると葭よし簀すの困いいをして、活花いけばなが陳列ちんれつしてある。みんなが感心して眺めているが、一向くだらしないものだ。あんなに草や竹を曲げて嬉うれしがるなら、背虫の色男や、跛びつこの亭主ていしゅを持って自慢じまんするがよかろう。

舞台とは反対の方面で、しきりに花火を揚げる。花火の中から風船が出た。帝国万歳ていこくばんざいとかいてある。天主の松の上をふわふわ飛んで営所のなかへ落ちた。次は

ぽんと音がして、黒い団子が、しよつと秋の空を射抜くように揚がるあると、それがおれの頭の上で、ぽかりと割れて、青い烟けむりが傘の骨かさのように開いて、だらだらと空中に流れ込んだ。風船がまた上がった。今度は陸海軍万歳と赤地に白く染め抜いた奴が風に揺られて、温泉ゆの町から、相生村あいおいむらの方へ飛んでいった。大方観音様の境内けいだいへでも落ちたろう。

式の時はずさほどでもなかったが、今度は大変な人出だ。田舎にもこんな人間が住んでるかおどと驚ろいたぐらいうじやうじやしている。利口りこうな顔はあまり見当ら

ないが、数から云うとたしかに馬鹿に出来ない。そのうち評判の高知の何とか踊が始まった。踊というから藤間か何ぞのやる踊りかと早合点していたが、これは大間違いであった。

いかめしい後鉢巻うしろはちまきをして、立つ付け袴ぼかまを穿いた男が十人ばかりずつ、舞台の上に三列に並ならんで、その三十人がことごとく抜き身を携さげているには魂消たまげた。前列と後列の間はわずか一尺五寸ぐらいだろう、左右の間隔かんかくはそれより短いとも長くはない。たった一人列を離はなれて舞台の端はしに立つてるのがあるばかりだ。この仲

間外はずれの男は袴だけはつけているが、後鉢巻は儉約し

て、抜身の代りに、胸へ太鼓たいこを懸かけている。太鼓は

太神楽だいかぐらの太鼓と同じ物だ。この男がやがて、いやあ、

はああと呑気のんきな声を出して、妙な謡うたをうたいながら、

太鼓をぼこぼん、ぼこぼんと叩たたく。歌の調子は前代未

聞の不思議なものだ。三河万歳みかわまんざいと普陀洛ふだらくやの合併がつぺいした

ものと思えば大した間違まちがいにはならない。

歌はすこぶる悠長ゆうちやうなもので、夏分の水飴みずあめのように、

だらしが無いが、句切りをとるためにぼこぼんを入れ

るから、のべつひやうしのようでも拍子は取れる。この拍子に

応じて三十人の抜き身がぴかぴかと光るのだが、これはまたすこぶる迅速じんそくなお手際で、拝見ひやひやしていても冷々する。隣となりも後ろも一尺五寸以内に生きた人間が居て、その人間がまた切れる抜き身を自分と同じように振り舞まわすのだから、よほど調子が揃そろわなければ、同志撃どうしうちを始めて怪我けがをする事になる。それも動かないで刀だけ前後とか上下とかに振るのなら、まだ危険あぶなくもないが、三十人が一度に足踏あしふみをして横を向く時がある。ぐるりと廻る事がある。膝を曲げる事がある。隣りのものが一秒でも早過ぎるか、遅おそ過ぎれば、自分の鼻は落ち

るかも知れない。隣りの頭はそがれるかも知れない。抜き身の動くのは自由自在だが、その動く範囲はんいは一尺五寸角の柱のうちにかぎられた上に、前後左右のものと同方向に同速度にひらめかなければならない。こいつは驚いた、なかなかもつて汐酌しおくみや関せきの戸との及およぶところでない。聞いてみると、これははなはだ熟練の入るもので容易な事では、こういう風に調子が合わないそうだ。ことにむずかしいのは、かの万歳節のぼこぼん先生だそうだ。三十人の足の運びも、手の働きも、腰こしの曲げ方も、ことごとくこのぼこぼん君の拍子一つで

極まるのだそうだ。傍はたで見ていると、この大将が一番呑気そうに、いやあ、はああと気楽にうたってるが、その実ははなはだ責任が重くつて非常に骨が折れるとは不思議なものだ。

おれと山嵐が感心のあまりこの踊を余念なく見物している、半町ばかり、向うの方で急にわつと云う関の聲がして、今までおた穩やかに諸所を縦覧していた連中が、にわかには波を打って、右左りに揺うごき始める。喧嘩だ喧嘩だと云う聲がすると思うと、人の袖そでを潜くぐり抜ぬけて来た赤シャツの弟が、先生また喧嘩です、中学の方

で、今朝の意趣返しをするんで、また師範の奴と決戦を始めたところですよ、早く来て下さいと云いながらまた人の波のなかへ潜り込んでどつかへ行つてしまった。山嵐は世話の焼ける小僧だまた始めたのか、いい加減にすればいいのにと逃げる人を避けながら一散に馳け出した。見ている訳にも行かないから取り鎮めるつもりだろう。おれは無論の事逃げる気はない。山嵐の踵を踏んであとからすぐ現場へ馳けつけた。喧嘩は今

が真最中である。師範の方は五六十人もあろうか、中学はたしかに三割方多い。師範は制服をつけているが、

中学は式後大抵たいていは日本服に着換きえているから、敵味方はすぐわかる。しかし入り乱れて組んづ、解ほれつ戦つてるから、どこから、どう手を付けて引き分けていいか分らない。山嵐は困つたなと云う風で、しばらくこの乱雑な有様を眺めていたが、こうなつちや仕方がない。巡查じゆんさがくると面倒だ。飛び込んで分けようと、おれの方を見て云うから、おれは返事もしないで、いきなり、一番喧嘩の烈はげしそうな所へ躍り込こんだ。止よせ止せ。そんな乱暴をすると学校の体面に関わる。よさないかと、出るだけの声を出して敵と味方の分界線らし

い所を突き貫けようとしたが、なかなかそう旨くは行かない。一二間はいつたら、出る事も引く事も出来なくなつた。目の前に比較的大きな師範生が、十五六の中学生と組み合っている。止せと云つたら、止さないかと師範生の肩を持って、無理に引き分けようとする途端にだれか知らないが、下からおれの足をすくつた。おれは不意を打たれて握つた、肩を放して、横に倒れた。堅い靴でおれの背中の上へ乗つた奴がある。両手と膝を突いて下から、跳ね起きたら、乗つた奴は右の方へころがり落ちた。起き上がって見ると、三間ばかり

り向うに山嵐の大きな身体が生徒の間に挟まりながら、止せ止せ、喧嘩は止せ止せと揉み返されてるのが見えた。おい到底駄目だと云つてみたが聞えないのか返事もしない。

ひゆうと風を切つて飛んで来た石が、いきなりおれの頬骨ほおほねへ中あたつたなと思つたら、後ろからも、背中を棒ぼうでどやした奴がある。教師の癖くせに出ている、打ぶて打ぶてと云う声がする。教師は二人だ。大きい奴と、小さい奴だ。石を抛なげろ。と云う声もする。おれは、なに生意気な事をぬかすな、田舎者の癖にと、いきなり、傍そば

に居た師範生の頭を張りつけてやった。石がまたひゅうと来る。今度はおれの五分刈ぶがりの頭を掠かすめて後ろの方へ飛んで行つた。山嵐はどうなつたか見えない。こうなつちや仕方がない。始めは喧嘩をとめにはいつたんだが、どやさされたり、石をなげられたりして、恐れ入つて引き下がるうんでれがあるものか。おれを誰だと思ふんだ。身長なりは小さくつても喧嘩の本場で修行を積んだ兄さんだと無茶苦茶に張り飛ばしたり、張り飛ばされたりしていると、やがて巡査だ巡査だ逃げろ逃げろと云う声が出た。今まで葛練くずねりの中で泳いで

るように身動きも出来なかつたのが、急に楽になつたと思つたら、敵も味方も一度に引上げてしまった。田舎者でも退却たいきやくは巧妙だ。クロパトキンより旨いくらいである。

山嵐はどうしたかを見ると、紋付もんつきのひとえぼおり一重羽織をずたずたにして、向うの方で鼻を拭ふいている。鼻柱をなくられて大分出血したんだそうだ。鼻がふくれ上がつて真赤まっかになつてすこぶる見苦しい。おれは飛白かすりのあわせ拾を着ていたから泥どろだらけになつたけれども、山嵐の羽織ほどな損害はない。しかし頬ほっぺたがびりびりしてたまら

ない。山嵐は大分血が出ているぜと教えてくれた。

巡査は十五六名来たのだが、生徒は反対の方面から退却したので、捕つらまったのは、おれと山嵐だけである。おれらは姓名せいめいを告げて、一部始終を話したら、ともかくも警察まで来いと云うから、警察へ行つて、署長の前で事の顛末てんまつを述べて下宿へ帰った。

あくる日眼が覚めてみると、身体中痛くてたまらない。久しく喧嘩をしつけなかったから、こんなに答えるんだらう。これじゃあんまり自慢もできないと床の中で考えていると、婆さんが四国新聞を持ってきて枕元へ置いてくれた。実は新聞を見るのも退儀なんだが、男がこれしきの事に閉口たれて仕様があるものかと無理に腹這いになって、寝ながら、二頁を開けてみ

ると驚ろいた。昨日の喧嘩がちゃんと出ている。喧嘩の出ているのは驚ろかないのだが、中学の教師堀田某と、近頃東京から赴任した生意気なる某とが、順良なる生徒を使喚してこの騒動を喚起せるのみならず、両人は現場にあつて生徒を指揮したる上、みだりに師範生に向つて暴行をほしいままにしたりと書いて、次にこんな意見が附記してある。本県の中学は昔時より善良温順の気風をもつて全国の羨望するところなりしが、軽薄なる二豎子のために吾校の特権を毀損せられて、この不面目を全市に受けたる以上は、吾人は奮然とし

て起つてその責任を問わざるを得ず。吾人は信ず、吾人が手を下す前に、当局者は相当の処分をこの無頼漢ぶらいかんの上に加えて、彼等かれらをして再び教育界に足を入るる余地なからしむる事を。そうして一字ごとにみんな黒点を加えて、お灸きゆうを据すえたつもりでいる。おれは床の中で、糞くそでも喰くらえと云いいながら、むつくり飛び起きた。不思議な事に今まで身体の関節ふしぶしが非常に痛かったのが、飛び起きると同時に忘れたように軽くなつた。

おれは新聞を丸めて庭へ抛なげつけたが、それでもまだ気に入らなかつたから、わざわざ後架こうかへ持つて行つ

て棄^すてて来た。新聞なんて無^む暗^{やみ}な嘘^{うそ}を吐^つくもんだ。世の中^{なか}に何が一番^ほ法^ら螺^らを吹^ふくと云^いつて、新聞ほどの法螺吹^ふきはあるまい。おれの云^いつてしかるべき事をみんな向^むうで並^{なら}べていやがる。それに近頃東京から赴^{しゆ}任^{にん}した生意^{しやうい}気^きな某^{たれ}とは何^{なに}だ。天下^{てんか}に某^{たれ}と云^いう名^な前^{まへ}の人^{ひと}があるか。考^{かん}えてみる。これでもれつきとした姓^{せい}もあ^あり名^なもあるんだ。系^{けい}図^ずが見^みたけりや、ただのまんじゆう多^た田^た満^{まん}仲^{ちゆう}以^い来^{らい}の先^{せん}祖^そを一人^{ひとり}残^{のこ}らず拜^ひま^ましてや^やらあ。——顔^{かほ}を洗^{せん}つたら、頬^ほぺたが急^いに痛^{いた}くな^なつた。婆^ばさん^{さん}に鏡^{かがみ}をか^かせと云^いつたら、け^けさの新聞^{しんぶん}をお見^みたかなも^もしと聞^きく。読^よんで後^ご架^かへ棄^す

てて来た。欲しけりや拾つて来いと云つたら、驚おどろいて引き下がった。鏡で顔を見ると昨日きのうと同じように傷がついている。これでも大事な顔だ、顔へ傷まで付けられた上へ生意気なる某などと、某呼ばわりをされればたくさんだ。

今日の新聞に辟へきえき易して学校を休んだなどと云われちや一生の名折れだから、飯を食つていの一号に出頭した。出てくる奴やつも、出てくる奴もおれの顔を見て笑っている。何がおかしいんだ。貴様達にこしらえてもらった顔じゃあるまいし。そのうち、野だが出て来

て、いや昨日はお手柄てがらで、——名譽めいよのご負傷でげすか、と送別会の時に撲なぐつた返報と心得たのか、いやに冷ひやかしたから、余計な事を言わずに絵筆でも舐なめていろと云つてやった。するとこりや恐おそれい入りやした。しかしさぞお痛い事でげしようと思つたから、痛かろうが、痛くなかろうがおれの面だ。貴様の世話になるもんかと怒ど鳴りつけてやったら、向むこう側の自席へ着いて、やつぱりおれの顔を見て、隣となりの歴史の教師と何か内所話をして笑っている。

それから山嵐が出頭した。山嵐の鼻に至つては、

むらさきいろ ぼうちやう

紫色に膨張して、掘つたら中から膿うみが出そうに見える。

うぬぼれ

自惚うぬぼれのせいか、おれの顔よりよつぽど手ひどく遣やられ

ている。おれと山嵐は机を並べて、隣り同志の近しい

仲で、お負けにその机が部屋の戸口から真正面にある

んだから運がわるい。妙な顔が二つ塊かたまつている。ほ

かの奴は退屈たいくつにさえなるときつとこつちばかり見る。

飛んだ事だと口で云うが、心のうちではこの馬鹿ばかがと

思つてるに相違そういない。それでなければああいう風に

ささやきあ

私語合つてはくすくす笑う訳がない。教場へ出ると生

徒は拍手をもつて迎むかえた。先生万歳ばんざいと云うものが二三

人あつた。景気がいいんだか、馬鹿にされてるんだか分からない。おれと山嵐がこんなに注意の焼点しょうてんとなつてるなかに、赤シャツばかりは平常の通り傍そばへ来て、どうも飛んだ災難でした。僕は君等に対してお気の毒でなりません。新聞の記事は校長とも相談して、正誤を申し込むこ手続きにしておいたから、心配しなくてもいい。僕の弟が堀田君を誘さそいに行つたから、こんな事が起おこつたので、僕は実に申し訳がない。それでこの件についてはいくまで尽力じんりょくするつもりだから、どうかあしからず、などと半分謝罪的な言葉を並べている。校

長は三時間目に校長室から出てきて、困った事を新聞
がかき出しましたね。むずかしくならなければいいが
と多少心配そうに見えた。おれには心配なんかない、
先で免職めんしよくをするなら、免職される前に辞表を出してし
まうだけだ。しかし自分がわるくないのにこつちから
身を引くのは法螺吹きの新聞屋をますます増長させる
訳だから、新聞屋を正誤させて、おれが意地にも務め
るのが順当だと考えた。帰りがけに新聞屋に談判に行
こうと思ったが、学校から取消とりけしの手続きはしたと云う
から、やめた。

おれと山嵐は校長と教頭に時間の合間を見計つて、嘘のないところを一応説明した。校長と教頭はそうだろう、新聞屋が学校に恨みうらを抱いて、あんな記事をことさらに掲げたんだらうと論断した。赤シャツはおれ等の行為こういを弁解しながら控所ひかえじよを一人ごとに廻まわつてあるいていた。ことに自分の弟が山嵐を誘い出したのを自分の過失であるかのごとく吹聴ふいちようしていた。みんなは全く新聞屋がわるい、怪けしからん、両君は実に災難だと云つた。

帰りがけに山嵐は、君赤シャツは臭くさいぜ、用心しな

いとやられるぜと注意した。どうせ臭いんだ、今日から臭くなつたんじゃないやなかうと云うと、君まだ気が付かないか、きのうわざわざ、僕等を誘い出して喧嘩のなかへ、捲き込んだのは策だぜと教えてくれた。なるほどそこまでは気がつかなかった。山嵐は粗暴なようだが、おれより智慧のある男だと感心した。

「ああやって喧嘩をさせておいて、すぐあとから新聞屋へ手を廻してあんな記事をかかせたんだ。実に奸物だ」

「新聞までも赤シャツか。そいつは驚いた。しかし新

聞が赤シャツの云う事をそう容易く聴くかね」

「聴かなくつて。新聞屋に友達が居りや訳はないさ」

「友達が居るのかい」

「居なくても訳ないさ。嘘をついて、事実これこれだと話しや、すぐ書くさ」

「ひどいもんだな。本当に赤シャツの策なら、僕等はこの事件で免職になるかも知れないね」

「わるくすると、遣やられるかも知れない」

「そんなら、おれは明日辞表を出してすぐ東京へ帰つちまわあ。こんな下等な所に頼たのんだつて居るのはいや

だ」

「君が辞表を出したって、赤シャツは困らない」

「それもそうだな。どうしたら困るだろう」

「あんな奸物の遣る事は、何でも証拠しょうこの拳がらないよ

うに、拳がらないようにと工夫するんだから、反駁はんぱくす

るのはむずかしいね」

「厄介やっかいだな。それじゃ濡衣ぬれぎぬを着るんだね。面白おもしろくもな

い。天道てんどう是耶非ぜかひかだ」

「まあ、もう二三日様子を見ようじゃないか。それで

いよいよとなったら、温泉ゆの町で取おさって抑おさえるより仕

方がないだろう」

「喧嘩事件は、喧嘩事件としてか」

「そうさ。こつちはこつちで向うの急所を抑えるのさ」
「それもよかろう。おれは策略は下手へたなんだから、万事よろしく頼む。いざとなれば何でもする」

俺と山嵐はこれで分れたわか。赤シャツが果たして山嵐の推察通りをやったのなら、実にひどい奴だ。到底とうてい智慧比べで勝てる奴ではない。どうしても腕力わんりよくでなくつちや駄目だめだ。なるほど世界に戦争は絶えない訳だ。個人でも、とどの詰りつまは腕力だ。

あくる日、新聞のくるのを待ちかねて、披ひらいてみると、正誤どころか取り消しも見えない。学校へ行つてたぬき狸さいそくに催促すると、あしたぐらい出すでしようと云う。明日になつて六号活字で小さく取消が出た。しかし新聞屋の方で正誤は無論しておらない。また校長に談判すると、あれより手続きのしようはないのだと云う答だ。校長なんて狸のような顔をして、いやにフロック張っているが存外無勢力なものだ。虚偽きよぎの記事を掲げた田舎新聞一つ詫あやまらせる事が出来ない。あんまり腹が立ったから、それじゃ私が一人で行つて主筆に談判

すると云つたら、それはいかん、君が談判すればまた悪口を書かれるばかりだ。つまり新聞屋にかかれた事は、うそにせよ、本当にせよ、つまりどうする事も出来ないものだ。あきらめるより外に仕方がないと、坊主の説教じみた説論せつゆを加えた。新聞がそんな者なら、一日も早く打ぶつ潰つぶしてしまつた方が、われわれの利益だろう。新聞にかかれるのと、泥鼈すっぽんに食いつかれるとが似たり寄つたりだとは今日こんにちただ今狸の説明によつて始めて承知つかまつ仕つつた。

それから三日ばかりして、ある日の午後、山嵐が

憤然ふんぜんとやって来て、いよいよ時機が来た、おれは例の

計画を断行するつもりだと云うから、そうかそれじゃ

おれもやろうと、即座そくざに一味徒党に加盟した。ところが

が山嵐が、君はよす方がよかろうと首を傾かたむけた。なぜ

と聞くと君は校長に呼ばれて辞表を出せと云われたか

と尋たずねるから、いや云われない。君は？ と聴き返す

と、今日校長室で、まことに気の毒だけれども、事情

やむをえんから処決しよけつしてくれと云われたとの事だ。

「そんな裁判はないぜ。狸は大方腹鼓はらつづみを叩たたき過ぎて、

胃の位置が顛倒てんどうしたんだ。君とおれは、いつしよに、

祝勝会へ出てさ、いつしよに高知のぴかぴか踊りおどを見てさ、いつしよに喧嘩をとめにはいつたんじやないか。辞表を出せというなら公平に両方へ出せと云うがいい。なんで田舎いなかの学校はそう理窟りくつが分らないんだろう。焦慮じれつたいな」

「それが赤シャツの指金さしがねだよ。おれと赤シャツとは今までの行懸ゆきがかり上到底とうてい両立しない人間だが、君の方は今の通り置いても害にならないと思ってるんだ」

「おれだって赤シャツと両立するものか。害にならないと思うなんて生意気だ」

「君はあまり単純過ぎるから、置いたつて、どうでも胡魔化ごまかされると考えてるのさ」

「なお悪いや。誰だれが両立してやるものか」

「それに先だつて古賀が去つてから、まだ後任が事故のために到着とうちやくしないだろう。その上に君と僕を同時に追い出しちゃ、生徒の時間に明きが出来て、授業にさし支つかえるからな」

「それじゃおれを間あいのくさびに一席うかが伺わせる気なんだな。こん畜生ちくしょう、だれがその手に乗るものか」

あくるひ

翌日おれは学校へ出て校長室へ入って談判を始めた。「何で私に辞表を出せと云わないんですか」

「へえ？」と狸はあつけに取られている。

「堀田には出せ、私には出さないで好いと云う法がありますか」

「それは学校の方の都合で……」

「その都合が間違まちがつてまさあ。私が出さなくつて済むなら堀田だって、出す必要はないでしょう」

「その辺は説明が出来かねますが——堀田君は去られてもやむをえんのですが、あなたは辞表をお出しにな

る必要を認めませんから」

なるほど狸だ、要領を得ない事ばかり並べて、しかも落ち付きほら払ってる。おれは仕様がなから

「それじゃ私も辞表を出しましょう。堀田君一人辞職させて、私が安閑あんかんとして、留まっていられると思っていらっしゃるかも知れないが、私にはそんな不人情な事は出来ません」

「それは困る。堀田も去りあなたも去ったら、学校の数学の授業がまるで出来なくなってしまうから……」

「出来なくなっても私の知った事じゃありません」

「君そう我儘わがままを云うものじゃない、少しは学校の事情

も察してくれなくっちゃ困る。それに、来てから一月立つか立たないのに辞職したと云うと、君の将来の履歴りれきに関係するから、その辺も少しは考えたらいいでしょう」

「履歴なんか構うもんですか、履歴より義理が大切で
す」

「そりやごもつとも——君の云うところは一々ごもつともだが、わたしの云う方も少しは察して下さい。君が是非辞職すると云うなら辞職されてもいいから、代

りのあるまでどうかやつてもらいたい。とにかく、うちでもう一返考え直してみてください」

考え直すつて、直しようのない明々白白たる理由だが、狸が蒼あおくなつたり、赤くなつたりして、可愛想かわいそうになつたからひとまず考え直す事として引き下がった。赤シャツには口もきかなかつた。どうせ遣つつけるなら塊かためて、うんと遣つつける方がいい。

山嵐に狸と談判した模様を話したら、大方そんな事だろうと思つた。辞表の事はいざとなるまでそのままにしておいても差支さしつかえあるまいとの話だつたから、山

嵐の云う通りにした。どうも山嵐の方がおれよりも利巧らしいから万事山嵐の忠告に従う事にした。

山嵐はいよいよ辞表を出して、職員一同に告別の挨拶をして浜の港屋まで下つたが、人に知れないように引き返して、温泉の町の枡屋の表二階へ潜んで、障子へ穴をあけて覗き出した。これを知つてゐるものはおればかりだろう。赤シャツが忍んで来ればどうせ夜だ。しかも宵の口は生徒やその他の目があるから、少なくとも九時過ぎに極つてゐる。最初の二晩はおれも十時頃まで張番をしたが、赤シャツの影も見えない。

三日目には九時から十時半まで覗いたがやはり駄目だ。駄目を踏んで夜なかに下宿へ帰るほど馬鹿気た事はない。四五日すると、うちの婆さんが少々心配を始めて、奥さんのおありるのに、夜遊びはおやめたがええぞなもしと忠告した。そんな夜遊びとは夜遊びが違う。こつちのは天に代つて誅戮ちゆうりくを加える夜遊びだ。とはいふものの一週間も通つて、少しも験げんが見えないと、いやになるもんだ。おれは性急せつかちな性分だから、熱心になると徹夜てつやでもして仕事をするが、その代り何によらず長持ちのした試しがない。いかに天誅党でも飽あきる事

に変わりはない。六日目には少々いやになつて、七日目にはもう休もうかと思つた。そこへ行くと山嵐は頑固がんこなものだ。宵よいから十二時過すぎまでは眼を障子へつけて、角屋の丸ぼやの瓦斯燈がすとうの下を睨にらめつきりである。おれが行くと今日は何人客があつて、泊とまりが何人、女が何人といろいろな統計を示すのには驚ろいた。どうも来ないようじやないかと云うと、うん、たしかに来るはずだがと時々腕組うでぐみをして溜息ためいきをつく。可愛想に、もし赤シャツがここへ一度来てくれなければ、山嵐は、生涯しょうがい天誅を加える事は出来ないのである。

八日目には七時頃から下宿を出て、まずゆるりと湯に入つて、それから町で鶏卵けいらんを八つ買った。これは下宿の婆さんの芋責いもぜめに応ずる策である。その玉子を四つずつ左右の袂たもとへ入れて、例の赤手拭あかてぬぐいを肩かたへ乗せて、懐手ふところをしながら、枡屋ますやの楷子段はしごだんを登つて山嵐ざしきの座敷の障子をあげると、おい有望有望と韋駄天いだてんのような顔は急に活気を呈ていした。昨夜ゆうべまでは少し塞ふさぎの気味で、はたで見ているおれさえ、陰気臭いんきくさいと思つたくらいだが、この顔色を見たら、おれも急にうれしくなつて、何も聞かない先から、愉快愉快ゆかいと云つた。

「今夜七時半頃あの小鈴こすずと云う芸者が角屋へはいった」

「赤シャツといっしょか」

「いいや」

「それじゃ駄目だ」

「芸者は二人づれだが、——どうも有望らしい」

「どうして」

「どうしてって、ああ云う狡ずるい奴だから、芸者を先へよ

こして、後から忍んでくるかも知れない」

「そうかも知れない。もう九時だろう」

「今九時十二分ばかりだ」と帯の間からニッケル製の

時計を出して見ながら云つたが「おい洋燈らんぶを消せ、障子へ二つ坊主頭が写つてはおかしい。狐きつねはすぐ疑ぐるから」

おれは一貫張いっかんぼりの机の上にあつた置き洋燈らんぶをふつと吹きつけた。星明りで障子だけは少々あかるい。月はまだ出ていない。おれと山嵐いっしょうけんめいは一生懸命に障子へ面かおをつけて、息を凝こらしている。チーンと九時半の柱時計が鳴つた。

「おい来るだろうかな。今夜来なければ僕はもう厭いやだぜ」

「おれは銭のつづく限りやるんだ」

「銭つていくらあるんだい」

「今日までで八日分五円六十銭払った。いつ飛び出しても都合のいいように毎晩勘定するんだ」

「それは手廻しがいい。宿屋で驚いてるだろう」

「宿屋はいいが、気が放せないから困る」

「その代り昼寝ひるねをするだろう」

「昼寝はするが、外出が出来ないんで窮屈きゆうくつでたまらな
い」

「天誅も骨が折れるな。これで天網てんもうかいかいそ恢々疎そにして洩もら

しちまつたり、何かしちや、つまらないぜ」

「なに今夜はきつとくるよ。——おい見ろ見ろ」と小声になつたから、おれは思わずどきりとした。黒い帽子ぼうしを戴いたいた男が、角屋の瓦斯燈を下から見上げたまま暗い方へ通り過ぎた。違つている。おやおやと思つた。そのうち帳場の時計が遠慮えんりよなく十時を打つた。今夜もとうとう駄目らしい。

世間は大分静かになつた。遊廓ゆうかくで鳴らす太鼓たいこが手に取るように聞きこえる。月が温泉ゆの山の後うしろからのつと顔を出した。往来はあかるい。すると、下しもの方から人声が出た。

聞えだした。窓から首を出す訳には行かないから、姿を突つき留める事は出来ないが、だんだん近づいて来る模様だ。からんからんと駒下駄こまげたを引き擦ずる音がする。眼ななを斜ななめにするるとやつと二人の影法師かげぼうしが見えるくらいに近づいた。

「もう大丈夫だいじょうぶですね。邪魔じやまものは追つ払ったから」正まさ

しく野だの声である。「強がるばかりで策がないから、仕様がな

い」これは赤シャツだ。「あの男もべらんめえに似ていますね。あのべらんめえと来たら、勇み肌はだの坊ぼっちゃんだから愛嬌あいぎょうがありますよ」「増給がいやだの

辞表を出したいのつて、ありやどうしても神経に異状があるに相違ない」おれは窓をあけて、二階から飛び下りて、思う様打ちぶのめしてやろうと思つたが、やつとの事で辛防しんぼうした。二人はハハハハと笑いながら、瓦斯燈の下を潜くぐつて、角屋の中へはいつた。

「おい」

「おい」

「来たぜ」

「とうとう来た」

「これでようやく安心した」

「野だの畜生、おれの事を勇み肌の坊っちゃんだと抜かしやがった」

「邪魔物と云うのは、おれの事だぜ。失敬千万な」

おれと山嵐は二人の帰路を要撃しなければならぬ。しかし二人はいつ出てくるか見当がつかない。山嵐は下へ行つて今夜ことによると夜中に用事があつて出るかも知れないから、出られるようにしておいてくれと頼んで来た。今思うと、よく宿のものが承知したものだ。大抵なら泥棒と間違えられるところだ。

赤シャツの来るのを待ち受けたのはつらかったが、

出て来るのをじつとして待つてるのはなおつらい。寝る訳には行かないし、始終障子の隙すきから睨にらめているのもつらいし、どうも、こうも心が落ちつかなくつて、これほど難儀なんぎな思いをした事はいまだにない。いつその事角屋へ踏み込んで現場を取つて抑おさえようと発議ほつぎしたが、山嵐は一言にして、おれの申し出を斥しりぞけた。自分共が今時分飛び込んだつて、乱暴者だと云つて途中とちゆうで遮おさられる。訳を話して面会を求めれば居ないと逃にげるか別室へ案内をする。不用意のところへ踏み込めると仮定したところで何十とある座敷のどこに居るか分

るものではない、退屈でも出るのを待つより外に策はないと云うから、ようやくの事でとうとう朝の五時まで我慢した。

角屋から出る二人の影を見るや否や、おれと山嵐はすぐあとを尾けた。一番汽車はまだないから、二人とも城下まであるかなければならない。温泉の町をはずれると一丁ばかりの杉並木があつて左右は田圃になる。それを通りこすところかしこに藁葺があつて、畠の中を一筋に城下まで通る土手へ出る。町さえはずれば、どこで追いついても構わないが、なるべくなら、人家

のない、杉並木で捕まえてやろうと、見えがくれに歩いて来た。町を外れると急に馳け足の姿勢で、はやてのようには後ろから、追いついた。何が来たかと驚ろいて振り向く奴を待てと云つて肩に手をかけた。野だは狼狽の気味で逃げ出そうという景色だったから、おれが前へ廻つて行手を塞いでしまった。

「教頭の職を持つてるものが何で角屋へ行つて泊つたと山嵐はすぐ詰りかけた。

「教頭は角屋へ泊つて悪るいという規則がありますかと赤シャツは依然として鄭寧な言葉を使つてる。顔の

色は少々蒼い。

とりしまりじよう

「取締とりしまり上不都合だから、蕎麦屋そばやや団子屋だんごやへさえは

きんちよく

いつてはいかんと、云うくらい謹直きんちよくな人が、なぜ芸者

といつしよに宿屋へとまり込んだ」野だは隙を見ては

逃げ出そうとするからおれはすぐ前に立ち塞がつて

「べらんめえの坊っちゃんた何だ」と怒鳴り付けたら、

「いえ君の事を云つたんじゃないんです、全くないん

です」と鉄面皮に言訳がましい事をぬかした。おれは

この時気がついてみたら、両手で自分の袂たもとを握にぎつてる。

追っかける時に袂の中の卵がぶらぶらして困るから、

両手で握りながら来たのである。おれはいきなり袂へ手を入れて、玉子を二つ取り出して、やつと云いながら、野だの面へ擲たきつけた。玉子がぐちやりと割れて鼻の先から黄味がだらだら流れだした。野だはよつぽど仰天ぎょうてんした者と見えて、わつと言いながら、尻持しりもちをついて、助けてくれと云った。おれは食うために玉子は買ったが、打ぶつけるために袂へ入れてる訳ではない。ただ肝癩かんしゃくのあまりに、ついぶつけるともなしに打つけてしまったのだ。しかし野だが尻持を突いたところを見て始めて、おれの成功した事に気がついたから、こ

ん畜生ちくしやう、こん畜生と云いながら残る六つを無茶苦茶に
 擲たたきつけたら、野だは顔中黄色になつた。

おれが玉子をたたきつけているうち、山嵐と赤シャ
 ツはまだ談判最中である。

「芸者をつれて僕が宿屋へ泊つたと云う証しょうこ拠がありま
 すか」

「宵に貴様のなじみの芸者が角屋へはいつたのを見て
 云う事だ。胡魔化せるものか」

「胡魔化する必要はない。僕は吉川君と二人で泊つたの
 である。芸者が宵にはいろいろが、はいるまいが、僕の

知つた事ではない」

「だまれ」と山嵐は拳骨げんこつを食わした。赤シャツはよろ

よろしたが「これは乱暴だ、狼藉ろうぜきである。理非を弁じ

ないで腕力に訴えるのは無法だ」

「無法でたくさんだ」とまたぼかりと撲なぐる。「貴様の

ような奸物はなぐらなくつつちや、答えないんだ」とぼ

かぼかなぐる。おれも同時に野だを散々に擲き据えた。

しまいには二人とも杉の根方にうずくまつて動けない

のか、眼がちらちらするのか逃げようともしない。

「もうたくさんか、たくさんでなけりや、まだ撲なぐつてや

る」とぼかんぽかんとふたり兩人でなぐつたら「もうたくさ
んだ」と云つた。野だに「貴様もたくさんか」と聞いた
ら「無論たくさんだ」と答えた。

「貴様等は奸物だから、こつやつて天誅を加えるんだ。
これに懲りて以来つつしむがいい。いくら言葉巧みに
弁解が立っても正義は許さんぞ」と山嵐が云つたら
ふたりとも兩人共だまっていた。ことによると口をきくのが退儀
なのかも知れない。

「おれは逃げも隠れもせん。今夜五時までは浜の港屋
に居る。用があるならじゆんざ巡査なりなんなり、よこせ」と

山嵐が云うから、おれも「おれも逃げも隠れもしないぞ。堀田と同じ所に待ってるから警察へ訴え^{うった}たければ、勝手に訴えろ」と云つて、二人してすたすたあるき出した。

おれが下宿へ帰つたのは七時少し前である。部屋へはいるとすぐ荷作りを始めたら、婆さんが驚いて、どうおしるのぞなもと聞いた。お婆さん、東京へ行つて奥さんを連れてくるんだと答えて勘定を済まして、すぐ汽車へ乗つて浜へ来て港屋へ着くと、山嵐は二階で寝ていた。おれは早速辞表を書こうと思つたが、何

と書いていいか分らないから、私儀都合有之わたくしぎ之辭職の上これあり東京へ帰り申候につき左様御承知被下度候以上とかいて校長宛あてにして郵便で出した。

汽船は夜六時の出帆しゅつぱんである。山嵐もおれも疲れて、ぐうぐう寝込んで眼が覚めたら、午後二時であつた。下女に巡査は来ないかと聞いたら参りませんと答えた。「赤シャツも野だも訴えなかつたなあ」と二人は大きに笑つた。

その夜おれと山嵐はこの不浄ふじような地を離はなれた。船が岸を去れば去るほどいい心持ちがした。神戸から東京ま

では直行で新橋へ着いた時は、ようやく娑婆へ出たよ
うな気がした。山嵐とはすぐ分れたぎり今日まで逢う
機会がない。

清きよの事を話すのを忘れていた。——おれが東京へ着
いて下宿へも行かず、革鞆かぼんを提げたまま、清や帰った
よと飛び込んだら、あら坊っちゃん、よくまあ、早く
帰って来て下さったと涙なみだをぼたぼたと落した。おれも
あまり嬉うれしかったから、もう田舎いなかへは行かない、東京
で清とうちを持つんだと云った。

その後ある人の周旋しゅうせんで街鉄がいてつの技手ていずになった。月給は

二十五円で、家賃は六円だ。清は玄関げんかん付きの家でなくつても至極満足の様子であつたが気の毒な事に今年の二月肺炎はいえんに罹かかつて死んでしまった。死ぬ前日おれを呼んで坊っちゃん後生だから清が死んだら、坊っちゃんのお寺へ埋うめて下さい。お墓のなかで坊っちゃんの来るのを樂しみに待つておりますと云つた。だから清の墓は小日向こびなたの養源寺にある。

(明治三十九年四月)



坊っちゃん
夏目漱石 著

[[青空文庫図書カード](#)]

底本：「ちくま日本文学全集 夏目漱石」筑摩書房

1992（平成4）年1月20日第1刷発行

底本の親本：「夏目漱石全集2」ちくま文庫、筑摩書房

1987（昭和62）年10月27日第1刷発行

※底本の注にれば、本作品の原稿には、「そのうち学校もいやになった。」の後に、漱石自身による2字あけの指定があるという。このファイルでは、その情報にもとづいて、当該の箇所を2字あけとした。

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっていません。

入力：真先芳秋

校正：柳沢成雄

1999年9月13日公開

2004年2月27日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

PDF 変換

Editor : Tomoyuki Kawano

Tools : MacOS X 10.6.2(合成) + egword universal 2.0.2

Fonts : Web-O-Mints + DT Flowers + ヒラギノ